

---

# 翼の末裔

宗像竜子

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

翼の末裔

### 【Nコード】

N1105N

### 【作者名】

宗像竜子

### 【あらすじ】

彼等は『月』の民。その祈りは全てを癒す。

されど彼等は知らぬ。

己が何故、その背に翼を持つのか。その理由を。

穢れた大地と清浄たる『月』、そしてその穢れを癒すという『翼を持つ者』達の物語。

## Opening : Under the Moon

青年は放心したように、微動だにせず窓から見える、切り取られた空を見上げていた。

まだ少年の気配が色濃く残る、そんな彼の視線の先にあるのは――月。

夜の世界を支配する、そしてこの世界で最も遠く、最も清浄であるとされているもの。……もはや、彼にその加護はない。

吸い込まれるような美しいそれを見つめる事が唯一彼に赦された事のように、青年はその面を見つめるばかり。

青年は一人きりではなく、少し離れた場所に複数の人間が彼の拳動を見守るように立っていた。

特に彼に対して乱暴をしようとはしないけれども、決して友好的とは言えない目で青年を見ている。彼にとっては、その視線は今浴びている月光と同じ。

―― 相容れないモノ。

やがて痺れを切らしたのか、その中の一人がついに沈黙を破った。曰く――。

『罪人の身でありながらそんなにも月が恋しいというならば、お前に丁度よい役目がある』

青年はそれに対して何の反応も返さなかったが、彼等にはどうでもよい事だった。

彼が頷こうと、頷くまいと。もはやそれは決定事項と同義だったのだから。

彼等はそうして彼に告げる。

『お前の命を、一生涯、最も高貴なる方に捧げるがよい』

それは聞きようによつては祝福にも聞こえたし、また呪詛のようでもあった。

これでもう、彼は自分の意志で死ぬ事を禁じられた。その命が絶える時まで、生き続けなければならない。

唯一、彼の主たる存在が、その死を赦すその時まで。

……青年は、ただ黙つて空を見上げるばかりだった――。

## 翼（１）

その世界は、選ばれた者の《生命》と《祈り》で守られていた。彼等はその背に選ばれた証である翼を持ち、生後一年で成人する。その後、月にある《聖殿》へ昇り、死の間際まで夢を紡ぎ続ける。彼等が地上に残した《片翼》の幸福を祈りながら。

彼等は『翼を持つ者』—— エフェ「メンタール」。  
月に抱かれ、夢に住む、世界を守護する高貴なる存在……。

+ + +

生まれて初めてみた星空は本当に綺麗で、ファムルーはぽかんと口を開けてしばらく何も言えなかった。

代わりのように、その小さな背に可愛らしく生えている、やつぱり小さな小さな翼が、その素直な驚きを表すかのようにぱたと羽ばたく。

ファムルーが生まれたのが秋の終わり頃だったので、今夜空を彩るのは冬の星々だ。他の季節の星は知らないけれど、今見ている星がこんなに綺麗なのはきつと凍っているからだ、とファムルーは思った。

冴え冴えと輝く星は、触れるととても冷たそうだったので。

その星が散りばめられた贅沢な天幕に、それ以上に冷たく輝く銀盤が縫い付けられている。

月だ。

あまりに皓々と光るものだから、ファムルーは思わず少し目を細めた。

「…眩しいのですか？」

優しい声が降ってきて、ようやくファムルーは大きく一つ瞬きを

すると、声の主にその目を向けた。

身長差があるから、ほとんど見上げるような格好になる。ファムルーを、こちらは逆に見下ろす瞳は、声以上に優しくて安心する。

「あれ、つき？」

冷え切った大気に凍えないようにと、温かな毛で編まれた手袋に包まれた手で月を示すと、黒髪に黒い瞳の闇に溶けて消えてしまいそうな青年はそうですよ、と肯定してくれた。

もう片方の手を、彼の大きくて暖かい手が握ってくれているので、あまり寒さは感じなかったけれど、月があまりに大きく吸い込まれるように美しく、ファムルーは彼に抱き上げてくれるようにせがんだ。

じっと見ていると、何だかそれがとても怖いように思えたから――。

青年は軽々とファムルーを抱き上げる。せいぜい二、三歳程、言葉覚え始めたばかりのファムルーは青年の腕には軽く、すっぱりと収まった。

否―― たとえファムルーが成人間近の姿であっても、きっと人の何倍も軽いだろう。

何故ならファムルーは『翼を持つ者』―― エフェ「メンタール」この世界で最も高貴な存在とされる者なのだから。

元々、星の重力の束縛から自由である彼等が、幼児以上の重さになろうはずもない。

今はまだその象徴たる翼も小さく、普通の子供と何ら変わりがないのだとしても、成長するにつれてすぐに自由に空を駆ける程になるだろう。

その頃になれば、もはや青年が抱き上げるなんて到底有り得ない事だったが、きっと羽毛のように軽いに違いなかった。

青年の腕に抱きかかえられ、ファムルーは思わず歓声をあげる。彼と同じ目の高さは今のファムルーにはまだ珍しいものだし、触れ合う人の温もりが、何だか嬉しかったのだ。

エフェ「メンタールの時間は、只人に過ぎない青年のものとはまったく違う。」

青年が一つ年を取る頃、ファムルーは成人し、天に浮ぶ月へと昇る。彼等が今見ている、あの月に。

ファムルーの身の回りの世話は実にたくさんの女官によって行われていて、その御蔭でファムルーは言葉を覚えるよりも先に、エフェ「メンタールである自覚と意識を植え付けられていた。」

アナタサマハ・えふえ「めんたーる

コウキナル・オカタ

スコヤカニ・オソダチナサレマセ

イツカ・ツキヘノボル・ソノヒノタメニ

繰り返し繰り返し語りかけられた言葉を、無垢な心は受け止めた。月へ昇る事が当然だと思う程に――。

「あそこに、いくの？」

月を見ながら尋ねる。吐き出した息が白く染まって、何だか愉快的な気持ちになった。

そうですよ、と青年がまた肯定する。

彼はファムルーが自身の足で動き回り始めた頃に女官達によって付けられた。

万が一の際の護衛であり、好奇心旺盛な子供の遊び相手であり――ファムルーにとっては、一番身近な存在。

引き合わされてまだ半月にも満たないものの、すっかりファムルーは彼に心を許していた。

「あなた様は、いつかご自身の《片翼》を見出し……あの月へ行くのですよ」

淡々とした丁寧な言葉は女官達とも共通事項なのに、ファムルーは彼の言葉がとても好きだった。同じ事を言っている、そう思う。『声美しき者』—— リリユ＝メンタールの子守唄よりも、彼の静かな声の方が安心出来た。

生まれてすぐに実の両親から引き離され、父も母も知らずに育つエフェ＝メンタール。生後一年で成人してしまう彼等にも、愛情を求める感情は存在する。

だからファムルーは、青年に会った事もない父親の幻想を重ねていたのかもしれない。

「でも、いっしょ？」

だったらいいのに、と思いながら尋ねると、青年は微笑を浮かべた。

「いいえ… 私は行けません。あなた様のように翼を持っていませんから」

そう、背に翼を持つのはエフェ＝メンタールだけ。

ファムルーも心の底ではわかってはいたけれど、何故だかその答えがとても悲しくて、青年にしがみ付いた。

「ファムルー様？」

「…や。でも、いくのー！」

そんな我が儘を言ったのは、生まれて初めてだった。

女官達は理想のエフェ＝メンタールを育てようと、日夜ファムルーに淑女たる教育を施していたし、ファムルーも女官達には困らせるような事を言ってはならないように思っていたから。

対する青年は、困惑したのか途方に暮れたのか、しばらく黙り込んでしまう。困らせたかった訳でないファムルーは、その反応に泣きたい気分になった。

青年に嫌われるのは、とても悲しいように思えて。

「…ファムルー様」

けれど、ファムルーの目から涙が溢れる前に、青年の口から普段の優しい声が零れ、ファムルーを安心させた。

「なあに？」

しがみ付いていた身体を離し、ファムルーは青年の顔を視界に入れた。

やっぱりその目は優しく、怒っている様子はない。青年は少しだけ淋しそうに微笑んで、ファムルーに言う。

「私はあなた様と共に行く事は出来ません。ですが…私はあなた様が月に昇った後も、毎晩ここから月に向かって祈りましょう。あなたが幸せな夢を紡げるように」

「……？」

「エフェ」メンタールの祈りには程遠いですが、祈りはその祈る先に辿り着ける力があるのだそうです。私の身体は共には行けません、心はあなたの元へ行きますよ」

「ほんとう？」

「ええ、本当です」

…それは青年の本心からのものだったのか、それとも若い主人を慰める為に青年がついた嘘だったのか。

けれどもその言葉はファムルーには望んでいた言葉そのものだった。

嬉しくなつてぎゅっと抱きつくと、大きな掌がファムルーを支えてくれる。

他人行儀でしかない女官達からは得られない人の温もり。それこそが、ファムルーにとって何よりも大切なもの。

月に昇り、この世界を守る為に夢を紡ぐのがエフェ」メンタールに課せられた使命。幼いなりにそれはわかっていたけれど、やっぱり何だか怖れもあった。

でも、青年が——心だけという状況がどんなものかわからなくても——一緒に居てくれるのなら大丈夫。そんな風にファムルーは思ったのだ。

抱きついたまま見上げた月は、もう怖いものではなくなっていた。ただ静かな光を投げかけ、こちらを見下ろす美しい何か。その時

の光景は、その後ファムルーが長じても、いつまでもファムルーの中に残り続ける事となった。

∴そして、青年が月へと行けなさと告げた理由が、単に只人である事とは別にある事をファムルーが知るのは、それから半年程後の事だった。

翼(1)(後書き)

110624 / 挿絵追加

## 翼（2）

季節は秋の始まり。

先日までの暑さはもうすっかり消えて、風が涼しい。心地良い微風を受け、長い白銀の髪がふわりと空を舞った。

（気持ちいい……）

目を閉じて風に身を委ね<sup>ゆだ</sup>、そうして、赤く泣き腫れた目を冷やす。……久しぶりに、大泣きした。物心ついてから、泣くような事はほとんどなかったけれども、多分その中でも二番目くらいだろうか。一番はこの春先。きっと、あれ以上に泣く事はもうない。

（……デイスパー、心配してるかな）

思わずそんな事を考えて、彼女——ファムルは慌てて頭を振ってその考えを追い払った。

エフェ＝メンタールたる彼女は、今ではもうすっかり成長していた。十七・八歳程のその姿は、養育をしてきた女官達が自慢に思う程にエフェ＝メンタールに相応しい。

すらりと伸びた手足。白い肌。真っ直ぐな白銀の髪に、紫を帯びた青い瞳。そしてその滑らかな背に生える、白く大きな翼。

絶世の美貌とまではいかないが、その可憐な姿は見る者に一種の感銘を与えるものだった。

成人まで、あと僅か。月へと昇る日が近付いている。

（……）

その日を思つて、ファムルは地上を見下ろした。

空を飛びまわれるようになったのは生まれて三ヶ月が経つ頃。楽しくて嬉しくて、あちこち飛び回っては女官達を慌てさせた。

——性格だけは、女官達の理想通りには行かなかったようだ。本人は特にそれを気に病んではいなかったけれども。

（……何処にいるんだろう）

ファムルは焦っていた。何故かと言えば……まだ《片翼》が見つ

かっっていないからだ。

《片翼》は、地上においてエフェ＝メンタールの祈りを受け止める存在。言わば、対となる者だ。

こればかりは女官達が連れてくる訳にもゆかないし、ファムルー自身が見出さなければ意味がない。

そして《片翼》がいなければ、ファムルーはエフェ＝メンタールとしての義務が果せなくなる。

（何で…見つからないの？）

通常、エフェ＝メンタールは空を飛べるようになった時点で、自らの《片翼》を見出す為に《浄育宮》と呼ばれる宮殿から、時間に限られるものの単身出る事が許される。

月にある聖殿と近い環境に整えられているという浄育宮と、実際に目の当たりにした地上は一見したところではそう変わらないような気がした。

けれど、そこに住まう人々達の目に空を駆けるファムルーに対して、畏怖のようなものがある事はそう時を置かずともすぐにわかった。

彼等にとってエフェ＝メンタールであるファムルーは、畏れ敬う存在であって、それ以上でも以下でもない。

…同じ高さに立つてはくれないのだ。決して。  
育ててくれた女官達と…ディスポー、物心つく頃から側で彼女を守ってくれたあの青年と同じように。

それがわかってしまったから、余計にファムルーは《片翼》を求める気持ちが高まった。

《片翼》—— 地上の民でありながら、エフェ＝メンタールに選ばれた対となる者。

男でも女でも構わない。その人物なら…きっと、ファムルーを『ファムルー』という個人として認めてくれる。そう思えたから。

しかし、月へと昇る日を目前にしても、ファムルーの《片翼》は見つからなかった。

エフェ＝メンタールはほとんど突然変異のようにして生まれてくる。

エフェ＝メンタールの両親から子が生まれる事はないし（何故なら彼等は月へ昇った後、地上に戻る事はない）、エフェ＝メンタールと地上の民の間に子が生まれる事もない（エフェ＝メンタールの九割が女性で、一年で成人した後すぐに月へ昇る為だ）。

それだけ生まれてくる確率が低い為、ファムルーは自分以外のエフェ＝メンタールに会った事がない。月へ昇れば会えるけれども、それではあまり意味がない。

女官達の話によれば、飛べるようになったエフェ＝メンタールは早くて一月程で自身の《片翼》を見出すという。けれど、それがどういふ感情によってわかるのか、当然女官達にわかるはずもない。

（時間がない……）

もし、その時まで《片翼》が見つからなかったらどうなるんだろう。

この頃、よくそんな事を思う。エフェ＝メンタールとして培われたその自覚と意識が、彼女を雁字搦めに縛る。

女官達はファムルーを気遣って何も言わないけれど、彼女達にはきっと不名誉な事に違いない。出来そこないのエフェ＝メンタールを育ててしまったという汚名を、被ってしまうかもしれない。

…彼女達だけでなく、彼も。

考えないようにしようと思っても、やっぱりファムルーの思考は彼へと辿り着く。

ずっと彼女の一番近くにいて、一番信頼している彼に。

『焦る事はありませんよ。きっと見つかります』

彼はファムルーが焦っている事を誰よりも先に気付いた。

もう、子供ではないからと、半年前…あの今までで一番大泣きたあの日から常に一緒にはいてくれなくなったものの、不思議と彼

はファムルーを一番理解してくれる。

でも、時としてそれはファムルーには何より辛い。

今日も、そう言つて慰めてくれた彼に一方的に突っかかつて、それでも怒りもしない彼に腹を立てて飛び出して来たのだった。

(…もし叶うなら、デイスパーを選ぶのに)

もしかしたら、そういう想いこそが《片翼》を見出す事の妨げになつて居るのかもしれない。たまにファムルーはそう思い、けれどその想いを捨てる事は出来なかった。

決して彼は、《片翼》にはならない。逆を言えば、だからこそ彼は彼女の護衛として側に置かれたのだと言つてもいい。

そうと知つて、ファムルーは一日泣き通した。なんであんなに涙が出たのか、今はわかる。

あの頃から、自分は彼を心の内では選んでいた。彼が好きだったのだ。

でも——それは叶わぬ夢。

ずっとずっと子供だった時、彼は自分に祈つてくれると言つてくれたけれど、彼は決して自分の祈りを受け止めてはくれないのだ…。

+ + +

『デイスパーのばかあつ!!』

泣き腫らした目が、頭から離れない。飛び立つ最後の言葉が、耳から消えない。

彼は一人、ため息をついた。

自分が側で見守つてきたエフェィメンタル、ファムルーはこの頃情緒不安定で、流石の彼もどう扱つていいのか思案してしまう。

普通の民の少女なら『お年頃』で済まされる事だが、エフェィメンタルである彼女にはそれは許されない。

彼女が成人する——すなわち、月へと昇る期日が着実に近付いているからだ。時間にすれば、あと半月強。

表には出さないが、彼女付きの女官達もこんな事態が起こると思ってもみず、困惑しているようだった。

こんな……成人ぎりぎりまで《片翼》を見出せないなど、今まで嘗てなかった事らしい。

気の毒に、と彼——デイスパーは思う。

ただでさえあんなに早く成長するというのに、月に昇った後はずっと夢の中に生きなければならない。

それだけでもなんて不自由な一生だろうと思うのに、恋すらも急いで見つけなければならぬとは。

そう……誰もはずきりと言わないし、そして認められてもいないけれど、エフェ＝メンタールの《片翼》は恋人と同義なのだ。

相手が異性でも同性でも、恋い慕う想いこそが彼等の祈りを地上に届ける。

エフェ＝メンタールの、対の幸福を願う祈りは地上を確実に癒す。エフェ＝メンタール自身は恐らく知らないままだろうが、この大地は呪われた場所だった。

人が暮らすには、あまりに過酷な場所。一見平和そのものに見えるが、大気には人の自由を奪う毒が含まれ、大地には人の生命を縮める毒が含まれる。

その毒を中和するのが、エフェ＝メンタールの祈りの力。

彼等が星の呪いから解放された月から祈ってくれるから、地上はかろうじて人が生きられる環境になっているのだ。

最も高貴な存在と崇めるのには、それなりに理由があつての事。デイスパーには彼等が生け贄のように思えてならなかった。

(……無事に戻って来られるといいけれど……)

大地の汚れからエフェ＝メンタールを守る為、浄育宮は一般の人々が暮らす平野部から離れた高地に置かれている。

人の足では《片翼》を捜しに出たエフェ＝メンタールを捜しに出

る事はまず不可能だった。

不安が募る。ファムルーが一人で飛べるようになった頃から、彼が守る為に側にいる事は少なくなった。

：甘えん坊で、何処となく頼りないあの少女は、今頃何処で何をしているのだろう。

『デイスパーには、わたしの気持ちなんてわからないのよ！』

涙で訴えた彼女。でも、彼女こそわかっているのだろうか？

こうして、彼女が無事に戻る事を祈るだけしか出来ない、彼の気持ち。

決して自分の物にならない翼を見守るしかない、この気持ちを――

思い出すのは、彼女が子供だった頃の――彼にとってはほんの一年程前の事。星が綺麗な夜だった。

彼と一緒にでないと嫌だと駄々をこねたファムルーの、たどたどしい言葉と、しがみ付いてきた小さな温もり。

あの暖かさに、何だか純粋に感動した。

あんな風に彼に触れる者がまた現れるなんて、夢にも思っていないからかもしれない。

：あの時の誓いは今も胸の中にある。そしてこの誓いが失われる事はないだろう。

ただ、きつと彼の祈りは彼女の元へは辿り着けない。あの美しくも遠い、あの月まで届かないだろう。

彼が彼女の祈りを決して受け止められないように……。

### 翼(3)

何故なら、彼は罪人。

『地を這う者』—— アジェエメンタルと人々に蔑あやままされる存在。

この世で最も高貴なる存在が、この世で最も卑しく汚らわしい者に祈る事など、この世界で許される訳がないのだ——。

+ + +

気がつくと、すっかり空は夕暮れの色に染まっていた。

ちよつと翼を休めようと、高い木の枝に腰を降ろして、そのままうたたね転寝をしていたらしい。

「帰らなきゃ……」

結局、今日も見つからなかった。諦めは尽きないが、日が落ちてしまふ前に戻らなくてはならない。

外の世界へ出るようになって、ずっと言い含められていた事だ。その実際の理由は知らないけれども、実際、夜になってしまつたら地上は完全に闇に閉ざされてしまふ。大部分の人は家にこもつてしまふし、そうなつたら《片翼》も捜せもしない。

でも、何だか戻りたくはなかった。

戻れば、彼—— デイスパーと顔を合わせる。きっと困らせたら謝らなくてはならない。でも、何だか謝つてしまふのは嫌だった。彼は笑って許すに決まっている。あの優しい大好きな笑顔と声で、ファムルーの事を許してしまふ。

それが嫌だった。嫌われない訳じゃないのだし、どうしてそう思うのかファムルーにはわからない。でも、そう思う。

……ちよつと眠っている間に、嫌な夢を見たからかもしれない。

あの、春先の彼がどうして《片翼》になれないのか知った時の。

今までで一番大泣きをした時の、記憶。

『ファムルー様もそろそろですわね』

日に日に育つファムルーに新しく服を作るべく、あちらこちらの寸法を測っている時だった。

ふと思いついたように女官の一人が言い、そこにいた女官達も本当に、とにこにこ嬉しそうに頷くので尋ねたのだ。

『何がそろそろなの？』

すると、女官はファムルーの背に育った美しい翼を眺めて、『片翼』の事を話してくれた。

以前にも聞いてはいたものの、実際どういうものかまでは知らなかったなので、聞いていて何だかどきどきした。

けれどまだ何も知らないファムルーが、無邪気にデイスパーの名を出して彼がいいと言った時、女官達は全員驚き、すぐさまとんでもないとばかりに否定したのだ。

それはあつてはならない事だと。

そんな事は初めてで、訳がわからなかった。どうして駄目なのか、理由が思いつけなかった。

女官達はファムルーの想いを、最も身近な異性への憧れ程度にしか思っていなかったからか、彼がどうしても『片翼』になれないのか事細かに教えてくれた。

—— 曰く。

『あの者は罪人なのです。エフェ＝メンタールの祈りを受ける資質も、その恩恵を受ける価値もないのですよ。…だからこそ、エフェ＝メンタールをお守りするのに役立つのですが』

…その時の衝撃は、今思い出しても涙が出そうだ。

あの優しいデイスパーが罪人だという事、そしてそれ故にファムルールの《片翼》にはならない事。

あまりに悲しくてそのまま部屋に閉じこもって泣いていたから、そう言えば彼がどのような罪を犯したのかまでは聞いていない。

(…でも、聞きたくもない)

彼の罪を知って、それでも変わらずに想えるかと問われれば、もちろん胸を張って答える事ができる。だって、彼は彼だ。

ファムルールにとって、過去の彼と現在の彼にどれほどの差異があるうと、自分が知っている事が全てだから。

あたたかな手。優しい眼差し。彼が人の温もりを自分に与えてくれた事実は変わらない。

『私の事でお心を乱してしまってて申し訳ありません。確かにわたしは罪人です。本来ならあなた様の側にいる事すら許される身ではありません。…私は自分で何かを決める事も許されません。もし、お側に仕える事がお嫌なら、どうぞ暇を……』

あの後、事の顛末(とは言っても、女官経由でファムルールが泣いた本当の理由を知ったの上ではなかったようだ)を聞いてやってきたデイスパーがと扉越しに言った時、その声がとても苦しげに聞こえて慌てて姿を見せた。

あの時だ。自分が彼が罪人であろうと本当に好きなのだと自覚したのは。

だから…聞かずにいようと思った。

自分は変わらないという自信がある。けれど、それによってデイスパーの自分に対しての態度が変わってしまうのではないか、と不安に感じたから。

(いっそ、時間が止まってしまったらいいのに)  
そんな事を考える。

そうしたら、《片翼》を焦って探す必要もなく——ディスポーと共にいられるのに。

視線を向けた先には、宵闇に浮び始める月の姿があった。昔はあんな綺麗な月へ行くのかと心が躍ったものだが、今ではただ憎らしい。

せめてあんな遠くではなくて、地上の何処かに《聖殿》があれば、そうすれば、ディスポーの側にはいらなくても、彼と同じ空の下で生きてゆけるのに。同じ大地の上で繋がっていられるのに。

けれど、エフェーメンタルであるファムルーには、そんな事すら許されない。地上からはどんなに手を伸ばそうとあの月には届かない。そして、逆も然り。

一度月に昇ったエフェーメンタルが地上に戻って来た事など、未だ嘗てないという。だからきつと、月へ行ってしまったらもう二度と会えない。

——エフェーメンタルでなかったなら。

そんな風にも、もちろん考えた。それでも、エフェーメンタルであったからこそ、ファムルーはディスポーと出会えたのだ。そうでなかったら、出会えたかも怪しい。

世界は広く、ファムルーの知る世界はごく限られたものでしかない。

彼が元々何処にいたのかは知らないが、他に彼と同じ黒い髪と瞳をもつ人間をこの辺りで見かけた事がないから、きつとこの近辺ではないのだろう。

もしくは、もっと早く生まれていたら。

ディスポーが罪を犯す前に見出せていたら、彼を《片翼》とする事が出来ただろうか？

…そういう事ばかり、考えてしまう。

そんな事を考えている場合ではないのに。今はそれよりも一刻も早く《片翼》を見出す事が大事なはずなのに。

結局行き着くのは、彼以外は選べないということ。

まるで刷り込まれたかのように、彼以外が《片翼》になるなんて考えられないというのが本音だった。

…決して、彼を選ぶ事は出来ないのに――。

堂々巡りの物思いを打ち切って、ファムル―は空へ舞い上がった。もう空の端は夜の色に染まっている。どんなに嫌でも戻らなくてはならなかった。

結局、この地上でファムル―が帰れる場所は浄育宮しかないのだ。ファムル―は自身の背に広がる真っ白な翼を見た。女官だけでなく、デイスパーも美しいと誉めてくれた翼。

けれど背にこの翼がある限り、人に紛れて地上に生きる事も出来はしない。

薄闇に仄かに光る翼を見ると、彼とは違う生き物である事を思い知らされるようで、それはとても切なかったけれど。

ファムル―は一度大きく羽ばたくと、迷いを断つように勢いよく闇が広がる方角へと翼を進めた――。

## 翼（４）

もう日没だと言うのに、ファムルーが戻ってこない。そのせいで、浄育宮は右往左往の大騒ぎになっていた。

女官達は最後に彼女と一緒にだったデイスパーに詰め寄り、声高に責め立てる。

実際、彼に非があるかどうかはどうでも良く、彼女達は自身の不安の捌け口が欲しいだけなのだ。それがわかるから、彼は黙ってその声を受け止めた。

それに…原因が自分にあるような気がしなくてもなかった。

（…ファムルー様……）

彼の後をちよろちよると付き纏っていた幼い少女。

エフェ「メンタールにしては感情豊かなその表情。成長してからもその朗らかさは変わりなかった。

その彼女があれ程に泣き、彼を詰ったのはきつと彼に何か非があったからに違いない。どのような非なのかは、ファムルー自身に尋ねなければはつきりとはわからないが。

月へと昇る日が近づくにつれて、彼女の顔から笑顔が消えたのを彼は知っている。女官が話し掛ければ微笑んで答えるけれど、それは明らかに作り物だとわかる笑顔だった。

ずっと側近くで彼女を見守ってきた彼にはわかってしまう。

きつと、《片翼》がいつまでも見つからない事を気に病んでいるのだと思った。

だから何とか慰めたくて焦る事はないと言ったものの、心の底でファムルーが《片翼》を見出さなければいいとすら思っていた事は事実だった。

…口が裂けても絶対に認める事は出来ないけれど。

この罪を負った身で、至高の者に想いを寄せるなどあってはならない事。その感情の種類がなんであれ、それだけで罪の上塗りにな

るだろう。

（…やはりあの時、離れてしまえば良かった）

彼がアジェーメンタルだと彼女が知ってしまった時に。

暇乞いをした彼を、ファムルーは引き留めた。真つ赤に泣きはらした目で、彼のせいではないと言ってくれた。

——今まで通りに側にいて欲しい、と言ってくれた。

それでも自分が罪人と知られてしまつてから、あの純粹無垢な存在の側に何事もなかったようにいる事は苦痛で、何かと理由をつけて彼女から距離を置いた。

あの時から、ファムルーの彼に対する目が何処が変わつたような気がしてならなかったのだ。

何がどう変わったのか、彼自身よくわからない。ただの気のせいなのかもしれない。けれどそう思えた。

女官達がたまに見せる蔑むみづすようなそれとは違う。けれど、それまでの無心に好意を寄せてくれた目とは違う。

それが少し淋しく思ったものの、側にいて欲しいと言ってくれたあの言葉は本物だと思いたかった。

そう——離れられなかったのは、自分の方なのだ。

一度は断罪すら受け入れようとした身なのに、今はもう彼女の為以外にもは死ねないだろう。せめて、彼女が無事に月へと昇るのを見届けるまでは。

女官達が彼を責めるのに飽きてきた頃合いを見計つて、彼はその場から抜け出した。

もし彼女が戻ってくるなら、正面の入り口ではなく飛び出していた中庭のように思えたからだ。それに、夜の闇に沈んだこの宮殿を、ファムルーが見つつけ出せるとは思えなかった。

彼は灯りとなる松明を用意し、庭の中程で火をつけたそれを持つて立つた。

空の上からこれを見つけ出せるかわからなかったが、せめてこの灯火ともしびが目印になればとそれだけを思う。

幸運にも、彼は夜通し起きて動く事には慣れていた。まだ、アジエ「メンタール」となる前、彼はよく松明を片手に夜道を進んだものだ。

村から村へ、街から街へ。旅は彼にとっては日常的なものだった。……もう、あれから三年にはなる。そう思うと、デイスパーは不思議な気持ちになった。

罪を犯したあの時、もう自分の心は死んでしまったとばかり思ったのに、今もこうして生きて、笑えて、誰かの事を想っている。

忘れがたい罪の記憶も、今は目を背けずに見つめる事が出来る。その全ては、ファムルーが彼に与えてくれたもの。

(……どうか、無事に……)

祈りには、その祈る先に辿り着ける力があるのだと、かつて彼自身が語ったこと。

ならば今のこの祈りも彼女に届くといい。そうして、もし彼女が迷っているのなら導きとなるといい。

空には、かつてファムルーと見上げた時のような見事な星空。そして、今日も美しい月。

あの輝きにはとても敵わない。けれど、彼の灯火が彼女の目に映る事を願わずにはいられなかった。

+ + +

(どうしよう)

ファムルーは途方に暮れた。身体で覚えているとばかり思っていたのに、浄育宮らしき建物が見つからない。

周囲の鬱蒼とした木々に紛れてしまっているのか、それとも見落としてしまったのか。

今更ながら、何故つまらない意地を張ったのだろうかと後悔する。どちらにせよ戻らなければならなかったのなら、何故もっと早く行動に出なかったんだろうか。

…そんな事を思っても後の祭りだ。

いつそ、何処かで夜が明けるのを待つべきだろうか。

けれど、今まで浄育宮で大事に育てられてきたファムルーは、その辺で野宿などする必要もない生活をずっと送っている。そんな彼女に、夜露を凌げる場所もなしにそのような事が出来ようはずもなかった。

（…どうしよう）

引き返して、村々の民に助けを求めるべきだろうか。

きっと彼等はエフェ＝メンタルである彼女を追い返しはしないだろう。おそらく、最大限のもてなしをしようとするに違いない。

でも、そうするのは何だか気がひける。それ以前に、ずっと女官達だけに囲まれて育ったファムルーには見知らぬ人々の中に入るのは何だか怖いようにも思えた。

秋の夜は、急激に冷える。

すっかり身体は冷え切り、翼も疲れてきた。そのせいかわからないが、身体が何だか重い。

（デイスパー…助けて）

まだ子供だった頃、そう願えばいつも彼が助けに来てくれた。

飛べるようになってすぐ、夢中になって中庭の一番大きな木の天辺まで昇って——そしていざ降りようと下を見た瞬間、あまりに高くて身が竦んで動けなくなった事があった。

あの時も、一番に彼が気付いてくれて、怯える彼女を優しく宥めてくれた。落ちても必ず自分が受け止めるから、と。

でも今、ここに彼はいない。

励ましてくれる言葉も、安心させてくれる眼差しも何処にも見えない。

（怖いよ……）

こんなに、世界が広いなんて感じたのは生まれて初めてだった。何処までも闇が広がる。月はあるのに明るいのに、星はあるのに輝いているのに、何故こんなに地上は暗いのだろう。

たった一人きりで、こんな所にはいたくなかった。

でも、仮にファムルーが助けを求めた声が届いたとしても、彼にはどうする事も出来ないに違いない。彼には翼はないし、ここは浄育宮でもない。

何処であるのかさえも、わからない。

怖くて心細くて、涙が出そうだ。泣いたって何にもならないと思うから、必死に堪えてはいるけれど、時間の問題だろう。

(怖い——!!)

もう、前に進んでいいのか、引き返すべきなのかもわからない。宙で動けなくなったファムルーの目から、ついに涙が零れ落ちかけたその時だった。

…サマ……

(え……?)

…ふぁむるーサマ・ドウカ・ゴブジデ……

(…声?)

確かに、微かながら声が聞こえたような気がした。それも、錯覚でなければ今ファムルーが一番側にいて欲しい人の。

(デイスパー?)

慌てて周囲を見回す。眼下に広がるのは、当然ながら先程と変わらぬ夜の森。彼らしき姿など、何処にも見えはしない。

けれど、空耳だと片付けてしまう事は出来なかった。

たとえそれが限りなく幻に近いものであっても、彼の声が聞こえるのならそれだけで心が救われる。頑張ろうという気になれる。

そうだ、ここで挫けてはいけない。浄育宮で、きっと彼はファムルーを待っている。

一刻も早く戻って、彼を安心させなければ。そして——謝るのだ。

彼はこの空の下で、自分の無事を思い、祈ってくれているに違いないのだから——。

ファムルーは気を奮い立たせ、声が聞こえてきた気がした方向へ身体を向けると、再び翼を広げて羽ばたいた。

もう彼の声は聞こえなかったが、不思議と先程までの迷いは消えていた。

黒々とした夜の森を眼下に見ながら、ファムルーは飛ぶ。

銀の月光をその背の翼に受けて空を駆けるその姿は、もし地上から見る者がいれば、おそらく目を奪われたに違いないほど美しい。

それはまさに、エフェーメンタール——『翼を持つ者』に相応しい姿だった。

## 翼（5）

どれ程飛んだ事だろう。

ファムルールの目は、闇に瞬く弱々しい光を捉えた。

闇ばかりが広がる中、その光は今にも紛れて見失ってしまいそうだったが、見間違いではないようだ。

（あれは）

それを見出した事が、肉体的にも精神的にも疲労したファムルーにさらなる力を与えた。

確信ではない。予感でもない。

ただ、そうであればいいと思った。あの光の元に、自分が一番会いたい人がいるのだと――。

（デイスパー……！）

祈るような気持ちで、空を駆ける。少しずつ確かになってゆく光。それと同時に、闇に沈んだ見慣れた建物が見えてくる。

―― 浄育宮だ。

生まれた時から暮らしていて、一日も満たない時間しか離れていないのに、こんなに懐かしく慕わしいと思ったのは初めてだった。やがて、光の正体が中庭で誰かが持つ松明の灯りである事が知れる。そこに求める人の姿を見つけて、ファムルーはほとんど飛び掛る勢いで地上を目指した。

地上で沈痛な面持ちで空を見上げていた青年の目が、彼女を見つけて大きく見開かれる。その唇が確かに彼女の名を紡いだのを、ファムルーは見逃さなかった。

「デイスパー……！」

翼を畳むのもどかしく、彼に抱きつく。

青年は驚き、慌てて松明を出来るだけ遠くに離れた。

「……ファムルー様！ 危ないですよ……！」

「あ、ああ、ごめんなさい……」

ようやく我に返り、ファムルーは慌てて身を離した。

いくら何でも、松明を持っている人間に抱きつくなんて危険この上ない。それに、下手に自分が怪我しようものなら、彼が女官達に責められてしまう。

「あ、あの……」

しかし、我に返ってしまつてしまうと、今度はまともに言葉が出て来ないのだった。彼には言いたい事がたくさん、あつたはずなのに。

するとそれを見透かしたかのように、デイスパーは普段と同じ穏やかな笑顔を浮かべた。

「ご無事で何よりです、ファムルー様。…お帰りなさいませ」

「……」

何だかその言葉で、これまでの心細さやら何やらが一気に押し寄せてきた。腰が砕けたようにペタリと座り込むでしまふ。

そんなファムルーに驚いたようなデイスパーの顔を見ながら、ファムルーはぼろぼろと涙を零した。

「こ…怖かった……っ」

ようやく安心出来る場所に辿り着いたせいで、心の箍たがが外れてしまったのかもしれない。

今日はよく泣く日だと、ファムルーは頭の片隅で思ったけれど、涙はどうにも止まりそうになかった。

「も…戻れないかと…思……っ」

「…ファムルー様……」

座り込んでしまったファムルーを、デイスパーは困惑したような表情で見つめる。

余計に困らせてしまったのかもしれない、そう思っていると、デイスパーは松明の火を消して地面に置き、ファムルーの元へ歩み寄ってきた。そしてそのまま、ファムルーの視線の高さに合わせるかのように膝をつく。

「一人で心細かったのですね」

「う、うん……」

「もう、大丈夫ですよ。ちゃんと戻ってこれたのですから」

「うん……」

あやすような言葉に、ファムルは涙を零しながら、ただ頷く事しか出来なかった。まるで子供の頃みたいに。

でも、昔とは違う事が一つ。ファムルは腕を伸ばし、自分を覗き込むデイスパーの首に回した。

「……！」

先程とは別の意味で驚いて、デイスパーが息を飲む。

咄嗟に声も出せなくなった彼に、ファムルはしっかりと抱きつく。――抱き締める。

「……わたし、デイスパーが好き」

ついに口にした。自分の腕に感じる、彼の温もりは一年前の星空を見た時と同じ。感じるだけで嬉しくて、安心出来る。

「一人でいる時、デイスパーの事ばかり考えてたの」

「……ファムル……様……」

「わたしは……あなた以外の人はいない」

彼の目を真っ直ぐに見つめ、断言した。途方に暮れたような、彼の表情が胸に痛かったけれど、もう止められない。もう……譲れなかった。

自分の《片翼》は、彼以外に考えられない。

「――なりません」

やがて、デイスパーの口から零れたのは、弱い苦痛に満ちた言葉だった。

半ば予想していた言葉だったのに、やはり彼本人から告げられると身を切られるように辛い一言だ。

デイスパーは、まるで彼女の視線に耐えられない様子で目を反らす。

「……あなたも知っているでしょう。私は罪人……アジェ「メンタール」なのです。あなたの祈りを受ける価値もない存在です」

「関係ないわ」

彼の告白を、ファムルーは一言で否定した。ここで引き下がる訳にはゆかない。

「あなたが罪人だろうと、何であろうと…わたしはあなたの事が好きなんだもの」

「…ファムルー様。それは違います。あなたはただ…一番身近にいた私を特別であるように思ってしまっただけです。私は…この世で最も高貴な…エフェーメンタルであるあなたが想って下さるだけの人間ではないのです」

「…どうして？ わたしがあなたを好きになる事がどうしていけない事なの？ 一番身近だったから…特別に思ってた方がいいの！」  
相手が罪人であろうとなかろうと、共に過ごした時間に偽りはなかったとファムルーは信じていた。

一番側にいたから、というのは確かに理由の一つかもしれない。けれど、やはりこの気持ちを決定付けたのはそれだけではないのだ。しかし、デイスパーは痛みを堪えるように頭を振った。そして今まで誰も明らかにしなかった彼の罪を口にする。

「それは—— 私が、人殺しだからです」

+ + +

彼女は、彼の手が好きだとよく言っていた。

大きくて温かくて、とても安心出来るのだと。

…だから、自分の生命もその手で断って欲しいのだと、満足に話せなくなった口で彼女は告げた。

『…ね？ お願い……。わた、しの最後の、わがままを…聞いて、て……？』

何処か狂気を漂わせた瞳は、彼を追い詰めた。

彼には彼女の身を苛む苦痛さいなを理解出来ない。死を望むほどの苦痛を味わった事もない。

痛みが彼女を狂わせてゆく。

そして、苦しむ彼女の姿が—— 彼を責める。

殺して、と血を吐くような声で叫び、痛み能耐えきれず暴れる彼女を押さえつけながら、彼は思う。

人の命を奪うその行為は、罪。

けれど、それで彼女が楽になれるのなら……それしか方法がないのなら——。

選らんだのはどちらが先か。

気がつけば彼の手は彼女の首に回り。

彼女はこれ以上とない安らかな顔で、その手を上から押さえた。もう力も入っていないはずのその手は促す。

さあ、終わりにしよう——。

どちらも泣いていた。

彼女は喜びに泣き、彼は絶望に泣いた。

最後に彼女は、『ごめんなさい』と呟いた。

それは彼を罪人に堕とす事への謝罪だったのか——。

彼もまた『ごめん』と呟いた。

それは何に対しての謝罪だったのか——。

事切れた彼女を抱き、彼は呆然と窓の外を見た。

その身体は痩せ細り、子供のように軽かった。その事実が、胸に痛い。

空に浮かぶは清浄の月。

そこに住まうという佳人は、この地上を癒す為に夢を紡ぎ続けて

いるという。

(…どうして)

胸に湧いたのは、そんな疑問。

どうして、もっと側にいなかったんだろう。

愛していたのに。大事だったのに。

こんな風に失くしてしまうのなら、せめてもっと同じ時間を共有すれば良かった。

彼女はきつと、ここで一人あの月だけを慰めに日々暮らしていたのだ。

自分がない間、たった一人で。

月は彼女のために、何もしてはくれないのに。

彼女が好きだと言った自分のこの手は、彼女の命を摘む以外にももっと出来る事があつたはずなのだ。

あの手の届かない月ですら、彼女の心の慰めになっていたというのに――。

悔恨と絶望の中、罪人となった彼はただ月を見上げる。

せめて彼女の魂が、もう二度と苦しむ事のないよう祈ること。

それしか、彼に出来る事はなかったから……。

## 翼（6）

「私には、昔…結婚を約束した者がいました」

「……」

「もう、三年も前の話です。彼女は…死の病に罹っていました」  
…それは半ば嘘だった。

病などではなく、寿命で死にかけていたと言っべきだろう。

けれど、何も知らないファムルーにそう言う事は躊躇<sup>ためら</sup>われた。

ここは、人が暮らすにはあまりに過酷な世界。

大気と大地に含まれた生命を縮める毒は、ゆっくりゆっくり時間をかけて人の寿命を削ってゆく。

身体があまり丈夫でない人間は、二十歳を前に衰弱し、そのまま死んでゆく事がほとんどであり、彼女もそういう者だっただけのこと。

ただ彼女が他の者と違ったのは、自分の意識がある内に、最愛の者の手で最後を迎えたいと願った事だった。

「…その病は、人にこれ以上とない苦痛を与えるものでした。彼女は日毎夜毎に襲ってくる痛みに耐える事が出来ず、このままでは狂ってしまつと…そう言っていました」

オネガイ！ モウ、コロシテ！！

イタイノ、クルシイノヨ！！

オネガイダカラ、モウ…オワラセテ……！！

「私は彼女を愛していた。だからこそ…最後まで生きていて欲しかった。でも、それは彼女を苦しめるだけなのだと気付いた時…私のこの手は……」

手をかけた首は、すっかり細くなっていた。

痩せこけた身体に似つかわしく、ほんの少し力を入れれば折れる

のではないかと、そう思える程に。

彼女は苦痛に喘ぎながら、それでも微笑を浮かべていた。  
そして、最後の言葉を彼に遺した。

ありがとう……ごめんなさい……。

それは、願いを聞き届けてくれた彼への感謝の気持ちと愛情、そしてその結果、彼が辿る行く末に対する謝罪の言葉。

その言葉を聞いた後の事は、もうよく覚えていない……。

「私は罪人です。アジェエメンタルの中でも最も罪重き、殺人を行った者です。人の命を奪う事で汚れたこの身は、あなたには相応しくない……。」

「……」

ついに過去の罪を告白した。今まで誰にも語らなかった、思い出すだけで痛みを伴う記憶を。

けれど、心の何処かが軽くなるのをデイスパーは感じていた。

ファムルーは最後まで神妙な顔をして、彼を見つめていた。その吸い込まれるような瞳に、彼の姿が映っている事が何だか不思議に思える。

背に翼を持つ、至高の存在。彼にとって、今現在、最も大切に思う人が彼を見ている。

そこには蔑みも、哀しみも怒りもなかった。

やがて、ファムルーは一度瞬きすると、涙の気配の消えた瞳を彼に真っ直ぐ向けたまま、そっと微笑んだ。

「ファムルー、様……?」

思いがけない反応に、デイスパーの方が混乱する。そんな彼を余所に、ファムルーは口を開いた。

「デイスパー、あなたの何処が罪人なの?」

「……え?」

驚いて目を見開く彼に、ファムルーは静かな笑顔のままで言う。

「わたしには、あなたがやっぱりとても優しい人のようにしか思えないわ。確かにあなたは人の命を奪ったのかもしれない。でも、あなたの…大事な人の心は守られたと思うの。自分が罪人になってまでその願いを叶えてあげたのは…きつと間違いじゃなかったのよ」  
「そこまで想われた彼女が、少し羨ましいとファムルは笑った。  
「それは…綺麗事です。私が人を、彼女を殺した事は事実です。これは、優しさなんかじゃない……！」

彼の手を受け入れた、彼女の死に顔が忘れられない。

二度と開かなくなった目も、二度と言葉を語らなかつた唇も、その全てが今も心の奥底に焼きついたまま。

ファムルを想えば想う程、彼女の無邪気な笑顔に救われるような思いをする度に、自分の罪深さを思い知るのだ。

彼女は翼を持つ者——すべての呪縛から解き放たれる、選ばれた者。

この呪われた大地の上で、かつて愛した人間をこの手で殺した苦しみを背負って生きる事が彼に課せられた罰ならば、甘んじて受けなければならぬ。

救われて…よいはずがない。この命で贖っても足りない事を行った身で。

彼のそんな物思いを断ち切るように、ファムルは言う。

「…デイスパー、あなたがそうなれないと言うのなら、わたしは《片翼》を得ずに月へ昇るわ」

その言葉に、デイスパーは思わずファムルに目を向けた。

彼女の口調は静かで、ただ事実を述べているようだった。けれど、それは彼女の存在意義すらも否定する。

エフェ「メンタルは、《片翼》なしには祈りをこの地へ届けさせる事が出来ないといわれているのだから——。

「…そんな……！！」

とてもそんな事を許容する事が出来ず、思わず彼が否定の言葉を口走るのが、ファムルはやっぱりと遮った。

「デイスパー。——わたしは…エフェ…メンタールなの」

真っ直ぐに彼に向けられる、青い瞳には強い意志の光。彼女は自身の誇りを失ってはいなかった。

『翼を持つ者』である事を、ファムルーは初めて本当に誇らしく思えた。

今までの女官達によつて植え付けられたエフェ…メンタールとしての自覚と義務感から解き放たれ、彼女は自分のすべき事をようやく見つけたのだ。

「自分の大切な人の幸せを願い、祈る事がこの世界へ生まれた来た意味なら…わたしは、あなたの幸せを祈る為に生まれてきたのよ」  
そう、たとえそれが決して届かない一方通行のものであったとしても。

彼の為に祈り、彼の為に夢を紡ぐ。

昔、彼は言っていた。祈りには…その祈る先に辿り着ける力があるのだと——。

「デイスパー…あなたの苦しみが、出来る限り軽くなるように。あなたがたとえ《片翼》でなくてもいいの。わたしがあなたの為に祈りたいのだから。この気持ちが間違っているのなら、わたしはエフェ…メンタールとして認められなくても構わないわ」

「ファムルー様……」

「一つだけ教えて？ …デイスパーは、わたしの事…少しは好き？」  
心の奥まで見通すような、深い瞳に自分が映っている。その瞳にどうして嘘がつけるだろう。

—— 最初から拒み通す事など出来るはずもなかった。彼は彼女に出会った時から、すでに救われていたのだから。

「嫌いな訳が、ないでしょう」

それでも、そう答える事が精一杯だった。

この期に及んで往生際が悪いとは思ふ。けれど彼女を愛しく思う、その気持ちを認めてしまったら、彼女自身をも彼の罪に引き摺りこんでしまう気がするのだ。

何より、自分が手にかけたかつての恋人を忘れる事は出来ない。

ファムルーは彼の言葉に満足したのか、その目を嬉しそうに細めた。その視線に何だか落ち着けずに、デイスパーは思わずまた目を反らせてしまう。

「けれど…ファムルー様、まだ時間があります。ですから……」

「わかつてるわ。女官達の手前、《片翼》はいらないなんて言えないものね。最後まで探しはするわよ」

言い訳のように紡がれた彼の諭すような言葉に、彼女はくすくすと笑いながら頷きはする。しかし、その言葉はそのまま『でも』という逆説に繋がった。

「でも…わたしの気持ちは変わらないから」

「ファムルー様！」

焦るデイスパーの言葉を聞きながら、先に立って宮殿に向かって歩き出す。

彼が慌てて追いかけてくる事が嬉しい。益々愉快的な気持ちになって、ファムルーは笑い声を零す。

ファムルーは知っているのだ。言葉にはしない代わりに、彼の目とそして態度が口程に物を言う事を。

物心ついてからずっと、側で彼を見てきたから——誰よりも側にいてくれた人だから。

『嫌いな訳が、ないでしょう』

そう言った時の彼の目は、今まで彼が自分に向けたどんな目とも違っていた。何処か迷ったような、困ったような…けれど限りなく優しい瞳。

きっと彼が命を絶ったというかつての恋人にも、こんな目を向けたのだと思うと、少し妬けたけれども。

それだけで十分だと思った。

それだけで——きつと、月で彼を想う夢を紡ぐ事が出来る。た

とえ、それが世界中の誰からも許されない事であろうとも。

彼に嫌われていない—— 少なくとも好意を持って貰えていると  
いう、その事実だけで…こんなにも幸せな気持ちになれるのだから。

## Ending: Whisper of the Moonlight

見上げた空には、満天の星。

そして惜しげもなく銀色の光を地上に注ぐ、月。

それを仰いで、彼は祈りを捧げる。月へと昇った、彼の『翼ある者』の為に。

「きれいー！ つき、きれいね！！」

かつての再現のように、幼い少女が空を見上げて歓声をあげる。

その背には小さな小さな翼。

「あそこにいるの？」

ちよつとだけ声を落とし、何か重大な秘密を語るような表情と口調で、年の割にませた少女が彼に尋ねる。

「…ええ、あそこにいるんですよ」

彼は微笑み、そして頷く。

思い出すのは、数年前に彼の前から飛び去ってしまった翼の幻影。数あるエフェメンタールの中、唯一《片翼》を定めなかった者。ある人は彼女を出来損ないだと噂し、ある人は特定の者を定める事が出来なかった博愛の者だと評した。

そのどれもが間違いで、真実でない事を彼と——彼女の後を追って月へと昇るであろう、新たな彼の主だけが知っている。

不思議な事にこの幼い翼には、彼に降り注ぐ祈りの声が聞こえるのだという。

そんな事は未だ嘗てなかった事だ。

たとえエフェメンタールの《片翼》に選ばれた者でも、祈りの力こそは体感出来ても、そこに言葉や意味を見出す事はなかったと伝えられているからだ。

幼い翼はそれを知って、彼に言ったものだ。

『でいのこと、すごーくだいすきなんだね！』

彼女が月へと昇ってから、変わり始めている事がもう一つある。彼のようなアジェ「メンタル」への一方的な差別の目が、少しずつ改善されつつあるのだ。

もちろんその全てがそうではないものの、彼のように犯した罪を悔い、自らそれを背負う者に対して周囲の目は同情的なものへと変化している。

遠い未来では、罪人に対しての意識自体が見直されるかもしれない。

彼が犯した罪は消える事はないけれど、それによって受けた傷は確かに癒されていた。

「つきにいったら、あえるかな？」

どうやら声が聞こえるせい、彼女の事を姉か何かのように感じているらしく、幼い翼はそんな事を言う。

やがてこの翼も、そう遠くはない将来、己の《片翼》を探す日が来るのだと思うと何だか不思議な感じがした。

「会ってどうなさるんですか？」

無邪気な少女を微笑ましく思いながら尋ねると、少女は少し考えてから彼に耳を貸すような仕草をした。

屈んで少女の視線の高さに合わせると、やがて耳元で少女が囁く。「あつたらね、でいのところにこえがとどいてたよーっておしえてあげるの」

「…どんな声が？」

「ふふ…しりたい?」

そう言えばどんな声が聞こえるのか、具体的には聞いた事がなかった事に気付いて問うと、少女はちよつと威張った口調で聞き返してくる。

おそらく本当は言いたくてしょうがないのだろう。その辺りは表情と口調でよくわかったものの、彼はあえて『お願いします』と口にした。

幼い彼の現在の主人は、彼の態度に気を良くしてか、満足した様子で頷くと、聞こえて来ると言う言葉を彼に伝えた。

「あのねえ、……」

やがて耳にした言葉に、彼は軽く目を見開き、そしてまた天上に輝く月に目を向けた。

彼の驚いた様子に、まるで悪戯が成功した時のように少女が笑う。月から降り注ぐ月光は、そこに眠る翼の祈りの具現とも言つ。地上に生きる彼等の《片翼》の幸福を祈り、夢を紡ぐ翼達。その夢の

—— 欠片。

—— アナタヲ・アイシテル……

その光を浴びながら、青年と少女はしばらく黙って月を見上げていた。

光は祈りとなって、祈りは言葉となって。やがて大地へと辿り着く。その祈りは汚れた大地を清め、傷付いた人々を癒すのだ。

彼等は『翼を持つ者』—— エフェ「メンタール」。

月に抱かれ、夢に住む、世界を守護する高貴なる存在——。

これはリア友姉妹のサイトの一周年記念に（一方的に・笑）差し上げたものを少々加筆修正したものです。

この話は献上先のサイト名「月の翼」をモチーフにしたものとなっています。

こちらの作品を献上する前に妹さんの好みを狙った作品を献上していたので、こちらは姉さんの好み、「シリ阿斯」「悲恋（テイスト）」「状況・心理描写を細かく」を指して書いた背景があります。

この時はその後、同一世界の話をさらに書く事になるとは思っていなかったのですが、わたし個人は普段とは少々違う書き方を楽しんでました。

当時はコメディ寄りで、会話文中心のサクサク進む話が多かったのですが、周辺描写に凝る楽しみを知ったと言いますか。

蓋を開けたら本篇部分は正味数日で完成しましたから、いかにはまって書いたかがわかうと言うものです（笑）

今はどちらかというと、文体自体はこの作品寄りになってきているので、不思議なものです：

## Wing of Sinner

細い紙燭の光の下、筆を進める。

彼が旅立って、もう数月。そろそろ帰ってくる頃だ。

彼が戻って来るまでに、出来る限り書き進めておかなければ。

そう思いながらも、彼女はやがてその手を休めてしまう。

ずっと筆を握っていられるだけの体力が、もう彼女にはなかったからだ。

それに—— 彼女は心に決めていた。今、書き綴っているこの物語を決して誰の目にも触れさせない事を。

これは、彼女自身の為の物語。

近い未来、彼女が犯すであろう、あなが贖う事の出来ない罪へのせめてもの祈り——。

+ + +

彼女は『物綴る者』—— ノーマンメンタール。

これまでにいくつもの物語を綴り、数こそ多くはないが、そこそこ好評を得ていた。

彼女は主に、幼い子供向けの物語を生み出してきた。それは彼女の身体が子を育むだけの力を持つていなかった事が影響しているのかもしれない。

それでも、彼女には最愛の恋人がいた。

彼は『物語る者』—— リディメンタール。

村から村へ、街から街へ、国から国へと渡り歩く語り部。だから一度旅立てばどんなに短くても一月は戻って来ない。

決して豊かではないこの世界に、娯楽はとても少ない。

それ故に、リディメンタールは大抵何処でも優遇されるし、出来るだけ長く引き留められる。元々、お人好しの所がある彼は、頼

まれりと嫌と言えない。いつも、予定より早く戻って来れた例はなかった。

その事を淋しく思わない訳ではなかったけれど、彼がそうして語り紡ぐ物語の中に彼女の作品が入っている御蔭で、彼女はこうして書き綴る事が許される。

—— 彼の事が子供の頃から好きだった。

彼の声が好きだった。彼が勇気付けてくれたから、生き続ける事を望めた。

彼の手が好きだった。彼に手を握ってもらえれば、この身を蝕む痛みにも耐えられた。

彼も同じように自分を想ってくれているとわかった時、どんなにか嬉しかった事だろう。

：けれど、彼女にはわかる。

彼がどんなに励ましてくれても、彼がどんなに引き留めようとしても、自分の生命の炎はそう遠くない日に消えてしまつたろう事が大人になりきらずに死ぬ。

それは彼女に限らず、この地上に生きる人間にとつてはありふれた話だ。実際、彼女の従兄も同じように十代でこの世を去っている。そして—— 彼がいない時、苦痛に苛まれる度さいなに一つの願望が育つてゆく。

最愛の人の手で、この命を終えたいという背徳の望みが……。  
続きを書くのを諦めて、彼女は筆を置き、窓辺へ目を向ける。

そこに見えるのは、銀の円。浮世から遠く離れた、穢れなき場所—— 月。

そこにはその背に翼を持つ佳人が、この不浄の大地を癒す夢を……  
祈りを紡いでいるという。

彼もこの地上の彼女の見知らぬ何処かで、同じ月を見上げているのだろうか。そんな事を思いながらしばらく眺めた後、再び彼女は筆を取る。

まだ書き綴れる力がある内に。自分がまだ、正気である内に——。

祈る気持ちは偽りないもの。

祈りによって地上を癒すエフェ「メンタル」のような力など自分にはない。だから代わりに言葉にする。

自分の心で感じ、自分の心が生み出す言葉で、祈りを形にして行く。それは誰にも届く事のない、懺悔。

—— 命の灯をが消えるのが先か、書き終えるのが先か。

時を惜しむように彼女は綴る。決してこの世に出る事のない物語を。

この世に生きる、報われる事のない罪人の為に夢を紡ぐ、《翼》の物語を……。

## Wing of Sinner (後書き)

献上品を自サイトにアップするにあたって、ボーナスストラックのよ  
うなものとして書き下ろしたデイスパーの婚約者サイドの外伝です。  
つまりデイスパーは罪人となる前は結構名の知れたリディメン  
タルだったという……。

(その辺りの才能も買われて、ファムルーに仕える事になったので  
すが、作中ではあまり関係ないのでそこまで書きませんでした)

彼女(結局名前をつけてあげられなかったな・汗)は、実際の所人  
一人(しかも最愛の人)の人生を転がしてしまった、かなり自分勝  
手で迷惑この上ない人ではあるのですが、出した後でなんでそうな  
ったのか考えてしまいました。

そんな訳で、この話で語られるのは彼女の懺悔です。

『最愛の彼の手で殺してもらいたい』——それは歪んでいるし、  
間違っているけど、それが彼女の願った終焉。

ただデイスパーの人生を狂わせただけじゃなくて、彼女も彼女なり  
に葛藤があつたって事が書きたくて書いた話です。

…理由なき完全なる悪人ってのは、どうもわたしには書けないみた  
いです(汗)

## 翼の末裔（1）

その世界は、かつて選ばれた者の《生命》と《祈り》で守られていた。

彼等はその背に選ばれた証である翼を持ち、月にある《聖殿》より、死の間際まで夢を紡ぎ続けたという。

地上を癒す夢を。穢れた大地を浄化する為に。

彼等は『翼を持つ者』。

月に抱かれ、夢に住む、世界を守護する高貴なる存在。

…月が消えてしまった今、彼等の存在はそのまま伝説となった。

+ + +

元氣な産声だった。

身体全体で自分の存在を誇示する、小さな小さな生命。それを取り上げた老婆は、手慣れた手つきで赤子を抱き上げ、清めの湯へと運ぶ。

赤子は死の世界からやって来た者。母親の胎内を介して、こちら側へとやってきた旅人だとされている。死の世界の残滓さんしを取り除く為、赤子は特別に清められた湯で身体を洗われるのがしきたりなのだ。

決して難産ではなかったものの、あまり身体が丈夫でない母親は、生涯における大仕事の疲れでか、息も絶えだえの様子でその光景を眺めている。しかし、その口元には何処か誇らしげなものが漂っていた。

五体満足な男の子——それは生まれてすぐに告げられた言葉。死産である事も珍しくない昨今、その言葉は母親にとって何よりの労いだった。

祝福をこめた呪い言葉<sup>まじな</sup>を呟いて、老婆は赤子をそつと湯船に浸す。すると、初めて触れた湯水の感触に驚いたのか、赤子はぴたりと泣き止んだ。そして、今までぎゅつと閉じていた両の瞼を開く。

老婆は、もう少しで赤子を湯の中へ取り落とす所だった。その深い皺が刻まれた顔にあるのは、驚愕と——恐れ。

「何と言うこと……」

思わず、といった様子で呟かれたその言葉に、母親は何か不穏なものを感じ取った。抑えきれない不安を隠せず、倦怠感<sup>けんたいかん</sup>を引きずりながら上半身を起こす。

「シドリ、様？ 一体、どうしたのです……？」

名を呼ばれた事で、老婆ははつと我に返った。そして、すっかりお留守になつていた手を動かし、丁寧<sup>ていねい</sup>に……むしろ丁寧すぎる程にその小さな身体を清め始める。

そうしながら、シドリと呼ばれた老婆は、母親の方へ顔を向ける事すらもせずに一言、ぽつりと呟いた。

「……この子は、《獣宿》持ちだ」

「え？」

母親は一瞬、老婆の言葉が理解出来なかった。

言葉は確かに母親の耳に入つたものの、その意味する所がわからなかったのだ。

……否、理解したくなかつたのかもしれない。それ程に、老婆の言葉は重かつた。

「獣宿、ですって……？」

声が震える。

信じられない気持ちのこもつたその言葉に、老婆はようやく母親の方へと目を向けた。そして小さく頷く。

清めあがつた赤子の身体を手早く拭い、すぐ横に用意してあつた

白い産着を着せ付けると、老婆はあまりの衝撃に言葉もない母親に赤子を差し出した。

ほとんど反射的に受け取った母親は、そうして間近で自らの産んだ子の顔をしっかりと目の当たりにしたのだった。

ほんの少し浅黒い肌と黒い髪は、父親譲り。顔立ちは生まれたばかりではつきりとは言えないが、目元などは母親に似ているようだった。

しかし、母親をじっと見上げる双眸は――。

事実を確認した母親は、食い入るように赤子を見つめていたかと思つと、絶望のため息をついた。

「ああ……こんな、こんな事って……！」

感極まった嘆きを吐き出して、母親はぎゅっと赤子を抱き締めた。突然の事に、当然赤子は驚いてまた激しく泣き出すが、母親は頓着しない。あやす事も忘れて、ただ縋るように抱き締めるばかりだった。

「……どうして――？」

やがて、その両目から涙が零れ落ち、呟いた言葉は湿った響きを持つ。それを老婆は、ただ沈痛の表情で見守るばかりだ。

これから母親と……子供の誕生を知ってやって来る父親は、一つの選択をせねばならない。

どちらを選んでも、彼等夫婦にとっては痛みを伴う選択を。

何故なら。

……獣宿を持った者の末路は、最終的に死しか存在しない。

それが獣宿を持って生まれた者の宿命。それは一種の病、もしくは呪いのようなもの。

そこから救われるには、人である内に死ぬしかないと言われている。だから、親は選ばなければならない。

――生まれてすぐにその命を死の世界へと還すか、その子供が自身の《獣》を目覚めさせる事のないように、一生幽閉してしまうか。

後者の場合、確かに命こそ奪われる事はないが、人としての自由は一切失う事になる。そしてそうした場合、例外なく大人になりきらずに死ぬ。

内に獣を宿した時点で、彼等の生命はどんどん削られているからだと言ひ伝えられているが、実際の所は定かではない。

ただ、二十歳の齢を過ぎても生き延びた獣宿持ちの子供がいた例を今まで聞き及んだ事がない事と、獣宿持ちの子供の命を絶たなかったばかりに、滅んでしまった数々の村の噂話だけが彼等の真実。

《獣》は血に宿り、血によつて目覚め、血によつて成長し、血によつて眠りに就く。

…だから、獣宿の者は葬らねばならない。この世から——この人の世界から。

そうしなければ、彼等は他者の血を欲し、己の人格を食らい、本能だけの獣になる——そしていつか獣と成り果てた彼等は、実の親すらも殺すだろう。村人を殺すだろう。

彼等は人として生まれながら、その本性は血に飢えた獣なのだから。

「…どうして」

母親は震える声で呟きながら、やがて訪れる運命の時を待った。

## 翼の末裔（2）

—— 昔、昔のお話です。

まだ空に数多くの星と、『月』と呼ばれる聖地が存在した頃のこと。

地上はたいへん、たいへん、穢れた場所でした。

空にも大地にも人々を苦しめる毒が混じり、その為に実りも少なく、その僅かな実りさえも、毒を含んだ呪われた場所だったのです。たくさんの人々が、苦しみながら必死に日々を暮らし、生き、そして死んで行きました。

一方、地上を遠く離れた『月』は、反対に清浄にして美しい場所でした。

そこに住まう人々は皆、背に大きな翼を持ち、自由に空を翔け、そしてその心は慈しみに満ちていました。

月の民は常々、地上の人々の苦しみを我が事のように考えていました。

何故なら、地上と月が生まれた時、月の民も地上の民も同じ場所から生み出されたとされていたからです。

かつて、彼等は何度も地上の民を月へと連れて行こうとしましたが、地上の民の弱い体では、天の高みにある月へ行く事など到底耐えられない事でした。

試みは何度も失敗し、そして、彼等はある時、こう考えたのです。

『あの大地の穢れを浄化さえすれば、きっと地上の人達も健康で幸福に暮らせるだろう』

それは途方もない、大掛かりな計画でした。

何故なら地上は広く、月の何倍もの大きさを秘め、しかもその穢れは一朝一夕でどうにかなるものでもなかったのです。

それでも、それは地上の民を月へと連れて行くよりは、ずっと現実的な方法でした。そうして、月の民は地上を清める為、地上へと降り立ったのです。

苦しみに喘ぐ地上の人々を救う為。

己の片割れとも言える、人々を守る為に。

…しかし、地上は彼等が思っていたよりも、ずっとずっと――  
穢れた場所だったのです……。

### 翼の末裔（3）

旅立ちを決めたのは、とても静かな晴れた夜のこと。

——ここを出よう。

それは衝動的な思いのようであつたけれど、元々何かにつけて疎い所のある自分だったから、本当はずっと前からそう思っていたのかもしれない。

ずっと今までここで育った。ここしか、知らない。

両親の顔を知らず、何処か普通の人と違った自分を、村の人々は親切にしてくれた。

非力で彼等に混じつて農作業する事もろくに出来ない自分を、大事にしてくれたように思う。

実際、自分は特別扱いを受けていたに違いなかった。だから、それらの事に対する感謝の心は確かに感じている。感じて、いるのだけど。

でも——ここは自分の生きる場所、そしていつか死ぬ場所ではない。

ここで自分はただ、『生かされて』いるだけ。ここにいる限り、自分には生まれた来た意味がないままだ。

そんな息苦しさを感じていたある日、夢を見た。

自分が泣いている夢だった。

どうして、泣いていたのか理由はわからない。悲しいのか、辛いのか——それとも別の何かなのか。

ただ、溢れる涙を堪える事が出来ずに、幼い頃のように泣いていると、いつの間にか側に別の誰かがいた。

その人は嘆いていた。

その人は言う——何故、自分はここにいるのだろう？ 何故、

生まれてきたのだろうか？

誰の為にもならないというのに。誰にも、必要とされていないのに。

どうして自分の夢に知らない人が出てきたのか、その理由などわからない。その嘆きに対する答えもない。ただ、その悲しみの深さに泣く事しか出来なくて、ますます涙は増えた。

ただ……ただ、切なく悲しく——そして、同時に何故か幸福な夢でもあった。

目が覚めても、その幸福感と切なさは残っていて——あとはもう、いても立つてもいられなくなってしまったのだ。

夢の中にいた人に、会いたくて。

顔も姿もわからないのに、そもそも実在するかもわからないのに会いたかった。そして、嘆かないで、と一言伝えたかった。

わたしが必要とするから。あなたは——独りではないのだから、と。

そして……その人のいる場所が、自分の居場所のような気がしてならなかった。そう伝える事が、自分の役目のようにすら思えた。

それは予知なのだとしても、あまりに曖昧なもの。相手の性別すらもつきりしない、単なる夢と片付けてしまえる程度のもの。

……それでも、旅立つ理由には十分だった。

+ + +

見上げた夜空は、不自然な程に真っ暗だった。

よくよく見れば、お情け程度に星が散らばっているのがわかるものの、今まで馴染みだった星が、今日はその姿を消している。

それを確認して、ティアーレはそつとため息をつく。何だか、ずつと一緒だった友人と離れてしまったような、そんな淋しさを感じたからだ。

——星が、消える。

それは決して珍しい事ではない。すでに、わかっているだけでも数百年程前から、星は次々にその姿を消し、夜の闇はそれに比例するようにその深さを増しているのだ。

その原因は、誰にもわからない。

昔語りに聞くかつての夜空は、星々が一面に広がり輝いていたという。そして、その輝きの比ではない光を湛<sup>たた</sup>える『月』が、昼間の太陽のように夜を支配していたのだと。

想像してみてもピンと来ないが、おそらくそれは素晴らしく美しい光景だっただろうと思う。

もつとも、村を家出同然で飛び出してきた彼女には、たとえ星や月があつたとしても、純粹に楽しむ余裕などなかったのだが。

星と——そして、聖地とも呼ばれた月が失われて、人々は徐々に夜目が利くようになったと言う。けれど、それも限度というものがある。

真夜中の今、特に灯りになるようなものを持っていない彼女の目では、もはや夜道は先の見えない迷路に等しい。

すでに来た道も定かでない闇の中、ティアーレはついに立ち止まった。

（…今日はこの辺で休んで、夜が明けて道がわかるようになったら先に進みましょう）

今までもろくに働く事もなく、長時間歩き続けた経験もない彼女の足は、たった数刻の道のリでも、すでに痛みを訴えていた。

歩けなくなる程ではないが、無理をして後に響くようだと困るだろう。

どちらにしてもこの足とこの闇では、手探りで進んだとしても、大した距離も稼げない。そう判断し、そのままその辺の繁みの中へと分け入り、そこへしゃがみ込んだ。

手の入っていない繁みは、ちくちくと小枝が刺さって決して気持ちのよいものではなかったものの、そのまま地面に横たわるよりはずっと楽に違いなかった。

しばらくごそごそと身体の位置を調節し、出来るだけ身体負担のない体勢を取ると、ティアーレはそのまま目を閉じた。

山の奥、しかも夜更けの時刻。獣がいつ出てもおかしくない状況で、ティアーレはそれでも何処か満足そうな表情で睡魔の訪れを待った――が。

「……？」

不意に何かの気配を感じ取り、彼女は結局目を開いた。

かさかさ、と葉擦れの音がする。風が鳴らすそれとは違う、明らかに何かが立てる音だ。

まさかもう追手が来たのだろうか、と身を固めて様子を伺った。がさり、と誰かが落ち葉の積もった地面を踏みしめる音。急速に高まって行く緊張の中、ティアーレは息すらも殺して、必死に物音を立てないようにしていた。

がさ、がさり、がさつ。

次第に近付いてくる足音。やがてティアーレは、その足音が自分の今までやってきた方向とは逆からやって来ている事に気がついた。つまり――少なくとも、追手ではない。

だからといって物騒な昨今、安心していいはずもなかったが、その事実は少なからず彼女を安堵させていた。

かさつ、がさり。

足音はすぐ側まで来ていた。満足に灯りのない状態で、その姿を見極めるのは困難に違いない。そして……その逆も言えるはずだった。しかし――。

「……あんだ、そんな所で何してるんだ。迷ったのか？」

急に足音がしなくなったかと思うと、それと同時にそんな声が飛んできて、ティアーレは思わず息を飲んだ。

声の様子では、まだ若い男のようだ。しかし、だからと言って安全とは限らない。彼女は益々身を縮めた。

すると、まるで呆れたような、困ったようなため息が聞こえたかと思うと、がさがさと足音は迷う素振りもなしに彼女のいる繁みの前までやって来てしまう。

「……！！」

乏しい知識を総動員して、ありとあらゆる『よくない事』が頭の中を駆け巡る。

このまま、殺されるのだろうか？

そんな事を考えた時には、足音はティアーレの目の前で止まっていた。しかし、しばらく待っても何も起こらない。

恐る恐る顔をあげると、そこに彼女は星を見つけた。

(…目…光ってる……)

それは、空に散らばる星よりも、もっと熱のある輝きだった。赤を帯びたその金の瞳は、じっと彼女を見下ろしている。

こんなに暗くなければ、おそらく瞳の持ち主の容貌も知れただろうが、この闇の中ではわかりようもない。

だからただ、見下ろす瞳をじっと見上げる。不思議とその瞳に恐怖感は抱かなかった。

## 翼の末裔（4）

「…迷子にしちゃ、育ってんな」

やがて聞こえてきた呟きは、内容こそ失礼極まりないものながら、何処か優しいもので彼女は少し安心する。

「迷子じゃありません」

それでも何となく聞き捨てならないと反論すると、相手はおや、というように少し目を見開いた。

「口、利けるんじゃないか。ずっと黙ってるから、てっきり喋れないのかと思った」

「喋れます。勝手に決め付けしないで下さい」

何処か小ばかにしたような言葉に、ちよつとだけむっとして言えば、相手は笑ったようだった。

気配しか伝わらないものの、それだけで場の緊張がいくらか和らぐ。

「じゃあ、こんな所に一人蹲うずくまって何してたんだよ？」

「…それは」

ここで野宿をしようとした。そう言うのは容易たやすいものの、よくよく考えれば今会ったばかりの、しかも見も知らない男に話してやる義理などない。

ティアーレはしばらく考え、そしてそろそろ枝が引つかからないうちをきながら繁みの中から立ち上がる。

改めて向き合ってみると、男は自分より頭半分くらい背が高いくらいで、外見적인年もあり変わらないように思えた。

「あなたには、関係ないでしょう？」

挑発的にも受け取れる彼女の言葉に、金の瞳が眇すがめられる。そして、やはり小ばかにするような口調で言い放った。

「…なるほど？ 確かにオレには関係ない事だ」

「……」

「だが、野宿するんだつたら、もうちよつと装備を整えてやるんだな。そんな薄着じゃ、夜も満足に越せないぜ？」

「……！」

言わずともお見通しだと言わんばかりの言葉に、ティアーレは目を見開く。返す言葉も思い付かない彼女に、男は更に言葉を重ねた。  
「それにこの辺りにも夜盗が出る。あんたみたいな世間知らずは、さつさと家へ帰る事だ。…何なら、送つてやろうか？」

「……！」

まるで子供に対するような言葉に、かっとなる。反射的に睨んだ瞳は、何処か冷めた輝きで、余計に腹が立った。

今までずっと村でこんな扱いを受けて来なかった分、こういう無礼甚だしい扱いに対して、どう対処すればよいかわからない。出来た事はただ、怒りを込めて睨むだけ。

男はそれに堪えた様子もなく、ティアーレの次の行動を待つているようだった。

素直に送ってくれ、と頼んでくるとでも思われているのかと思うと、益々頭に血が上りそうだったものの、不意に一つの考えが思い浮かんで、彼女に冷静さを取り戻させた。

—— この男こそ、一体何の為にこんな夜中にこんな森の中を歩いていたのか？

その疑問は、じわじわとティアーレの心に不安を育てて行く。

男自身が言ったように、今の世の中、何処でも夜盗や山賊といった危険な人間が横行している。世界はあまりに貧しく、それ故に人の心も荒廃しやすいのだ。

この男だつて、そういう人種でないとどうして言いきれる？　こんな所を夜中に歩いているだけでも十分怪しいではないか。

「…あ、あなたに送ってもらう必要なんてありません」

ともすれば震えそうになる声を必死に紡いで、ティアーレは言う。

「あなたが、その夜盗の類でないと、どうして言い切れるんです。わたしを送って…その足で仲間を連れてくるつもりではないの？」

「――」  
「ああいにく様ですけど、わたしは自分で村を出てきたのです。今更戻る気などありません」

「……へえ？」

ティアーレの言葉に、男は何処か愉快そうな声を漏らす。そしてやはり人を小ばかにしたような口調で言ってくれる。

「そんな無防備な格好で、何処に行くつもりか知らないけど…人を疑うなら、言葉を選べよな。もしオレが本当に夜盗の一員だったら、言いがかりだとか何とか理由をつけて、今ここで殺されても不思議はないぜ？」

「……！？」

「言っておくが、オレは夜盗なんかじゃねえよ。大方、こんな夜中に歩いていて怪しいとも思っただろうが……オレはこの通り、普通の人間より夜目が利くんだ。いろいろと夜の方が移動するのに都合がいいからそうしているだけだ。…信じてもらわなくても結構だけどな」

「夜目が利く……」

それは目が光っている事と何か関わりがあるのだろうか。そんな事をふと考え、やがてティアーレは名案を思いついた。

「そうだわ！　あなた、わたしを手伝って下さいませんか？」

「…はあ？」

いきなり態度を変えたティアーレに面食らったのか、初めて男が間抜けな声をあげた。

それが何となくおかしくて、彼女は勢い付いて言葉を重ねる。口にしてみると、実際それはとても名案のように思えた。

「先程も言いましたが、わたしは村を出てきたのです。黙って出てきてしまったから、追手がかかるかもしてなくて……。だけど、わたしにはこの暗闇を進むような無茶は出来ません。あなたが夜盗で

ないと言つのなら…そして、わたしを放っておけないと思うのなら、わたしを助けて下さい」

そうすれば、ティアーレはこの夜道を進む手立てを得られるし、最悪男が夜盗の類でも——その場合は、ティアーレは殺されてしまつのかもしれないが——村までの道を知られずに済む。

勝手に村を出てきたものの、村の人々達に恨みはない。心配をかける分、危険からは遠ざけたかった。

男は目を眇め、ティアーレを見下ろす。そしていかにもゆっくりと口を開いた。

「…あんたの家出の手伝いをしろって？」

「家出ではありません！」

面倒臭そうに言われて、反射的に否定する。

確かに黙って出てきた事を考えれば、それは十分『家出』と言えるのかもしれない。けれど——。

「…『家出』というものは、帰る場所がある場合に言える事でしょう？ わたしには、帰る場所がない。家はありませんが…家族はいませんし、何より——わたしは、あの村では生きていなかった」

「……」

「わたしは大事にされていたけれど、誰も…わたし自身を必要とはしてくれていなかった。だから……！」

「——わかった」

「え？」

遮るように言われた言葉に、ティアーレは一瞬自分の言葉を忘れる。

思わずまじまじと男の目を見ると、そこには先程まであった冷やかな輝きが消えているように思えた。

決して友好的なものは感じさせないものの、それだけで何となく安心感を感じる。

「…『わかった』って……？」

「だから、あんたの言いたい事はわかった、って事だよ。…いいぜ、

助けてやる。今、特にこれと言ってやらないとならない事もないからな」

「…本当に？」

こんなに簡単に手助けの手を得られるとは思わなかっただけに、ティアーレは面喰らって思わず確認を取ってしまう。

もしかしたらそれが男の手なのかもしれない、とは一瞬思ったものの、それよりも『助けてやる』という言葉が嬉しかった。

「ああ。…その代わり、あんたもオレを手伝ってくれるか？」

「あなたを？」

ふと思いついたような言葉に首を傾げる。

確かに返せるものが何もない状態だけに、その条件は当然のような気はした。

自分が持っている物といえば、この命とこの身体くらいだ。言わば無償で手伝ってもらう以上、出来る事はやらねばならないだろう。しかし、流石に即答をしてはいけないような気がして男の言葉を促す。

「…一体、わたしはどうすれば？」

「難しい事じゃない。…いや、あんたみたいな奴には難しいかもしれないけどな」

何処か揶揄するような言葉に、嫌な予感を感じつつ、ティアーレは夜の闇で不明瞭な中、唯一はつきりと認識出来る彼の瞳を見詰めた。

「…何ですか？」

一体どんな困難な条件を提示されるのか。

思わず身構えて確認を取ると、男は静かに言いきった。

「—— オレは、自分が死ぬる場所を探している。もしくはオレを殺してくれる人間でもいい。何度も試したけど…オレは自分で自分を殺せない。だから殺してくれるモノを探してる。オレを殺せそうな人間がいたら、オレを殺すように頼んでくれ。…あんたがオレを殺せるのなら、それが手っ取り早いが…それは無理だろ？」

男の瞳は真剣そのもので、冗談で言っているのではない事はわかった。

しかし——それは簡単に頷ける内容ではない。

言葉通りに受け取れば、この男は死にたがっている。つまり、テイアーレに死ぬ手伝いをしろと言っているのだ。

「——だ、駄目です！ そんな事……！！」

「……そう言うと思った」

男はくすり、と初めて笑い声を漏らす。

それは自嘲めいていて、テイアーレは何故だか泣きたい気持ちになった。

「……どうして、死にたがるんです？ 生きていなければ、何も出来ないのに……！」

「そうだな。でも、オレは死ななければならんだ……出来るだけ早く」

闇の中、金に光る瞳が無機質に輝いた。

テイアーレの言葉に頷きながらも、何処か神妙な口調で言う。

「どうして……！」

悲鳴のような声で追求する彼女に、男は静かに言った。

「——オレがオレである為に」

## 翼の末裔（5）

：地上に降りた月の民は、次々に死んで行きました。

元々、月という穢れと関わりのない場所で暮らしていた彼等にとつて、地上の毒は命を縮めるものでしかなかったのです。

月の民には、地上の民にはない力がありました。

それは、祈りの力。

彼等は祈る事で、『癒し』という奇跡を起こすのでした。

しかし、その癒しの力でもつても、地上の毒はなかなか清まらず、そして彼等の力にも限界が存在したのです。

祈りとは——受け止める対象があつて初めて、奇跡を起こすものの。

月の民の祈りに対して、その対象となる地上は、あまりに広く、そして彼等の祈りをなかなか受け止めようとはしなかったのです。

気がつくと、月の民はほんの僅かな数だけになっていました。

地上の民は月の民の献身を感謝しつつ、彼等に月へと戻るように説得を始めました。

確かに地上の毒が少しでも薄まれば、どんなにか彼等は助かる事でしょう。しかし、だからといって同胞とも言える月の民を犠牲にする事は、とても出来る事ではありませんでした。

月の民は考えました。

地上の民の言葉通り、このままでは彼等の方が滅んでしまう。しかし、ここで清める事をやめてしまったら、毒はまた再び地上の民を苦しめる。

——そして、月の民は決断したのです。

彼等は地上の民との間に子をもつけ、自らの祈りを受け止める存在を地上に残す事にしました。

地上の民の血を受けた月の民の子は、月の民よりも毒に強く、そして同時に背の翼と祈りの力を受け継いでいました。

月の民は月から我が子と、我が夫もしくは我が妻を思い、祈りを紡ぐ。そして、月の民の子はその祈りを受け止めて、《癒し》の奇跡を起こしたのです。

地上の毒はなかなか薄まりはしませんでした、それでも少しずつ少しずつ、清められて行きました。

月の民の子はまた子を産み、世界中にその子孫は散らばって行きました。

そして長い長い年月が経ち——地上の人々の寿命が延びる事と引き換えのように、月の民の血は地上の民の中へと紛れ、翼を背に持つ者は自然と生まれなくなっ行ってたのです……。

## 翼の末裔（6）

何だか泣きそうな顔だ、と思ったものの、目の前の少女はそれでも涙を流しはしなかった。何処か挑むような目で、じっとリュナンの目を見上げてくる。

見た所、十六、七歳くらいだろうか。おそらく自分とあまり違わない。けれど、その年齢にしてはおかしな事があった。

——今まで、家族以外で彼の目をそうやって真っ直ぐに見つめてきた人間は皆無だった。

夜、輝く瞳は人外の証。不気味がられる事はあっても、こんな風に真正面から睨みつけられる事はなかったのだ。

だからかもしれない。この、初対面の少女に興味を抱いたのは……。

「……何故、死ぬ事があなたを、あなたたるものにするのですか？」  
真っ直ぐに見上げる瞳は、零れそうに大きい。濡れて輝くそれは、今は夜の闇と同じ色。

肩の辺りで切りそろえられた髪ははつきりと色こそわからないものの、まっすぐに流れて曲一つない。

白く飾り気のない服に、同色のシヨールを肩にかけ、荷物という荷物は見当たらない。

これで家出（本人は違うと言っていたが、結局はそういう事だろう）してきた辺り、いかに世間知らずかわかるうと言うものだった。

……事実、彼の異常さを目の当たりにして、なおかつそんな事を尋ねてくる辺りが、物を知らない証明でもあろう。

「生きてこそ、あなたはあなたであるのではないのですか？」

紡がれる言葉はまったくもって正論だった。

それは、リュナンとてそう思う事。けれど、彼の場合はその正論も当てはまらない。

——何故なら、リュナンはこの世界においては人であっても、

『人』として認められていないから。

「オレは、人じゃない。だからその理屈は当てはまらないのさ」

事実を口にする、少女はその目を丸くした。そして、からかわれたとでも思ったのか、いつそう力のこもった視線をぶつけてくる。

「あなたは どう見ても、人ではないですか！」

やがて少女の口から飛び出したのは、あまりにも常識を無視した言葉だった。

「普通の人間は、夜に目が光ったりしないという事を、知らないわけではないだろうに。」

その食って掛かるような言葉が何だか愉快で、彼は知らず笑みを浮かべていた。笑う事など、すっかり忘れていたと思っていたのに、こうして笑える自分が不思議だった。

「人の姿はしているが、外見だけだ。…あんだ、《獣宿》って言葉を知ってるか？」

「獣…宿？ いいえ、それは一体何の事です？」

不思議そうに問い返される。

「もしか、とは思ったものの、あまりにも予想通りの返答に、リユナンも流石に考えた。」

いくら何でも、物を知らなすぎる。実際の獣宿持ちを見た事はなくても、言葉くらいは知っているはずなのだ…普通なら。

知らない振りでもしているのかとも思ったが、そのようには感じられないし、そしてそんな必要は何処にもない。

明らかに異常なリユナンを全く恐れない事といい、一体どういう育てられ方をしたというのだろう。

「…あんだ、一体何者だ？」

「何者と言われましても…あ！ 名前でしたら、ティアーレと言います」

あからさまに怪しい男に、あっさりと名乗り、先程までの警戒を忘れたかのように微笑む。

質問の答えをはぐらかした訳でもないのだろうが、その反応は益

タリユナンの疑問を募らせるものだった。

ティアーレと名乗ったこの少女は、何処かおかしい。

現実の厳しさすら、ろくに知らないで育ったかのように、不自然なほどに純真で無知すぎるのだ。

これがもし都のような場所であれば、貴族か裕福な商人辺りの娘で通るのだろうが、今二人がいるのは辺境も辺境、しかも山奥である。

生活は貧困を極めているに違いないし、そしてその厳しさ故にその価値観は必要以上に現実的なもののはずだ。

…それなのに。

「…普通の人間は、《獣宿》という言葉を聞くだけで、被いの呪い<sup>まじな</sup>をするもんだぞ」

無意識の内にティアーレへの不信が言葉に表れる。

するとそれが伝わったのか、ティアーレは途端におろおろとろたえ、困ったような目を彼を向けるのだった。

「あ、あの…わたし、変、ですか？」

やがてティアーレが口にした言葉は、あまりにも自分というものを自覚していなくて、かえって毒気を抜かれるものだった。

「す、済みません…田舎育ちですし、わたしは何処か、人より疎いところがあるので…その……っ」

「……」

田舎育ちと口で言いながら、その丁寧な口調といい、素直過ぎる感情表現といい、とても田舎で育った人間には見えない。たとえ村長の娘であろうと、こういう風には育たないだろう。

それこそ——ずっと、世俗と隔離された場所で、限られた知識だけを与えて育てるような事をしない限りは。

（…それとも、そういう育てられ方をしたっていいのか？）

そう思った瞬間に、一つの記憶が甦<sup>もよほ</sup>った。

——窓一つない、石の壁。蠟燭<sup>ろうそく</sup>の薄明かり、浮かび上がる狭い部屋。

冬になると底冷えがひどく、夏は空気の通りが悪かった。…それでも、願えばいつでも暖かな腕が、暖かな声が差し伸べられた、場所。

（思い出すな。もう、…覚えていたってしょうがないんだから）  
振り払うように心の中で呟き、そして不安そうに見上げるティア  
ーレに再び目を向けた。

もう一度確認するように見ても、やはり見た目はどうという  
事はない、普通の少女だ。何処にも異質な徴候は見られない。

…自分とは違うのだ。

（…まあいい。こういう事情があろうと、オレの知った事じゃない）  
そう——ティアーレの手助けをするのは、単に成り行きだ。  
交換条件として口にした、『自分が死ぬ』為の手伝いなど、実際  
は当てにもしていなかった。

今までずっと探してきた。それでも、見つからなかった——自  
分が自分である内に死ねる場所。殺してくれる誰か。

十年近くの年月をかけて探し続けたそれが、そう簡単に得られる  
はずもない。

「…あの？」

困惑を隠さない声で我に帰り、リユナンはふう、と重い吐息を漏  
らす。そして生じた間を誤魔化すように、自分の名を口にした。

「オレは、リユナンだ」

「…！ リユナンさんとおっしゃるんですね」

名乗ればやたらと嬉しそうな笑顔になる。この風変わりな少女の  
ちょっとした冒険に付き合うくらい、大した手間にはならないだろ  
う。

自身のいた村に戻りたくないと言っのなら、少し離れた別の村ま  
で連れて行けばいい。

この様子なら、どうせそこまでの道中で根を上げるに決まってい  
る。そうしたら、そこで別れればいいのだ。

（そう…それだけだ）

自分を恐れない瞳に、興味を抱いたからではない。その不可解さに興味を抱いたからでもない。

単なる――気まぐれ。そう思った方が、きつといい。

自分にとつても、おそらく彼女にとつても。

「まだ、その分だと体力はあるよな？」

「はい！」

リュナンが提示した条件を冗談だと思ったのか、それとも手助けしてくれるとわかったからだろうか、ティアーレの顔がぱつと輝いた。

その単純明快さに、リュナンは苦笑する。こんな調子じゃ、いつか悪党に騙されてひどい目に遭うに違いない。

…もつとも、自分も世間一般的な目で見れば、世間を騒がす悪党と何ら変わらないのだけれども。

「なら、ついて来い。こんな場所じゃすぐに見つかるし…それ以前にこんな所で寝たら、明日には身体中が痛んで動けやしないぞ」

「はい、リュナンさん」

「……。リュナン、だ。…『さん』付けは鬱陶しい」

「はい、リュナン！」

先に立って歩き始めたリュナンの後を、驚く程体重を感じさせない足音が続く。

静かな静かな夜の闇の中、二人の旅人はそれぞれの思惑を抱え、行く先の定まらない道のりを歩き始めたのだった。

夢？

見上げた空に、大きな銀盤。

吸い込まれそうに美しく、この世のものとは思えない程に汚れない光を、静かに地上へと注ぐ。

——それは、月。

太陽の全てを照らし出すようなものとは違う。

まるで囁きかけるように、そして同時に包みこむような、その光。そこには熱はなく、むしろ冷たささえ漂っている。

——あの光は、『祈り』の具現。

——美しい場所。

——それは、失われた聖地。

……『失われた』？

違う、ちゃんとそこにある。

そこに存在している。

あそこは地上から遥か離れた清浄の地。行かねば。

あの場所に、行かねばならない。

——何の為に？

何の……？

そうだ…大事な人の為。

地上でただ一人、唯一無二の私の\*\*\*\*の為に。

—— 何故？

それが役目だから。

大切な人の幸福を祈る事が、課せられた役目。  
その為だけに、この世界に生まれてきたのだから。

——…本当に？

本当—— 本当のはずだ。

それ以外に理由は何もないはず。

—— 大事な人と、離れ離れになるのに？

そう……。そうだけれど。

けれど、行かなければならないのだ。  
そうしなければならない。

—— それが、役目だから？

役目…そう、それが役目……。

ああ、でも…そうだっただろうか？  
それだけ、だったろうか……？

…いや、何か別の理由があつたはず。  
月へ行かねばならない、理由が。

大事な\*\*\*\*と離れてでも、行かねばならない理由が…役目と  
は別の何か…確かに、あつた。

—— それは、何？

…わからない。

わからない…なのに、どうして…自分はこんなにも、悲しいのだ  
ろっ……？

## 翼の末裔（7）

とても暖かい何かを抱き締めて、ティアーレは夢の中にいた。

それはいつか見た、知らない誰かが嘆くそれと同じようであったし、違うようでもあった。

不可思議な夢。

ただ、わかるのは自分の声は、届けたい先へ届いていないのだということ。その事がとても淋しくて、心細くて、凍えるような気持ちになる。

気付いて欲しかった。自分の存在を知って欲しかった。—— 自分の方を、見て欲しかった。

腕の中の温もりは、そんなティアーレを確かに暖め、慰めてくれるのだが、それが何なのかはわからない。

けれど、それが何か確かめる為に手放すのが惜しくて、ティアーレは益々その腕の中の温もりをしっかりと抱き締め——。

「……ティアーレ！ おい、起きろ！！」

「—— え？」

……至近距離からの耳に馴染みのない男の声に驚いて目を開くと、そこには夜の闇のような真っ黒な髪と、金色を帯びた赤い瞳の青年がいて、ティアーレの眠気は一遍に吹き飛んだ。

一瞬、自分の置かれた状況がわからずに混乱に陥ったものの、ティアーレはすぐに自分を取り戻し、まずはその場で一番相応しいと思われる言葉を口にした。

「おはようございます、リユナン」

「……」

しかし、返ってきたのは朝の挨拶ではなく、心底呆れ果てた視線と表情だった。

出会ったのが夜の闇の中で、ずっと彼の夜光る目ばかりを見ていたせい、表情がわかるだけで何だか居心地の悪さが倍増したよう

な気がして、ティアーレは思わず視線を外してしまった。

朝、目が覚めたら『おはよう』と挨拶するのは、ひよつとして一般的な事ではなかったのだろうか、それとも何か別にリユナンを呆れさせるような事を自分は無意識にやってしまったのだろうか？

そんな事をぐるぐると考えていると、はあ、と疲れたようなため息がリユナンの方から聞こえてきた。

「リユナン？」

おそろおそろ顔を再び上げると、至近距離にいた青年は苛立たしげに頭を掻きながら、ぽつりと一言漏らした。

「お前…本当にどういう奴なんだ……？」

「え、あの……？」

「…わからないなら、いい。取りあえずどいてくれ…動けないだろうが」

「……？」

何がわからないというのだろう、そう思ったのは一瞬のこと。

次の瞬間、彼の言葉の意味を理解したティアーレは即座に彼の言葉に従った。…その顔を、真っ赤にして。

「ごっ、ご、ごめんなさい……！」

「…いいけどな、別に」

やはり何処か呆れたような口調だったが、怒りのようなものはそこには感じられず、ティアーレはほっとした。ほっとしたのだが…顔の火照りはすぐには戻らない。

（わたししたら…初対面も同然の、しかも男の人に…だ、抱きついて寝てたなんて……！！）

リユナンでなくても、呆れるだろう。いや、場合によってはとてもない勘違いをされていた可能性だってある。

一応は年頃の娘として、それはあまりにもはしたない行為に違いなかった。

ただでさえ世間知らずを自覚していて、気をつけなければと思っていたのに、旅立った翌日にこれではあんまりと言うものである。

穴があつたら入りたい気持ちでぎゅつと身を固めるティアーレを、リユナンはやれやれ、といった顔で見つめたが、ティアーレは気付かない。

恥ずかしくて恥ずかしくて、死にそうだった。

「…昨日の夜は、ちよつと冷えたからな。寒かったのか？」

やがてリユナンのそんな言葉が聞こえてきて、ティアーレはえ、と顔を上げる。

思い返してみたが、寒かったかと問われてもあまり覚えていなかった。

何しろ、あの後リユナンの導きの元、何処をどう歩いたのかもよくわからないままに歩いて、リユナンが手慣れた様子で落ち葉を集めて作ってくれた即席の寝床に横になった瞬間から、記憶が曖昧になつているのだ。

本当は旅慣れた様子のリユナンに色々話を聞いてみたいと思つていたのだが、あんなに長時間歩き通しだったのは初めてだっただけに、疲労の方が強かった。

「寒くはなかったと思うのだけど…でも、そうだったのかも？」

「…はつきりしねえな」

「そんな事言われても…覚えてないんですもの」

寒かった、という記憶がないという事は、寝て間もなく身体が冷え切る前にはもう、リユナンに抱きついていたのだろうか。

そう思うと益々顔の火照りはひどくなつてしまった。

だがそう思う反面、じゃありユナンは目を覚ますまで、ティアーレが抱きついている事に気付かなかったのだろうか、という疑問も頭をもたげた。

もたげたが——面と向かつて聞くのは何だか躊躇ためらわれた。

何となく無意識にリユナンの瞳を見上げると、ティアーレの疑問に気付いたのか、リユナンは何処か居心地の悪そうな顔で言い放つた。

「…まあ、オレもお前がいつから抱きついてきてたのか、気付かな

かったけどな」

リユナンのその言葉はティアーレを少し安堵させたものの、リユナンにとつてはそれは不名誉な事だったらしく、それきりその事は話題にはならなかった。

もつとも—— それどころではない事態が、すぐそこまで来ていたからでもあつたが。

「人の声がする」

やがて居心地の悪い沈黙の後、ふと我に返つたようにリユナンが呟き、その場は緊張に支配された。

「声……まさか」

「二人……三、いや四人……か？ 結構な数だな。ティアーレ、お前……一体どういう奴なんだ？」

言いながら立ちあがり、今までとは違う緊張に満ちた表情で、リユナンは口癖になりかけている質問をティアーレに尋ねる。

対するティアーレといえば、人の声など聞こえないばかりか、人数などわかるはずもなく、リユナンの耳の良さに驚くばかりだ。

「……追手が、もう……？」

夜が明けてどれだけの時間が過ぎたのか判断できないが、木々の間から見える空の様子からでは決して遅い時間ではなさそうだ。

という事は、ティアーレがいなくなった事は予想したよりもずつと早く、村人に気付かれてしまったのだろう。

追つて来るかもしれないとは思っていたが、これほど早く動くとは予想外だった。

「これは昨日の夜の間にはお前が家出したって事がバレてるな。夜明けと共に動けば、ここまで来てもおかしくはない。第一、この辺りに不案内なオレと違って、向こうは庭も同然な場所だろうからな」

「……家出じゃありません」

「お前はそう思つてても、向こうはそう思つてないと思うぜ？」

連れ戻されるかもしれない、そう思つた瞬間、ティアーレは目の前が真っ暗になった気がした。

家出だと思われているのなら—— そう思うのが自然だけれど——  
—— 自分は彼等の『裏切り者』なのだ。彼等の信頼を裏切った、彼等の期待を裏切った……裏切り者。

連れ戻された所で、殺されるような事はおそくない。

けれど……きつと、今まで仮初<sup>かりそめ</sup>ながらも与えられていた自由は、もう二度と与えられる事がないに違いなかった。

「……おい、ティアーレ！」

「……え？」

「何を呆けてやがる。……捕まりたくないんだったら、さつさと立てようは捕まらなきゃいいんだろうが」

赤い瞳に泣きそうな顔の自分が映っている。なんて情けない顔だろう。

—— 自分は、こんなにも力がない。

「ティアーレ？」

「……めんな、さい……。ごめんなさい、リユナン」

村を出る時に、決して泣くまいと心に誓った。なのに、自分の無力さを思い知る事で、その誓いが早くも破られてしまいそうだ。

申し訳なくてしようがなかった。折角リユナンが助けてくれたのに、もうこんな迷惑を彼にかけている。

「あ？」

「手伝ってくれ、なんて言わなければ……リユナンにこんな迷惑は……」

「……」  
「ばかか、お前」

どう詫びればよいのだろう、それだけしか考えられないティアーレの腕を乱暴に掴んで立たせると、僅かに上から心底呆れた言葉が投げつけられる。

「迷惑をかけて悪いって思うんなら、ともかく動け。手伝えと言ったのはお前だが、手伝ってやると引き受けたのはオレだろ？……村に戻りたくないなら、自分の最善を尽くせ」

リユナンの言葉には優しさなど欠片もなかった。あくまでも事実

だけを口に出している、そんな様子だった。

なのに、ティアーレは確かに強張った心が少しだけ解れるのを自覚する。浮かびかけた涙が、止まった。

「はい…はい、リユナン」

…そう、自分は決めたのだ。生まれて初めて、自分で考えて決めたのだ。村を出て、この世界の何処かにある、自分が生きる場所を見つけるのだと。

「それでいい」

やはりぶっきらぼうなリユナンの言葉。けれど、ティアーレは感謝の気持ちを抱かずにはいらなかった。

いつまでリユナンが手を貸してくれるかはわからない。それでも、もし…この先、彼の役に立てる場面があったら、どんな事でも手を貸そう、そう心に決める。

自分一人では出来ない事も、誰かが手助けしてくれたら可能になる——その事を、今ここで知ったから。

「行くぞ」

寢床にしていた落ち葉を軽く散らし、そこにいた痕跡を簡単に消すと、リユナンは先に立って動き出す。その後を追って、ティアーレもまた動く。

その背に思い出すのは、昨日の会話。

『——オレは、自分の死ぬ場所を探している』

あの言葉が、何処まで本気だったのか今は知る術がない。けれど、もし…もし、本当にそれこそが彼の本当の望みだったら。

想像するだけで胸が痛い。

けれどそうする事だけが、彼の助けとなる手段になるのならば——必ず叶えよう。たとえ自分がそれを望んでいなかったとしても……。

## 翼の末裔（8）

面倒な事になった、と内心では思った。

ちらりと後に目を向ければ、必死な様子で彼の後をついてくるティアーレの姿がある。

最善を尽くす——その決意を実行に移すべく、明らかに歩き慣れていないくせに、黙って彼の後を着いて来ている。

（…少しは、歩調を落としてやりたいけどな）

しかし、そうする余裕はあまりない。

実際、追手は確実に後からやって来ている。微かに聞こえてくる声の様子だと、あの野宿した跡を発見したのだろう。

簡単に始末をしたものの、見る者が見れば一目でそこで人が休んだ事がわかっただろう。——しかも、二人の人間が。

疑問はあった。地の利はあるだろうが、追いつくのが早すぎるような気もする。道と言う道もない場所だと言うのに、やけに正確にティアーレの足跡を辿っている気がするのだ。

（…まさかな）

おそらく偶然だ。

ティアーレには伝えなかったが、リュナンがこの逃亡に協力的なのは、別に理由があったからだ。

追手の声はこう言っていた。

——早く取り戻さなくては。

ティアーレは自分で出てきたはずなのに、何者かがティアーレを連れ去ったのだと彼等は考えているようだった。

その状況で自分とティアーレがいる所を見ようものなら、リュナンがその盗人と思われるに決まっている。

だったら、今ここでティアーレを一人置いて行けばいいのに——

ティアーレを見捨てる事は、何故だか出来なかった。

それは、昨日の夜は久しぶりに夢も見ずに眠れたからかもしれない。

自分を包み込むように抱き締めてくれる温もりは、確かに彼に幸福だった頃の記憶を呼び覚まし、いつものように訪れる悪夢を退けてくれた。

…まさか、目が覚めたら本当にティアーレが抱きついていているとは思わなかったが。

思い返せば、人の温もりを身近で感じたのはおよそ十年ぶりの事だった。そう、最後に温もりを与えてくれた人——母親が死んでから、自分にあのように触れる人間は誰もいない。

《獣宿》という呪いが、自らの身にかかるのを恐れ、ただその死を願うばかり。

もつとも、ティアーレは獣宿を知らないからこそ、平気なのに違いない。もし、それがどのようなものであるのかわければ、きっと彼女も自分から去って行くだろう。…きっと、必ず。

可能ならば、知られるのは別れてからがいい。身勝手だと思いつながらも、リユナンは思う。

真つ直ぐに自分を見てくれるティアーレ。彼女が自分を恐れる姿は、出来る事なら見たくはなかった。

（その為にも、何とかこの場を切り抜けないと……）  
地の利は向こうにある。

本来ならティアーレこそが、先に立つて進むべきだろう。この地で生まれ育ったのなら、彼より地理に明るいはずなのだから。

しかし、リユナンはそうはしなかった。

獣宿、というこの世界で最も不浄であり、異端とされるものを知らないティアーレが、普通の村人のように生活をしていたとは到底思えなかったからだ。

そして事実、ティアーレはリユナンの後を着いて来るばかりで、道案内をする気配はない。

少しでもこの辺りを知っていたら、道を知っていてもおかしくはないのに、それをしない。つまり——知らないのだ。

(…本当に、一体こいつは何者なんだろう)

何度も口にするものの、それに対する答えは与えられてはいない。ティアーレ自身が、自分の事をよくわかっていないからだだろうが、それでも疑問は募る。

獣宿持ちの場合は、生まれてすぐに殺されるか、一生幽閉される。リユナンは後者——もっとも、かつては、という言葉がつくけれども。

しかし、ティアーレの場合は何なのだろう。ただの村人ではない事と、獣宿持ちでないのは確かだ。

明るい場所で見た姿は見目麗しいと呼べるものだが、だからと言ってそれを理由に閉じ込める事もないだろう。

ティアーレはその辺りの村娘と片付けるには、何処か高貴な雰囲気があるが、けれど決して、絶世の、とか傾城の、と形容のつくような美貌ともまた違うのだ。

そう——ティアーレから感じるのは『清らかさ』だ。何処か、人間臭さを感じさせない、その雰囲気、世間知らずな内面と合いまって、『ティアーレ』という少女を形成している。

光の下であらわになった姿は、何もかもが白かった。

髪も肌も、服までも白く——けれど、不思議と冷たさも潔癖さも感じさせない『白』だ。濃紺の瞳と薄紅の唇と爪先だけが、その白を彩る。

…白い髪。銀の髪なら幾度か目にしたが、本当に白い髪を目にしたのは初めてだ。もしかすると、その稀な髪が理由なのだろうか…？

——考えても考えても、答えは見えない。その間も休みなく足を動かす。

「…！」

そして、いきなり視界が開けた。

「くそつ、こっちは駄目か」

「リユナン？」

追いついたティアーレが立ち止まったリユナンを不思議そうに見上げ、そして彼の視線を辿ると息を飲んだ。

「崖……」

そこには抉れたように大地がなかった。

巨人がその部分を削り取ったかのようなその場所は、村人が『大山狗の爪跡』と呼ぶ場所だった。

大山狗とは、かつてこの周辺に棲んでいたとされる伝説の生き物で、生物を何でも食らい尽くす怪物だったと伝えられている。

人を食らう度に肥え太り、その足音は大地を震わせたが、最後は自重で動けなくなり、そこを勇敢な戦士達によって鎖で山肌へと縛り付けられた。

大山狗はそのまま山の一部になったが、捕獲される際に暴れて大地を深く削ったという。

それが、『大山狗の爪跡』。深い断崖は、谷と呼ぶにはあまりに深く、大地の底にまで続いているとも言われている。

だが、リユナンもティアーレもそんな伝説など知りもせず、ただ突如現れた断崖絶壁に呆然となるばかりだった。

迂回するには、かなり遠回りを覚悟せねばならないし、恐らくこの場所を知る村人は迂回路を押さえている事だろう。

かと言つて、この崖を降りるなど、たとえそうした装備があつたとしても無理に決まっていた。

（……どうする……？）

ふと考え込んだ、その時。ティアーレが静かに口を開いた。

「わたし、戻ります」

「え？」

一瞬、何を言われたのかわからず、まじまじとティアーレの顔を見ると、ティアーレは真剣な目で見返してくる。

濃紺の瞳が光を受け、一瞬透き通った。

「わたしが村に戻れば、きっとリユナンは見逃してくれると思います」

「…何言ってるんだ、お前は？」

ほんのちよつと前に、最善を尽くすと決めたばかりなのに。

どうして今になってそれを覆そうとするのか、リユナンにはわからなかった。

「お前、村には戻りたくないんだろ？」

生きて行く場所を見つけないと言っていたはずだ。

もしかしたら——リユナンが死ぬ場所を見つけようとするのと、同じだけの切望をもって。

その問いかけに、ティアーレは寂しげに微笑んだ。

「…ええ。でも、もしこんな所で追手に捕まったら…リユナンに迷惑をかけます。それは嫌なんです。リユナンは物を知らないわたしを、助けようとしてくれました。…だから」

そこで一度ティアーレは言葉を切り、そしてまるで祈るように続きの言葉を口にした。

「わたしにも、リユナンを助けさせてください」

## 翼の末裔（9）

ティアーレ様、と村人達は彼女の事を呼んだ。

特別な方です、と敬意を払い、農作業を手伝おうとするとそんな事はしなくてもいい、と断られた。

村の少し奥まった場所に家を与えられ、何もしなくても食事は届き、何もしなくても衣類が整えられ、何もしなくても生きて行けた。恵まれた生活。親切な村人達。

けれど…その代わりに、自由と呼べるものはほとんどなかった。彼等は彼女に知識を与えず、彼等は彼女に生きて行く術を教えなかった。一人では何も出来ないように。

確かに身の回りの事は自分で出来るようにはしてくれたものの、与えられた家から一步外へ出ようものなら、必ず誰かがお供に着いて来た。

一人になりたかったら、家を出ずに閉じ籠るしかない。

それでも、ティアーレは村人達を嫌いにはなれなかった。

貧しい村で、人一人養う事は大変だったに違いない。しかも、まったく働き手にならない人間をだ。

感謝の気持ちをどうして感じずにいられるだろう。毎年のように、幼い子供や老人が死んで行くのを知っているのに。

そう…彼女が彼等の役に立つのは、村人が怪我したり、病気になるったり、死んだりした時だけだったから。

特別な何かをする訳ではない。ただ、彼等の為に祈りを捧げるだけ。

元気になるように。怪我が癒えますように。…安らかに眠れますように。

それだけで、何故か村人は喜んでくれた。

確かに祈った後、怪我の直りが早まったり、病気の症状が軽くなった、という話は聞いたけれど、それが自分が祈った結果だなんて、

到底思えなかった。

それでも、それしか返せるものがなかったから、祈る時は心を込めて祈った。

ティアーレ、という存在を必要とされていない事が、悲しくて淋しくて仕方がなかったけれど、そこまで望むのは我が侂だと思って——ずっと、生きてきた。

彼等は何故、自分をそんなにも特別視していたのか、今でもわからない。誰も教えてくれなかったから。

でも、あの夢を見た時、思い知ったのだ。

自分は「ティアーレ様」ではなく、ただの「ティアーレ」として生きたいのだ。誰かの為に祈るだけではなくて、誰かの為に直接力になりたい。

自分の手と足で、生きて行きたい。そう、思ったのに——。

+ + +

「駄目だ」

決死の覚悟で戻る事を決めたのに、リュナンは一言でそれを否定した。

「でも……！」

「でも、も何もないだろ。戻ってみろ、もう二度と逃げられないんじゃないかねえのか？」

「……」

見透かされたような言葉に唇を噛む。

確かに——恐らく、村人達は今まで以上にティアーレを監視するようになるだろう。二度と裏切る事のないように、完全に閉じ込めてしまいかもしれない。

優しくて親切な村人達——けれど、そうする事が出来る人々である事も、ティアーレは理解していた。今回の逃亡は、おそらく最初で最後の機会なのだ。

「それに…もう、オレも他人事たにじじゃない」

そこでようやく、リュナンは追手がティアーレだけを追っていない事を告げた。途端にティアーレの顔色が変わる。

「そんな…！ わたし、やっぱり戻って話します！ リュナンは何も悪くないって…！」

まさかそんな事になっているとは、夢にも思っていなかった。

この逃亡を手伝って貰っているだけでも、十分迷惑をかけているのに、更に盗人の嫌疑までかけさせてしまうとは——！

「わたしが一人、勝手にしたんだって！」

その疑いだけはあつてはならないものだ。

リュナンは、恩人なのだから。物を知らず、世間を知らない自分を、たとえ気まぐれだとしても助けようとしてくれた。

しかし、当のリュナンはティアーレの言葉に軽く肩を竦めて見せるのだった。

「…まあ、実際そうだけだな。でも、向こうはそれを信じてくれるかな…—— どうだよ？」

「！？」

リュナンの言葉と視線で、弾かれるようにして背後を振り返る。

そしてそこに立つ数人の見覚えのある人々を見つけ、ティアーレは息を飲んだ。

（…もう、追手が…！？）

「貴様が、ティアーレ様を攫った、そうに決まっている」

まさかと思いつつ視線を向けた先、低く言い放ったのは村の若者の中でもリーダー格の人物だった。

がっしりとした体格は、農作業や狩猟などで鍛えられたもの。どちらかという細身のリュナンと見比べると、明らかに力強そうである。

「…違います！ リュナンは、そんな事…っ」

「ティアーレ様は黙っていてください」

ぴしゃりと言い放ち、ティアーレの言葉を封じると、その両手を

持ち上げた。

やはり鍛えられた太い両腕がずっと、伸ばされる。その先にあるのは――。

「…弓矢で射殺す、か？」

「当然だ。我が村の宝、ティアーレ様をかどわした以上、生かしてはおけない」

リュナンの問いに、男は冷えた視線を投げかける。そして、リュナンの顔を見てぎよっと目を見開いたかと思うと、食い入るように凝視する。

「貴様、獣宿持ちか…！？」

男の言葉で、側にいた青年達に動揺が走る。

「何……！？」

「どうして生きて、こんな所に……！」

中にはかつてリュナンが言っていたように、空に呪いまじな言葉を書きつける抜いの呪いをする者もいて、ティアーレを驚かせた。

（獣宿って…何なの？）

まるで不浄のものでも見るかのような視線が、ティアーレには辛い。

もちろん、それはティアーレに向かってはいないのだが、リュナンがそんな視線を受ける事が辛かった。

リュナンの一体何処が、村人達と違うというのだろうか？

「…獣宿持ちめ、ティアーレ様の祈りの力を欲したか！？」

男の言葉に、ティアーレは反射的に叫ぶ。

「違います！ リュナンはそんなもの、望んじゃ……！！」

確かに自分は村では祈るばかりの存在だった。けれど、リュナンはそんなものを必要とはしなかった。第一、彼は自分の事を何も知らない。

何も知らないのに、何も出来ないちっぽけな自分を気の毒に思っ  
て助けてくれただけ。それなのに――。

しかし、村人達はティアーレの言葉に耳を傾けようとはしなかつ

た。…今までのように。

「ティアーレ様、こちらにおいで下さい。その男は呪われた存在、御身が汚れます」

「…呪われた……？」

男の言葉に思わず振り返ると、リュナンは何故か口元に微笑を浮かべていた。そして、傲然と言い放つ。

「殺るなら、さっさと殺れ<sup>や</sup>」

「……！」

「リュナン！？」

リュナンはわざとのように腕を広げ、身体の前面を無防備に曝した。

挑発なのか、それとも他に意図があるのか。普通に考えれば、正気の沙汰とは思えない行動に、村人のみならずティアーレも激しく動揺する。

まさか。

どくん、と心臓が跳ねたのがわかる。

リュナンは——あの時の言葉通り、本当に己の死を望んでいるのだろうか……？

「わかっていと思うが、一撃で仕留めろよ」

「リュナン、何を……！」

ただの挑発だと思ったかった。なのに、リュナンはティアーレに目を向けると、落着き払った顔で言うのだ。

「言っただろ、ティアーレ。オレは死ぬ場所を探している…確実にオレを殺してくれる相手がいるなら、願ってもない」

「そんな……っ！」

理解出来なかった。リュナンは本当に死のうとしているのだ。それが、彼の本当の望みなのだ。

でも——何故、ここまで彼は自分の命を捨てようとするのだろ

うか？

こんなに簡単に、捨て去れるのだろうか？

「さっさと殺せ。殺して貰うしか…オレは死ねない」

淡々と語られる言葉には、諦念が漂っていた。

「リュナン…、でも……」

「…オレは、自分で自分を殺せない。何回か失敗してるからな。もう…試す気にもならない」

ティアーレの心を見透かしたように、リュナンは自重するような笑みを浮かべてそう言った。

## 翼の末裔（10）

…そう、本来なら自分とはつくに死んでいたはずの人間。

彼の両親が、殺す事を拒んだ為生き延びた。

生きてはいてもずっと外界から隔絶され、そのまま一生を終えるはずだったのに—— 今、まだこうして生きている。本来なら知る事のない世界で。

それは偶然が重なった結果だったが、両親の選択が果たして正しかったのか、今でもリユナンはわからないでいる。

「獣宿持ちは、いつか人じゃなくなる。そうなる前に、心まで『獣』になってしまふ前に… 人である内に殺す—— それが、この世の決まりなんだ」

その決まりを教えてくれたのは、彼を取り上げたという村長の妻だった。

その時の自分は幼く、それ故に今のティアールより物を知らず、自分がそれほどに恐れられ、排斥される理由がわからなかった。

記憶に残るのは、天まで焦がすような赤々とした炎。

彼の村を焼いたのはおそらく近辺の村や集落の人間だったのだろう。《獣宿》持ちの子供—— つまりリユナンを殺そうと、村ごと焼き、毒を撒いたのだ。

たった一人の子供を殺すため、村で暮らしていた決して少なくなない人間を共に道連れにして——。

それは後にその時の事を振り返って気付いたこと。

その時は訳がわからないまま、母親の言葉に従って逃げ惑い—— 事切れた人々ばかりがいる中、ようやく出会った生きた人間がその老婆だった。

産婆を務めたからか、シドリという名の老女もまた、リユナンを恐れない人間だった。いや… 恐れる必要もなかったのかもしれない。何故なら、彼が他者から排斥されるその理由—— 《獣宿》とい

うものを教えてくれた時、彼女の命ももう尽きようとしていたのだから。

結局、村で生き残ったのは皮肉にも彼だけだった。

「そんな…リユナンは、人です。わたしに親切にしてくれた…優しい人です…！」

ティアーレが泣きそうな顔で訴える。

その顔が今はもういない母親を思い出させる。母親も…最後まで自分の事を『人』だと言い続けてくれた。…命の終わるその時まで、言い続けてくれた。

「――…オレを『人』だと言ったのは、親以外じゃお前が初めてだよ」

くすり、とリユナンは笑いを漏らし、弓矢を構えて次の行動を考えあぐねている男達を一瞥した。

彼等は獣宿が、噂話程度だとしてもどんなものか知っている。だからこそ、うかつに攻撃出来ないのだ。

それに今、リユナンの側にはティアーレが控えている。おそらくティアーレを盾にされる事も恐れているに違いなかった。

…彼等は、知らない。

獣宿を持つて生まれるという事が、どんな事なのか。人でありながら、人としての生を否定される。あらゆる人に死を望まれる、その気持ち。

理解してもらおうとも、もらいたいとも思わない。

それを望むには、あまりにも自分は汚れ過ぎた。…本性が『獣』だと否定出来ない事をやってきた。

「ほら、ここが心臓。…大丈夫、心臓の位置はお前等と一緒にだ」  
わざわざ心臓の位置まで教えてやっているのに、男達は顔を見合わせるばかりで行動には移らない。

下手に攻撃して、仕留めそこなう危険を考えているのかもしれないが、リユナンにしてみればじれったい以外の何物でもない。

(…もう、終わったっていいだろう?)

どんな形でもいい。早く楽になりたかった。

生きて、生き続けて——その行き着く先に待つのは、結局『死』か『狂気』かしかないと知っていて、生き続けたいと望む気持ちなどどうして抱き続けていられるだろう？

どちらにしても、もう自分は十七年間も生きてきた。獣宿の持ち主は皆、わかつている限りでは大人になりきらずに死んだという。ならば、自分も程なくそうなるのだろう。

でもその前に、自分が自分でなくなる可能性を考えれば、さっさと死んでしまった方が良い気がするのだ。多くを傷つけ、血を流して——命を奪う、あの行為をもう繰り返さない為にも。

「駄目です、リュナン……！！」

泣きそうな顔で、止めて欲しいとティアーレが叫ぶ。

そう言えば、結局彼女が何者なのかわからないままだった。村人達が『様』付けするような立場だという事はわかったが、結局具体的な事は何もわからないままだ。

……心残りがあるとしたら、それ位か。

「ティアーレ様、危険ですからそこから離れてください」

男がようやく口を開く。

「嫌です、やめてください！ どうしてこんな事……わたし、戻ります！ 戻りますから……！」

まるでリュナンを庇うように、ティアーレが彼等の間に立って訴える。

「リュナンは、何も関係ありません。わたしが一人でやった事です。ですから……！」

「ティアーレ様、こちらへ」

だが、ティアーレの言葉などまったく無視して、男達の一人が彼女の元へと動く。誰も彼女の言葉に耳を貸す気はないらしい。

そこでふと、リュナンはティアーレの言葉を思い出した。

『わたしには、帰る場所がない。家はありませんが、家族はいませ

んし、何より——わたしは、あの村では生きていなかった」

あの時は聞き流していたが、その言葉がある意味真実であった事を理解する。

村人達はティアーレを敬ってはいるようだ。しかし、そこに意志がある事はまるで認めていない。

その存在を必要とはしているが、彼等にとって『ティアーレ』という人格は不必要なものなのだ。

—— だから、彼女は村を出たのか。

「……や、嫌、離して下さい！」

掴まれた腕を必死に取り戻そうとしながら、ティアーレが抵抗する。

「我が俣をおっしやいますな。あの男は危険なのです！」

しかし男は強引にティアーレをリユナンから引き離す。実際のその行動は正しい。正しいと思うのに……何故だか、無性に腹が立った。このまま死んでしまおうと思っていたのに——一言言わずにはいられず口を開く。

「嫌がつているのに、無理強いするんじゃないやねえ」

「……何？」

「そいつ、自分で村を出たんだぞ。それが折角戻るって言うてくれるのに、よくそんな扱いが出来るな」

「黙れ！ この方が自分で村を出たなどと……！」

男は怒りの為か顔を赤くして怒鳴る。リユナンの言葉もまた、彼等は歯牙にもかけようとは思わないようだ。

「そんな事があるはずもない、貴様がかどわしたのだろうが！」

「何の為にだよ。そんな物もよくわかってない女、攫って何の得が……」

「白々しい嘘を——！」

一体、何が彼等をそこまで言い切らせるのか。疑問には思ったものの、特に深く追求したいとは思わなかった。

やっと終われそうなのだ。生きる事に疑問を感じながら、放浪する日々から解放されるのだ。…今度こそ。

「大方、獣宿を抜つて貰おうとも思つたのだろうが……!!」

しかし、リユナンはさらに続いた男の思わぬ言葉に衝撃を受けた。

「な……?」

そんな事は不可能なはずだ。今まで聞いた事もない。

「…獣宿を、抜つ、だって……?」

ティアーレの顔を見ると、彼女も目を丸くしている。そんな可能性など考えてもいなかった、という顔だ。

「は…そっちこそ、何を血迷つた事を。獣宿が抜えるものか。死ぬ事でしか、終わりに出来るはずがない……!」

そんな事が可能なら。

もし、本当に可能なら—— 自分も、人として生きて行けるのだろうか?

ふとそんな事を考えて、すぐに自分ではかばかしい、と否定する。それは不可能な夢。この呪いは、死ぬまで解ける事はない…絶対に第一—— たとえそんな事が可能でも、もう引き返せない場所に自分はいる。人になれたとしても、今までの『獣』の生が消えてなくなる訳ではない。

…しかし、そんな思いはたったの一言で崩される。

「この方は、死にかけた人間すらも癒す力をお持ちだ。ならば、と考える人間がいても不思議はない…貴様のようにな……!」

あくまでも言いがかりをつける男は、自分の言葉がどんなにリユナンに動揺を与えたのか、おそらく理解出来ていないだろう。

死に瀕した人間を癒す—— それはまさに、奇跡の技。

リユナンは改めてまじまじとティアーレの顔を見つめた。

その視線に気付いたのか、引きずられるように男達の方へと連れて行かれるティアーレも、真っ直ぐに彼に目を向けてくる。そしてぶんぶん、と首を横に振った。

—— 信じては駄目、そう言われた気がした。そして実際、ティ

アーレは叫ぶ。

「そんなの嘘です、リュナン…わたしには、そんな力は……！」  
しかしその言葉は、途中で途切れる。

その言葉を遮るように、男はぎり、と最後まで弓を引き絞り、リュナンの心臓に狙いを定めた。

この距離だ、正確に心臓を射抜かれれば命はない。

ティアーレが悲鳴をあげる。やめてください、というその言葉はやはり周りの男達からは黙殺される。

「せめて、最後にエフェ＝メンタールのお姿を見、声を聞けた幸運を喜ぶ事だ……！」

男はまるで餞別のようにそう言い、その手に番えた矢をついに手放す。

(…エフェ＝メンタール……？)

それはいつか何処かで耳にしたような言葉。けれど、それを何処で聞いたのか思い出す事は許されなかった。

ひゅん、と鋭く空を切る音。

十分に力を貯めていた矢は、ついにその目的を果たすべく、リュナンの胸を目指して飛び込んで来る。

リュナンは微動だにせずそれを待った。…自分の命を、終わらせる為に。

## 翼の末裔（11）

キリキリと弓矢が引き絞られる。あれが解き放たれたら、無防備なリユナンは命を落とす。

（やめて）

リユナンは死にたがっている。死ぬ事を望んでいる。

ならば、自分はそれを助けなければならない。彼が自分を助けてくれたように、彼の望みが果たされるよう、ここで止めてはならないのだ。

そう、思うのに。

（死なないで……！）

獣宿持ちが死なねばならないのだとしても、…納得は出来ないが、それが逃れられない運命なのだとしても、今、この時に死んで欲しくはなかった。

まだ、自分はちゃんと言えていない。

彼が助けてくれた事に対して、お礼の言葉をちゃんと言えていないのだ。

自分の一方的な願いを聞いてくれたのに、ありがとの一言も――

（お願い、死なないで……！）

自分には何の力もない事を、ティアールは自覚している。

村人達の言うような、癒しの力など持っているはずもない。ただ、祈る事が唯一彼女の出来る事なのは確かだった。

だから、祈った。

射手の手が、ほんの少しでも狂う事を。

リユナンが、その矢を避けてくれる事を。

…少しでもいいから、『死』を厭ってくれる事を。

—— しかして、その祈りは聞き届けられる。  
だが、皮肉にもそれは獣宿というものがどういつものかを、ティ  
アーレに知らしめるものだった……。

+ + +

ザシュツ、と肉が切り裂かれる音。

衝撃と痛みが走り、それと同時にかつと熱がそこに集まる。全身  
の血が、そこ一点に集まったかのようだ。

そこ—— 心臓よりも少し下、わき腹を挟るように切り裂き、矢  
は崖の方へと飛んでいった。ほんの一刹那、時間が止まったような  
瞬間の後、傷から勢い良く血が吹き出る。

熱い液体が飛び散り、大地を染め、腕や身体、顔にまで飛んだ。

真紅の、血。生命の…色。

そして—— 狂気の引き金。

「……」

最後の最後で、矢は外れた。

男の手元が狂ったのか、それともリユナンの身体が無意識に反応  
してしまったのか、それはもうわからない。

どくんどくんと血が駆け巡る音が聞こえる。

視界が血の色に染まって行く。

世界が、あらゆる音が、遠ざかる。

(…ああ)

絶望の中で思う。まただ。

また、自分は死ねなかった——。

思考が闇に塗りつぶされてゆく。代わりにその奥にいた自分の中  
の—— 《獣》がゆっくりと目覚めてゆく。

そして……。

『殺してしまえ、何もかも』

聞こえて来るのは、呪いの言葉。

心の奥底から聞こえて来るようなその言葉は、何故かとても心を乱す。

その通りにしたら、とても気持ちよくなれるような気がするのだ。

『壊してしまえ、全てのものを』

殺して、壊して、奪って——何も残さず食い漁れとそれは言う。そうすれば、『人』を捨てれば楽になれるとそれは嗤う。

自分の内に巢食うそれは、自分が死に瀕する度にこうして現れる。流れた血で目覚め、流れた以上の血を求めて荒れ狂うのだ。

その間の事は、何一つ覚えてはいない。ただ、わかるのは——誰かの命を奪えば奪うほど、それが自分を支配する時間が長くなっているということだけ。

だから早く死ななければと思う。

まだ少しでも自分が『人』である内に。『人』に戻る内に。

早く、早く、早く——誰か、オレを殺してくれ……！！

その焦燥もやがて全て闇に飲みこまれて。

代わりにそこに形なすのは、狂気のイキモノ——。

+ + +

どん、と激しく突き飛ばされ、ティアーレは為す術もなく頭から繁みに飛び込んでしまう。葉が肌を傷つけ、枝に引っかかってシヨールが破れる音がした。

「……ッ」

全身を打ちつけて気が遠くなる。地面と違い、それなりに衝撃は

弱まっていたものの、心の準備もなく倒れた為に受身らしいものも取れなかったせいだ。

くらりと眩暈がするのを、ぐつと齒を食いしばって耐える。

すぐに立ちあがらねばと思ったものの、何故かそうしてはならない気がして、しばらくそのままそうしていた。

それは突き飛ばされる瞬間に、自分を捕らえていた村人が『危ない』と叫んだからかもしれないし、今、すぐ背後で恐ろしい悲鳴が上がったからかもしれないかった。

そして、何かが自分の身体にもかかった。熱い——生臭いような、独特の匂いを放つ何か。それが何なのか、考えないようにする。  
(…怖い……)

一体、何が起こったのかわからない。何が起きているのかも。矢がリユナンの身体を傷つけたものの、命を絶つまでには至らなかったとわかった瞬間、周りの村人達に動揺が走った。

リユナンは噴出した自らの血で、すぐに真っ赤に染まった。

止血をしなければ、と思った時には、もう村人によって突き飛ばされていたので、それから何が起こったのかわからない。

リユナンは一撃で仕留めろ、と言っていた。そう出来なかった場合、一体何が起こるのだろうか？

聞こえてくるのは次々に上がるくぐもった断末魔の声と、応戦しようとしているのか、弓が鳴る音だけ。

反射的に耳を塞ぎ、目を閉じた。それでも恐怖は薄れなかった。

いたのは全部で七人程。それぞれがそれなりに腕に覚えのある者のはずだった。…なのに、すぐにその場は静寂に包まれる。

そして…代わりに漂うのは、考えないようにしていたのにどうしてもわかってしまう、濃密な血の匂い……。

しばらく待って、そろそろと身を起こし——ティアーレはそこに広がる凄惨な場面に身体を強張らせ、目を見開いた。声が喉の奥で凍りつき、悲鳴すらも出てこない。

先程まで生きて動いていた村人達は、みな事切れて大地に転がっ

ていた。確かめた訳ではないが、首と胴とが引き離されて生きていられる人間がいるはずもない。

「…っ、あ……」

一面が彼等の血で真っ赤だった。大地も周辺の繁みも、そしてよく見るとティアーレ自身にもその赤はあった。

それが先程浴びた何か—— 返り血なのだと理解し、目を反らしたいと思うのに反らす事も出来ない。

このままこの場面を見続けたら何かが壊れてしまふ、そう思うのに、完全に身体が固まってしまつて動けなかった。

転がる死体の中に、一人立つ姿—— リュナンだ。

（…わたしも、ここで死ぬの？）

そこに人ならぬ気配を感じて、ティアーレは思う。

死ぬかもしれない。その事に対しては怖いと思うのに、不思議とリュナン自身に対しては恐怖は感じなかった。今もその手に、村人の首を無造作に掴んでいるというのに。

獣宿とは、その名の通り獣を宿すものの事なのだ、とようやく理解する。獣でなければ—— 人の心を持たない存在でなければ、こんな惨たらしい殺し方は、きっと出来ない。

腕や首を、素手で引き千切るような殺し方など——。

一見したところ、普通の人間と変わらない彼の何処にそれほど恐ろしい力があるのか、こうして目の前に事実を突き付けられてもわからなかった。

リュナンがふと気配を感じ取ったようにティアーレの方を見る。

その赤い目に、感情らしいものはない。あるとしたら、それは狂気と呼べるものだったのかもしれないが、ティアーレにはわからなかった。

「…リュナン」

呼びかけたのは、もしかしたらリュナンが正気に返るのではないかと思つたからか、それとも別に理由があつたからか。

それすらもわからないままに、彼の名が口から零れ出ていた。

リユナンが手にした首を投げ捨て、ティアーレに向かってゆつくりとした足取りで歩み寄ってくる。それは何だか、昨夜出会った時の事をティアーレに思い出させた。

あの時も、彼は繁みの中に蹲<sup>うつくま</sup>る彼女の元へ、迷う素振りもなく歩み寄ってきたのだ。そして、迷子扱いをして、村へ送ってやるうかと言った。

…その時には確かにあった、人らしい感情が、その瞳にはない。闇の中で金に輝いた赤い瞳は、今は無表情に繁みの中のティアーレを映している。その事が無性に悲しかった。

「リユナン……」

血塗れの手が動き、迷う素振りもなくティアーレの首に伸びる。

逃げなければこのまま殺されると思うのに、ティアーレは動けなかった。ただ、ひたすらリユナンの名を紡ぐ。そうする事しか、思いつかなかった。

「リユナン」

「……」

村人達の血か、生臭い臭いが鼻をつく。

ぬるり、とした感触と共に、リユナンの指がティアーレの細い喉に絡みついた。

## 翼の末裔（12）

首に絡んだ指はすぐには締めつけず、リュナンの瞳はまるで反応を見るようにじつとティアーレの顔を見つめている。

血の色を想わせる真紅の瞳を真っ直ぐに見返して、ティアーレはせめて最後にと言葉を投げかけた。

「リュナン、ごめんなさい…だから、死にたがっていたのね」

こんな風に自分が自分でなくなると、わかっていたから。

だから、リュナンは自分を殺せ、と言ったのだ。誰かを殺すくらいなら、自分を殺そうと思う——それは、一体どんな気持ちなのだろうか。

「…本当に死にたがっていたのに…わたしは、あなたが生きてくれる事を祈り…願ってしまった。ごめんなさい……」

まるで言い終わるのを待っていたかのように、ぐ、とリュナンの指に力がこもった。

途端に呼吸をせき止められ、ティアーレは苦しさに喘ぐ。無意識にリュナンの手首を掴んで——まだ言い残した事がある事を思い出す。

果たして、リュナンに届くのかわからない。けれど、これだけは伝えておきたかった。

「リュ…ナ…、…っ、わたし、は……あな…に、かんしゃ……て」  
喉を締められ、言葉はまともに出てこない。苦しくて苦しくて、目からは生理的な涙が零れた。ガンガン、と頭が痛む。息が出来ない。目が、眩む。気が…遠のく……。

みしり、と首の骨が軋む音が聞こえた気がした。

「…あり…と……あな…と、あえて…よか……っ」

—— ありがとう。あなたと、会えて良かった。

言えた、と思った瞬間、急に喉が解放され、一気に肺へ入ってきた空気で激しく咳き込む。

しばらく何も考えられないまま咳き込んでいると、上から感情の抜け落ちたような声が落ちてきた。

「オレは、また生き延びたのか……」

咳が治まらないまま、目だけをそちらに向けると、涙で滲んだ視界にリュナンの顔が見えた。

呆然とした顔には、先程までの獣の気配はなく、彼が正気に戻った事をティアーレに知らしめる。

「リュ……ゴホツ……ッ」

良かった、正気に戻ってくれた—— そう思ったものの、まともな言葉は出てこない。発作のように咳き込むティアーレを、リュナンはただ無表情に見下ろしている。

そしてそろそろ自分の両手を持ち上げ、そこが血の赤に染まっている事を確かめると、ぎり、と唇を噛み締めた。

「オレは……また、獣になったのか」

その言葉にあるのは、深い絶望……そして悲しみ。

ティアーレはその心の痛みを思い、自分の胸もまた痛むのを感じた。それは—— こうなる事を止める事が出来なかった事への、罪悪感だったのかもしれない。

「……ティアーレ……お前は、生きてるんだな」

ようやく咳が止まったものの、まだうまく言葉の出ないティアーレにリュナンの確かめるように問い掛けてくる。せめてと思って頷けば、リュナンは少しだけほっとした顔を見せた。

「そうか……悪かったな、怖い目に、遭わせた……」

紡がれる言葉はぎこちなく、何処か震えていた。

リュナンは助け起こそうと思ったのか、まだ繁みの中に座り込んでいるティアーレに手を差し伸べかけ—— しかし、すぐに弾かれたように手を引っ込めると、くるりと背を向けてしまった。

「……リュ……ナン……?」

「…もうわかっただろう、オレは人殺しだ。見境のない…殺人鬼だ」  
「……」

「だから、もう…オレと一緒にはいない方がいい」

「…！」

リユナンはそのまま去ってしまおうとしている。

直感的に悟ったティアーレは、慌てて立ち上がった。その弾みで肩に引っかけられている程度だったショールが完全に破れて取れてしまったが、気にもならなかった。

「…待つて、下さい、リユナン……！」

ここで引きとめるのは、普通なら間違いなのに違いない。

何故なら、その現場こそ目の当たりにはしなかったものの、リユナンは確かに村人達を惨殺したのだ。

人の所業とは思えない、惨い殺し方で人の命を奪い——ティアーレ自身も、もう少しで殺される所だった。

リユナンの言葉通り、彼は殺人者で——そして、このような事は今回が初めてではないのだ。

そう…、わかっているのに。

「行かないで…下さい、どうか……っ」

まだ、言葉を話そうとすると喉が痛む。それでも必死にティアーレは言葉を投げかける。

くらり、と眩暈が起こり、すうつと血の気が引くのを知覚する。

極度の緊張状態と酸欠、そういった状態で、急に立ち上がったせいだろう。

（…だめ、ここで倒れたら……！）

きっと彼は、ここから去ってしまう。何処かへ行ってしまう。

そうしたらきっと、もう二度と会えない。

必死に意識を保とうと努力するが、それは失敗に終わる。

急激に暗くなっていく視界の中、ティアーレはリユナンの背中だけをみつめた。孤独と絶望に満ちたその背中だけを。

「…おねが……」

—— どうか、行つてしまわないで。  
それが最後に思った事。そしてそのまま、ティアーレの意識は闇に閉ざされた……。

+ + +

どさり、と何かが倒れる音。

その音はどうしてこんなにも不吉に聞こえるのだろうか。…思わず振り返ってしまうほど。

振り返ったその先には、かつて人であつたものが流した血潮に染まった大地。そしてそこに横たわる、白い人。

その姿は遠い昔を思い出させる。ずっと昔—— まだ彼が子供だった頃の、彼が自由になつた日の事を。…母親が死んでしまった時の事を。

「…ティアーレ？」

不安に駆られるようにして呼びかける。

けれど、ティアーレは返事をしなかった。完全に意識を手放してしまっているのだろう。

命に別状がないのなら、このままこの場を後にすべきだと思うのに、リユナンは動く事が出来なかった。

ただじつと、地に伏したティアーレを見つめる。

他の村人がこちらにやつて来る気配は今の所ないが、戻らない村人を怪訝けげんに思つて人が探しに来るのも時間の問題だ。

この惨状を見た後自分を見れば、すぐに何が起こつたのかわかる事だろう。

…これ以上無駄な血を流さない為にも、出来るだけ早くここを去るのが得策に違いなかった。

—— けれど。

ティアーレ。彼女をこんな所に一人残して行くのは—— しかも意識のない状態で—— 気が咎めた。

おそらく、これでティアーレも獣宿がいかなるものかわかったはずだ。

それでもなお、引き止めてくれたものの、おそらく今後は彼女の自分を見る目も変わるに違いなかった。

自分がティアーレの立場なら、これ以上関わりを持とうとしない。

…呪われた生。呪われた身体、呪われた血。

それは—— 自分を含めたあらゆる生き物にとって、忌むべきもの。そんな存在とこれ以上一緒にいた所で、ティアーレに何の利点もない。

それでも。ここから一人、立ち去る事が出来ない。

…村へは戻りたくない、と彼女は言った。村には彼女の本当の居場所が存在しないであろう事も、リユナンは知った。

このままここへ置いて行けば、おそらくティアーレは村へと連れ戻されるだろう。そして、今度はもう、村を出る事だつて出来ないに違いない。

誘われるように、そろそろと意識を手放したティアーレに歩み寄る。けれど血で汚れた手で抱き起こす事は出来なくて、そのままティアーレの身体を見下ろした。

白い服が血で所々赤く染まっていた。ティアーレ自身ではなく、単なる返り血のようだったが、それでもやはり目に訴える。

ショールが破れて、すぐ横の木の枝に絡まっていた。

下に着ていた服は、ショールをかけていた時はまったく気付かなかったが、大胆とも言える程に背の部分が開いたもの。

そこから、白い白い、背が覗く。滑らかなその背を、リユナンは我知らず凝視していた。

今まで隠されていた白い背—— そこに走る、無残な傷痕を……。

## 翼の末裔（13）

—— これは、今ではもう、誰も知らない物語。

大地のずっと、奥深く。

そこには昔、一匹の獣が棲んでいました。

それはとても強い力を持っていましたが、普段はずっと眠っていて、余程の事がない限りは目覚める事はありませんでした。

何故なら、獣は知っていたのです。

自分が目覚めると、必ず何かが壊れて失われてしまうのだという事を。

何故なら、獣は自覚していたのです。

自分が自分以外の存在にとって、どんな存在であるのかを。

獣はずっとずっと、独りきりで眠っていました。

夢も見ずに、眠り続けました。

このまま、目覚める事が二度となければいいと、願って眠り続けていました。

というのも、獣はかつて目覚めた時に、その力を抑える事も出来ず、多くの生命を奪ってしまったからです。

獣は孤独でしたから、身の回りの世界が失われる事とても恐れていました。

たとえ、自分の事を必要とされなくても…自分を恐れようとも、自分というものを認識してくれる存在を失いたくはなかったのです。全てがなくなってしまうたら、獣は本当に世界に独りきりになってしまうのですから。

…しかし、あまりに長すぎる眠りは、いつしか獣から心を奪いました。

心を失った獣は、形を失いました。

—— そして、そこにはずっと獣が内で抱き続けていた「感情」

だけが残されたのです。

ずっとずっと、獣が心の奥底に抱え、見まいとしていた、『負』の感情だけが。

悲しい—— どうして、こんな淋しい場所にいなければならないのか。

辛い—— どうして、こんな場所で眠り続けねばならないのか。

憎い—— どうして、自分はこんな力を持ってしまったのか。

羨ましい—— どうして、自分以外の存在は幸せに生きる事を許されるのか。

大地の奥深くで、そんな思いが坩堝るじほのように渦巻いて溶け合い、最後に一つのものだけが残ったのです。

それは—— 『淋しい』。

意志を失った獣の心は、その最後の願いを叶える為に動き出しました。

孤独を癒してくれる何かを求めて—— 地上へと。  
けれど。

形すら失った獣は、それでもやはりあらゆる存在にとって、災厄でしかなかったのです……。

形を失った獣は、あまりにも不安定でした。

もはや本能しかないそれは、己がどんな存在であつたかも忘れて、『形』を求めました。

最初は森に生息する小動物に。

けれどそれには収まりきれず、次はそれを餌にする猛禽類に。

それでもやはり収まりきれずに、求める『形』はどんどん大きく凶暴な生き物になって行きました。

獣は己の抱える飢えが元々なんであるのかすら、忘れていたので

す。

より原始的な本能——食欲に置き換わってしまったそれは、血を求めて荒れ狂いました。

食べて、食べて、貪って、食い散らかして。

それでも満たされる事はなく、たくさんの命が為す術もなく奪われました。

流れた血が大地を赤く染めて行き——全ての命が絶えるかに思われました。

しかし、ある時。

獣の前に一人の人間が現れました。

獣が襲いかかるその刹那、その人間は言ったのです。

『愚かなことを。全てを絶やした所で、後にはお前が残るだけというのに』

初めて誰かに語りかけられた獣は、振り下ろした腕を止めようと思いました。

それはそれまで本能だけで動いていた獣が、初めてそれに逆らった瞬間でした。

けれど——止めるにはあまりにも獣は大きくなりすぎていたのです。

自重で加速のついた爪は、あまりにもあっけなくその人間を粉々に引き裂いていました。

もはや語る事のないその人間を、獣は茫然と見つめました。思い出したのです。どうしてここに自分がいるのかを。

何を、望んでいたのかを。

獣は泣き叫びました。

獣は己を呪いました。

また眠りに就いたところで、きつと同じような事が起こるに違いない、と。

—— 滅びてあれ、と。

けれど獣は滅びの化身。

自分で自分を滅ぼす事が出来ません。

そしていつしか獣は、また形を失い、心を喪い—— そしてついに自分を含めた全てを滅ぼす呪いそのものに姿を変えて。

『ホロンデシマエ』

『キエテシマエ』

『コロシテシマエ』

全ての滅びを叫ぶその呪いは、いつしか大地全てを飲み込み包んで行きました。

—— これは、今ではもう、誰も知らない一匹の哀れな獣の物語。それは今でも終わらない悪夢の中、全てが終わる時を待ち続けているのです——。

夢？

…ここは、何処だろう。

足元に、何か大きくて黒いものがある。

あれは、何？

— ここは…月。

月？

— そう…そして、あの黒いものが、大地。

— 呪われた『獣』に蹂躪じゅうりゃんされた、不浄の地。

あれが……？

あんな所に、人は暮らしているの……？

— そう…毒に蝕まれながら。

— あれでもいくらか清められた方よ。

— けれど…まだ、あんなに穢れている。

— あれが消えるまでに一体どれ程の時間がかかるのか…誰にもわからない。

どうして、あんな風になってしまったの？

— それもわからない。

— あまりにも昔の事で、もう何処にもその記録が残っていないから。

— わかっている事は、ずっとずっと昔…月の民と地上の民が生まれた頃には、まだあんな風ではなかったという事と、あれが『

『獣』の仕業だという事だけ。

…『獣』？

それは、生き物なの？

— さあ？

— そう呼ばれているだけで、実際は生き物ですらないのかも  
しれないけれど。

— 記録に残らなくても、それは随分と昔からそこにいたら  
しわ。

— そしてある時、穢れを吐き出して地上はあんな風に穢れて  
しまった。

あれでは…死んでしまう— 何もかも…人も生き物も。

あれでは…狂ってしまう— 本来の在り方すらも。

わたしの大切な大切な— 存在<sup>ひと</sup>も……！

— …だからわたし達がいる。

— 大事な存在を癒し慈しむ為に。

— その為にわたし達はここにいる。

…その為に？

— そう…その為に、月へとわたし達は『帰る』事を決めたの。

— 遠く離れたこの場所で、『祈り』を形とする為に。

…どうして？

地上ではどうしてそれが出来なかったの？

— 仕方がないの……。

—— 地上の穢れはあまりにも強すぎて、わたし達の祈りすらも歪めてしまう。

—— 穢れに染まってしまっ前に、月へ帰らなければ……わたし達は……。

わたし達は……？

—— わたし達は、あの穢れを受け止めてしまう。

—— 理由はわからないけれど、人より耐性がある代わりなのか……祈りの力を喪ってしまうの。

—— 本来は癒し、清める為の祈りは別の形に変質して、本来なら守られるべき人に向かう。

—— そしてそれは呪いとなって……結果として、また地上の穢れは増す。

そんな……！

何故、そんな事に？

—— それはわたし達が、月の民としてよりも地上の民としての血の方を多く持つからかもしれない。

—— 人に近いから……。

—— だから……。

だから？

—— だからわたし達は……唯一無二の《片翼》を守る為にも、ここへ来なければならない。

—— 出来るだけ、一刻も早く。

—— 《片翼》が『獣』に染まってしまっ前に……。

一刻も早く……？

でも、もう『月』は—— 帰るべき場所は。

わたしが帰らねばならない場所は、もう、何処にも——……。

## 翼の末裔（14）

闇夜の中、少女が一人走っていた。

一応は街と街を結ぶ街道ではあるものの、太陽がその姿を消した時分では人通りなど皆無だ。時折聞こえる虫の鳴き声や夜行性の鳥の声以外では、少女の立てる一人分の足音しか聞こえない。

「ハッ、ハッ、ハッ」

息を乱し、時に足をもつれさせながら、少女は必死に走る。

見た所、十四、五歳。小柄で痩せぎすな、これという特徴もない娘。身に着けているのも、いかにも普段着だし、旅装にしてはあまりにも軽装だ。

荷物という荷物もなく、その腕に大事そうに抱え込んでいる包み以外は日除けのマントすら見当たらない。

包み——否。

少女は荷物すら持つていなかった。まさに身一つで抱えるのは、生後間もないと思われる赤子だった。

おくるみに包まれ、今は眠っているらしい。泣き疲れた結果なのか、その頬にはまだ涙の跡が色濃く残っている。

「も、…だ、め……」

息も絶え絶えに呟き、少女の足はついに止まった。

よろけながら道端に移動するや、そのままペタリと座りこむ。

ゼエゼエと荒い呼吸を必死に整えながら、少女は自身が抱えていた赤子の様子をそろそろと見た。

（…どうしよう）

途方に暮れた表情で、少女は赤子の顔をじっと見つめる。

（これから、どうしたら……）

この道は少女の故郷へと繋がっている。

正確には故郷の村のある山へ、と表現するべきなのだろうけれども。

山間の深い谷に囲まれた小さな村。道と言う道などない為、そこにたどり着くのはその周辺の地理に詳しい者が、偶然迷い込んだ者くらいだ。

そうした村は常に貧困を抱えており、少女も十の年に出稼ぎに出た口だ。

下働きの下働き程度の身分だが、運も良かったのだらう。ある高貴な家に仕える事が出来、さらに主人にも恵まれ、それまでの事を考えると天と地ほど違う生活の中にいた。

—— 昨日までは。

おそろおそろ、背後に目を向ける。まだ、追手が来る様子はない（大丈夫、大丈夫よ。あたしなんて、あそこじゃ取るに足らない身分の一人だったじゃない。他にもたくさん逃げ出した人がいるし、まさかあたしが預かったなんて誰も思わないわ）

恐怖で震えそうな心にそう言い聞かせ、少女はそつと赤子を抱き締めた。

そう、この赤子は彼女の主人からの預かり物だった。綺麗で聡明で、そして優しくった敬愛する女主人が、命がけで守ろうとしたものだ。

『お前に託します。…この子を隠して』

最後に聞いた言葉を思い出して、泣きたくなる。

あれほど賢い人だったから、きっとあらゆる手段を考えた上でそれが一番最良だと思ったのだらう。

数多くいる使用人の中で自分を選んでくれた事は嬉しい。けれど、どうして自分だったのだらうとも思う。

抱えた赤子はおそろしく軽い。

村にいた頃は子守をしていたから、その軽さが異常な事はわかる。異常だが—— 決して赤子が死にかけていたり、満足に食事を与えられていなかった訳ではない。

だからこそ、隠さねばならないのだ。

自分もこの目で見なければ信じられなかったが、この赤子は奇跡の存在だ。そして同時に、他に知られる訳には行かない秘密でもある。生まれた事すら秘されていた位に。

その時にはあった、背にあった小さな『翼』は今はない。

このおくるみを取ればそこにはまだ傷跡も生々しい、無残な跡がある。実の母親によつて、もぎ取られたのだ。

なんと惨い仕打ちを、と思う人もいるだろう。けれどそうせざるを得ない状況だったのだ。

—— おそらく、かの人はこの世の人ではないだろう。

そう思うと涙が込み上げて来る。泣いている場合ではないと必死に耐えるものの、先程とは違う息苦しさが身体を支配する。

そして、ろくに母の温もりを知らないままの赤子を哀れだと思う。緊急時だったのではほとんど身一つだが、路銀だけはある。別れ際に主人がくれたのだ。この先にある街で旅装を整えなければ。

どんなに似ていなくても、この赤子は妹という事にするしかない。赤ん坊は泣く事が仕事のようなものだから、目立たないという訳には行かないだろう。

それをどう誤魔化せばいいのか考えると、少々憂鬱ではあるがやり遂げなければならぬ。

行く先を故郷にしたのは特に理由はない。そこ以外に行く先を思いつけなかったからだ。

けれど、おそらく隠し場所としては最適だろう。地図にすら載らない小さな村だ。帰つて来た理由を説明する必要は出るだろうが、それが外に出る可能性は限りなく少ない。

それくらい閉鎖的な村なのだ。

隠して……隠し続けて、果たしてそれがこの子にとって幸せな事なのだろうかという疑問は残るけれど。

周囲も見上げた空も全て闇の色。

先行きが見えない今、腕の中にある小さな温もりだけが心の支え

だった。

「…ごめんね」

もし自分もつと大人で、もつと賢くて、もつと強かったら。そしたらきっと、違う未来をこの子に与えて上げられたに違いなけれど。

「ちゃんと守ってあげられなくて、ごめんね……」

でも自分は子供で、頭もあまり良くないし、自分の身すら守れるか怪しいから。せめて、この命をかけるしかない。

主人がこの子を守る為に命をかけたように。

+ + +

—— 見上げた空は真っ暗だった。

いつかの時と同じだと、ぼんやりと思う。

都から逃げ出して、必死に街道を走ったあの時と。違うのは、腕に抱えていた赤子がいない事と—— 自分が死にかけているという事だろうか。

軽く咳き込めば、こふつという音と共に鮮血が溢れた。

寒い。

明らかに血が足りていない。足先から、指先から、熱がどんどん奪われていく。

不思議と痛みはなかった。

流石に切りつけられた時はおそろしく痛かったけれど、でも今はもう何も感じない。失血すぎて痛覚が麻痺しているのかもしれない。

失敗した、と思った。

でも同時に、ざまあみろと思う。

自分が死ねば、きつとあの子は永遠に守られる。自分が何処から来たのかなんて、この街の人間は誰も知らない。自分があの子を預かった事なんて、誰も知らない。

——自分の元にまで追手が来たという事には、正直驚いたけれど。

(…必死な事ね)

正統性を主張する為か、それとも象徴として欲しているのか。それとも、かつて聞いた噂——死病を患わっている——は真実だったのか？

追手を差し向けてきたであろう人物を思い、心の中でせせら笑う。(残念でした…『翼』はあなたの物にはならないわ。せいぜいのたうち回って、死ねばいい)

思い出すのは村を出る自分を見送っていた少女の姿。

何も知らず、手を振っていたあの子は——これからどうなるのだろう。自分がいなくなったら、あの村でどんな扱いを受けるかわからない。

ひどい目に遭う事はないだろうが、自由はおそらくないだろう。でもきつと、見つかるよりはずっといいはずだ。見つければ一体どんな目に遭うか。

両親の良い部分を受け継いだあの優しい子に、あんな醜い世界を見せたくはない。たとえエゴでも、このまま何も知らないまま生きて欲しいと思う。

少しずつ遠のいて行く意識。ああ、死ぬのだと思った。

十六年——人生としてはきつと短い方だ。それでも不思議と悔いはなかった。

自分はやり遂げたのだ。形はどうあれ、主人の最後の願いを守りきった。守る事が出来た。

主人に初めて誉めてもらえた時のことを思い出す。

誰も気づかないような小さな事なのに気付いてもらえて、どんなに嬉しかっただろう。気さくに話しかけてもらえた時は、天にも昇る気持ちになった。

貴女の選択は間違いはなかったと、今なら思う。

取るに足りない自分だからこそ、守れたのだと今は思える。実際、

追手は自分の言葉を疑いもしなかった。特に取り柄もない、平凡でちつぱけな自分でも大切なものを守る事は出来たのだ。

(… 誉めて、下さいますか……?)

遠い面影に思いを馳せて、目を閉じる。

こんな終わりを想像していなかった訳ではない。もっと悔やむのではないかとも思っていた。

けれど——そこにはただ、充足感しかなかった。

+ + +

街のはずれで一人息絶えた少女が見つかるのは、それから半日が過ぎた頃のこと。

明らかな一刀での切り傷に不審を覚える人がいなかった訳ではない。

物取りならそんな立派な武器など持つてはいない。それこそ、相應の身分を持つ者でもなければ。

しかし特に特徴という特徴もない少女が何処の人間なのか知る者はおらず、治安の悪さも手伝ってその事はそのまま日常に紛れて消える事となる。

——少女が身をもって守ろうとした秘密は、こうしてその願い通りに守られたのだった。

## 翼の末裔（15）

まるで何かに引き裂かれた跡のような、醜く引き攣れた傷。それが丁度、ティアーレの左右の肩甲骨の辺りにあった。

（…この傷は、なんだ？）

村人達に貴人のように扱われていたにしては、あまりにもひどい傷痕だ。

しかも見た所では、それ程古い傷痕のようでもない。何処か生々しさの残るそれは、たった今ついたものではないが、少なくともここ数年でついたものだろう。

なまじ染み一つない白い背であるが故に、その傷は目に強烈に焼きつき、そして痛々しく見えた。

それ程の傷だと言うのに、それを隠そうとしない服装なのが奇妙に思える。むしろ—— 逆に目立たせようとしているかのような。

（まさか、な……）

そうは思うものの、実際リユナンはその背からしばらく視線を外せずにいた。

村人達のティアーレに対する態度が、リユナンにそう思わせたのかもしれない。あの、『宝』と言いながらも、ティアーレの人格を無視するような、あの態度が。

世間知らずというだけでなく、多少風変わりな感は否めないものの、ティアーレも年頃の娘のはずだ。身体に傷があるなど、隠したいと思うのが普通ではないだろうか？

確かに先程まではシヨールで隠れてはいたが、隠す為のもののように思えなかった。おそらく単純に防寒の為だろう。

それとも…ひょっとしたらティアーレ自身は気付いていないのかもしれない。背に走る傷が、これ程にひどいものである事を。

自分の背中など、見ようと思っただけのものではない。鏡は高価なものだし、上半身を映すだけの物でも相応の値段がする。こんな

辺境では、あつたとしても小さなものだろう。

周囲の人間が口を揃えて大したことはないと言えば、それを信じるだろう。

（何だか…羽でも、もいだみたいだな）

そんな事を思い、その想像に何か引つかるものを感じる。

そう言えば矢を受ける前に、村人達が言っていなかっただろうか。  
『エフェ＝メンタール』という耳馴染みの薄い言葉を。

それは、今ではもう伝説になった存在ではなかったか。

子供の頃、寝物語に聞いただけの為、具体的な事はろくに覚えていない。確か永い月日の中で生まれなくなっていき、今ではもういないという話だったように思う。

背に翼を持つ、心優しき佳人——ティアレはそれだと言うのだろうか。

（…そんなはずはないか）

しつくり来ると言えば確かにそうなのだが、もしそうだとすると、その象徴たる翼を奪う理由がないし、背に翼を持つ存在など、とてもではないが実在するとは信じられない。

リユナンはようやく視線を反らすと、再び自らの手を見つめた。

村人達の血に塗れたそれは、すでに赤黒く変色し始めている。

自らの傷を見れば、矢で切り裂かれたそこは、すでに再生した血肉によって傷痕すら見出せない。引き千切られた服がなければ、何処を傷つけられたのかもわからないだろう。

何度となく確認してきた事だ。自分は人の姿をしていても、『人』ではない。異常なまでの治癒力がその事実を強調する。

——人ならぬモノなら、今ここにいる。

彼女は『人』だ。形は間違っている、誰かに必要とされていた存在だ。

…死を望まれ、自分でもそれを望み——なのにいつまでもそうする事が出来ずに、不幸ばかりをまき散らす自分とは違う。

『獣』になった自分を見ても、行くなと引き留めてくれた存在。

恐怖以外の感情を向けてきた、初めての――。

ここに置き去りにした結果、村へと連れ戻された時、果たして彼女は自分を恨むだろうか？

（……。恨む前に許しそうだよな、こいつ……）

たった半日にも満たない間。その間だけしか一緒にいた訳ではないというのに――その想像は何故か簡単に出来た。

置き去りにしたリユナンを『仕方ない』と許し、そして村から二度と出られなくなっても、それが運命なのだと諦める、その姿が思い浮かぶ。

何故ならティアーレは彼を助ける為に、自分の意志で飛び出したはずの村へ帰ると言った位なのだから。

いくら恩義を感じたにしても、村を出たのは相当思い切った行動だったはずだ。それを撤回してでも、自分に迷惑をかけるまいとしたお人好し。

運よく村人に見つかる前に気がついたとしても、この様子では一人で旅など出来るとは思えない。騙され、奪われ、最悪――殺されるだろう。

「……」

リユナンは完全に破れてしまったティアーレのショールを枝から外すと、意識のないティアーレの背にそっとかけた。

服としてはほとんど役に立たないが、多少なりと傷は隠れる。そのまましばらく迷った後、その身体を抱き上げた。

自分よりいくらか低い程度の身長なのに……しかも意識のない状態でありながら、その身体は信じられない程に軽い。確かに華奢ではあるのだが、それでも小さな子供だってもっと重い気がするほどだ。その事を疑問に感じながらも、リユナンは歩き出す。

これで本当に人攫いになってしまふ、と思いつつ、けれどその足取りに迷いはない。

「……約束は、守らないと、な」

言い訳のように呟いて。それでもこのまま放置する事は出来なか

ったのだ。

助けてやる、と自分はティアーレに言った。

あの時はそこまで考えて言った言葉ではなかったけれども、自分が死ぬまでの間くらい——人としていられる間くらいは、その言葉を守りたいと思った。

抱き上げるこの腕も、手も、身体全体が数え切れない人の血で汚れてしまっているし、この身は呪われたものだ。

けれど、この世間知らずな少女が一人で立てるようになるまで、襲いかかるであろう困難から守る事くらいは出来るだろう。

…最初にティアーレが自分にくれた信頼を裏切りたくはなかった。たとえ目覚めた後、ティアーレが自分を恐れても。

世界中の誰もが自分を人だと認めてくれないとしても、せめて心だけはまだ人でありたいと思う。許されないのだとしても、生きている限りは人でありたかった。

「……？」

ティアーレが身じろぎして、反射的にそちらを見ると、何処か安心したような顔でティアーレはリュナンに身を預けてくる。

その白い手が、きゅ、とリュナンの血塗れの服を握りしめるのを、何だか不思議な気持ちで見つめた。

無意識の行動に意味などないと思う。昨夜と同様、温もりを求めただけであって、別に自分という存在が必要とされている訳ではない事もわかっている。

…それでも。

「ガキみてー……」

呆れたように呟きながらも、心が少しだけ軽くなったのを自覚する。

…目が覚めてもティアーレは今までと変わらないかもしれない。そんな予感がした。

期待などすべきではないと思うのに、今この時はリュナンは自分の選択が間違いではないのだと信じられた。

一度だけ振り返れば、そこには凄惨な光景が広がっている。この先、何度もこんな光景を見せ続ける事になるかもしれない。その事を思うと胸が痛むけれど――。

そして、リユナンはそのまま森の中へと姿を消す。

事切れた村人達の骸を他の村人達が発見するのは、彼等がその場から姿を消してからおよそ半刻が過ぎる頃。

そして、村人達は知る。

彼等の『翼』が、『獣』によって奪われた事を――。

## 翼の末裔（16）

目を開くと、木の葉が風で揺れているのが見えた。

微かに漂う水の匂い。遠くで小さく、水音が聞こえた。

（…ここは……？）

何か、夢を見ていたような気がする。

何か——とてもとても恐ろしくて、悲しい夢。そして何処か、懐かしい夢。けれど、その輪郭は曖昧で、どんな内容だったのかまでは思い出せない。

そろそろと身を起こすと、先程までの惨状はなく、木にもたれかかるように寝かされていた。

一瞬、あの惨劇が夢だったのではないか思ってしまうほどの平穏な光景。けれど身体を見れば、服に所々赤黒い染みがある。…それが何か、思い出す努力をしなくてもすぐにわかった。

村人達がリュナンに殺されたのは、夢ではない。つい先程まで見ていた、よく内容も覚えていない夢とは違う、現実の事だ。

（…そうだ、リュナンは……？）

きよろきよろと辺りを見まわすと、少し離れた水辺に人影を見つけた。何かを洗っているらしく、水音がしている。先程聞こえてきた音はこれらしい。

「…リュナン……？」

声をかけようと口を開いたものの、それは何処か掠れて力のないものだった。何故だろうと思う前に喉が痛んで、そう言えば意識を失う前に首を締められたのだ、と思い出す。

そつと手で触れる。痛みは薄れているものの、そこに絡みついた指の感覚はまだ残っている。見えはしないが、おそらく痣くらいは出来ているだろう。

「ティアーレ…気がついたのか？」

おそらく届かないだろうと思ったのに、リュナンはそんな細かい声

をきちんと拾ったようだった。水辺を離れてこちらにやって来てくれる。

よく考えてみれば、ティアーレの耳ではわからなかった村人達の声を拾い上げた耳の持ち主だ。この距離で気付かないはずもない。

「ここは……？」

尋ねると、リュナンは軽く肩を竦める。

よく見ると、その髪や服が濡れていた。先程の水音は、浴びた村人達の血を洗い流していたのだと理解する。

流石に服にかかった血までは取れなかったようだが、顔や腕、手からあの赤色が消えている。それだけの事で何故だかほっとした。

「何処と聞かれても、森だとしか答えられねえな。…気分は？」

「あ、平気、です……」

確かに森という答え以外、答えようのない場所だ。そんなばかな質問をしてしまった事を恥ずかしく思いながら、改めてリュナンの顔を見る。

先程から何だか違和感を感じていたのだが、そうしてようやくその原因に気付いた。

「リュナン…瞳の色が？」

「ああ、これか」

ティアーレの問いに、リュナンは手を目元にやりながら、微笑を浮かべる。

その瞳は初めて出会った時の金でも、明るい場所で見ただけでもなかった。…髪と同じ、深い黒。

「これは…オレの中の《獣》が眠りに就いた証みたいなものだな。血で満たされるとこうなるらしい」

「…じゃあ、しばらくしたらまた……？」

「ああ、元に戻る。…自分だといつ戻ったのかわからないのが困るがな。こうなっている間はオレが獣宿持ちだって気付かれない——不幸中の、幸いってやつか」

何処か言葉に苦いものを漂わせるリュナンは、確かに黒い瞳にな

ると、ごく普通の青年にしか見えなかった。

今までの血を想わせる赤い瞳が目についていたからか、別人みたいにティアーレは感じてしまう。

…見る度に、リユナンが変わっているような、そんな感覚。変わったといつても、瞳の色だけなのに。

リユナンと言葉を交わし、姿を確かめ——　そこまで認識してようやく、ティアーレはリユナンが自分の側にいる事を実感した。

…彼は、自分を置き去りにはしなかったのだ。知らず笑みが浮かぶ。

「…行かないで、くれたんですね」

「あ？　…ああ、約束しただろ」

リユナンが照れ臭そうな顔でぼそりと言う。

約束、と言われて一瞬何の事だかわからなかったものの、すぐにそれが何を指しているのか思い出した。

『助けてやるよ』——　一番最初に出会った時に言ってくれた、あの言葉を。

「…どうして、助けてくれるんですか？」

嬉しい反面、何処か信じきれずに尋ねる。

自分はきつとリユナンが一番知られたくないであろう姿を知った。そうなる状況を作り出してしまったと言っても過言ではない。

その自分をまだ手助けしてくれる理由がわからなかった。

「わたしは……」

「そういうお前こそ、どうしてオレを引き留めたんだよ？」

「え？」

「お前は見ただろう、オレが人でなくなった姿を。罪もない村人を殺して…お前だって、殺されかけただろう？　なのにどうして…引き留めたんだ。オレが怖くないのか？」

「それは……」

実際、追求されると返事に困ってしまう。

怖くはないのか、と聞かれれば、確かに死を覚悟した時のあの恐

怖感を思い出してしまふ。けれど、正氣に戻ったリュナン自身に対しては恐怖感を感じなかった。

村人達の最後は、きつとこれから先も忘れる事はない。忘れようと思つても、きつと忘れられないだろう。

瞬く間に奪われた命——それだけの事をした人物だとわかつているのに、村人達のように、リュナンを化け物扱いする事は出来なかった。

何故ならあれは、この自分こそが招いた事だから。

「怖くはありません」

それは、確かな事。そして、もう一つ確かなのは——。

「それに……わたしはあの時、村の人達が死んでしまつても悲しみなど感じなかった。リュナンが傷ついた事の方が、辛かった。——

あんなに良くしてくれた村の人達が目の前で死んでも……悲しくなかったんです、リュナン」

「……ティアーレ……」

自分はなんて残酷な人間なのだろうかと思つた。

感謝していたはずだった。誤解があつたとしても、彼等は自分を助けようとしていただけのに——自分は連れ戻される事を嫌がるばかりか、その死すら悼めなかったのだから。

そして今だつて、もし彼等の為に祈れと言われたとしても、今まで通里心を込めて祈る事が出来るか怪しい。

「リュナン……あなたは自分を人ではないと言いました。でも……わたしもきつと、人じゃないんです」

彼等の死を気の毒だとは思つても、自業自得だとは思えなかった。何故なら——彼等はリュナンを、先に殺そうとした。無実な彼を、一方的に殺そうとしたのだ。

「……わたしには、リュナンを恐れたり、非難する権利などありません。むしろ……あなたの苦しみを増やしてしまつた。……ごめんなさい」  
どうして引き留めてしまつたのか、言葉にしてやつと理解する。

そうだ——自分は、リュナンに謝りたかつたのだ。結果的に彼

を傷付けてしまった事に対して、謝罪をしたかったのだ……。

「…何で謝るんだ？」

対するリュナンは困惑した表情でティアーレに問い掛ける。

実際、彼にはティアーレが謝る理由がよくわからなかった。村人達の死を悲しめなかったと言う言葉も、村人達の態度を思い出せば当然の事のようにリュナンは感じる。

彼等は明らかにティアーレを『物』のように扱っていた。もし自分がティアーレと同じ立場なら、やはり罪悪感など抱かない気さえする。

「言っただろう？ あいつ等の対応が普通なんだ。…《獣宿》持ち  
は生きてこの世界に関わってはならないんだから……」

そう、それが常識。だからティアーレに謝られる必要などないはずなのだ。

…なのに。

「それでも、あの人達が攻撃しなければ…リュナンを傷付けなければ、リュナンは彼等を殺さずに済んだはずでしょう？」

静かにティアーレは言う。

それがどんなに常識外れも甚だしい事なのか、わかっているのか  
いないのか。…おそらく、わかっていないのだろう。

でも、その言葉はリュナンの心を打つ。与えられる事がないと思  
っていたからこそ、心の奥に届く。

…ずっと、誰かにそう言ってもらいたかった。

望んで人の命を奪っている訳ではないのだと、わかってもらいた  
かった。その事で己の罪が軽くなるなどとは思っていないけれど。  
それでも――。

「悪いのはわたしの方です。そして…たとえ人殺しであっても、わ  
たしにとってリュナンは恩人です。…『助けてやる』って言葉が、  
本当に嬉しかったんです。だから、わたしはあなたを嫌ったり恐れ  
たりしません。…これから先も、きっと」

そしてティアーレは微笑む。そこには全く嘘はない。つられるよ

うに、リュナンの口元にも笑みが浮かんだ。

負けた、と何故だか思った。

世間知らずで、常識が欠けていて、危なっかしい——こちらが手助けしなければ、絶対にすぐに遭難しかねない有様の相手だと思ふのに。

一体何に對して、どういう理由でそう思ったのかわからないまま、それでも敵わない、と思う。泣きたい気持ちになる。…癒される。

「…行くか？」

「はい、リュナン」

手を差し伸べて尋ねると、子供のように無邪気な笑顔でティアーレは頷く。そして迷う素振りもなく、彼の手を取った。

その時のティアーレの笑顔と手の温もりを、リュナンは一生忘れる事はないだろうと思った。

自分を恐れず『人』として見つめる瞳。与えられる心からの笑顔。触れてくれる手。

それ程に綺麗で、泣きなくなる程に優しくかったそれは、独りになったその時から彼が決して手にする事がないと諦めていて…けれど心の底ですつと欲していたものだったから——。

+ + +

「…まずはこの格好をどうにかしないとな」

お互いの身体を見下ろして、苦笑混じりにリュナンが言う。

確かに二人の有様はあまりにもひどすぎるものだった。

リュナンの服は洗い流したものの、血の染みがべったりとついてしまっている上に、心臓のすぐ下の辺りに穴が空いていたし、ティアーレはと言えば、肩にかけていたショールはもはやその役目を果たしておらず、ぼろぼろに破れてしまっており、服にはやはり返り血の染みがついてしまっているのだ。

「でも、こんな姿で別の村に入ったら余計に怪しまれませんか？」

「…そうだな」

ティアーレの素朴な疑問に、リユナンも頷く。

追いはぎにあった風を装ったとしても、服の被害に対して、二人はあまりに無傷過ぎた。二人は歩きながらしばし思案にくれ——  
やがてどちらともなく、呟く。

「…まあ、どうにかなるさ。…多分」

「…何とか、なりますよ。…きっと」

「……」

「……」

そしてしばしの沈黙。

二人は顔を見合わせると、申し合わせたかのように笑い合う。  
行き先すら定まらない二人の旅は、始まりを迎えたばかり。それでも二人の足が迷う事はない。

…翼なき『翼を持つ者』と獣の宿命を抱く者。

彼等の未来は、ここから始まる。

## 翼の末裔（16）（後書き）

これは、突発的に書き始めた物語です。

およそ一ヶ月くらいの期間をかけて、この話は書き上げられました  
…アップする予定などなく（汗）

ぎりぎりまで悩んで、それでも公開に踏み切ったのは、一応ラスト  
まで書き上がった事と、この話がそれなりに思い入れのある話にな  
ったからです。

ティアーレとリユナンというキャラの設定は、学生時代にはすでに  
存在していました。

当時は単に（？）癒しの力を持つ少女と、獣の呪いを受けた少年の  
物語で、流れるには彼等がそれぞれ旅をして出会うまでを考えてい  
ました…が。

その基本設定だと、何となくよくある話っぽくて書くこうと思うには  
至らず、キャラとしては存在していたものの、ずっとお蔵入りして  
いました。

その設定に『翼』の世界観をミックスしてみたら、どーんと世界も  
執筆意欲もアップしまして（笑）

そしてこの『翼の末裔』という話は日の目を見るに至りました。

内容的には続きがあるような感じで終わっていて、実際長篇シリ  
ーズ化を視野に入れて書いていた作品なのですが、現在はこの話の続  
編を書く予定はありません（汗）

他にもいろいろ長篇を抱え込んでいる身なので、これ以上増やす訳  
には行かないと言うのが一番の理由です。

将来的にはひょっとしたら書くかもしれませんが、書かないままの  
可能性が高いので明言は避けておきます。

作者的には彼等二人の結末をちゃんと書いてあげたいという思いは

あるので、いつか書けたらいいなと思っています。

壊れゆく夜のために（1）（前書き）

『翼』『翼の末裔』と異なり、こちらの作品は少々暴力的・差別的表現や残酷な描写が入ります。苦手な方はお気をつけ下さい。

## 壊れゆく夜のために(1)

> i 2 0 8 7 5 — 1 4 5 8 <

もう、なにもない。

もう、なにもいない。

全ては—— 終わってしまったのだから。

今さら欲しかった所で、何かが変わるはずもないのだ。彼は小さく自嘲するように微笑み、閉じていた目を開いた。

それでもこの手に、たった一つ残されたものがある。

もはや持ち上げる事すら出来ない掌に、一枚の羽根。そつと、まるで壊れ物のようにそれを握り締めて。

これでいいと、彼は思った。

これだけで、自分がこの場所で生きた意味があったと思えたから。

だから、今は。

空に祈り、大地に祈る。そんな資格がない事は重々承知の上で、ただ、祈る。

見上げた空に浮かぶ白銀の円盤は、今日も清浄な光を静かに降り注ぐ。

せめてそこだけは、これから変わらず美しくあればと。

そこにいる人が、幸せであればいいと。

それだけが贖う事の出来ない罪を背負った彼に出来る、ただ一つの事だったから。

狂気を呼び、血を招き—— それでもただ、ひたすらにささやかな幸せを求め続け。

涙を流し、終いには自分自身すらも壊してしまった。

…彼が唯一愛した、小さな『鳥』の為に。

## 壊れゆく夜のために（2）

ばさり、と羽音を立てて彼女は夜の大地へと降り立った。

その背にあるのは、白く大きな翼。

見る人が見れば、一目で何者かがわかる姿である。

—— 有翼亜人。

その言葉が示す通り、『翼を持ち人とは異なるもの』、それが彼女。

真夜中である上に、降り立った場所が人里離れた森の中だった為、誰にもその姿を見咎められなかったが、念の為に出来るだけ気配を殺して周囲を見回した。

（大丈夫、誰もいない）

緊張に固まる己に言い聞かせる。

見知らぬ場所というだけでなく、『この場所』に自分のような存在が足を踏み入れている事自体、おそらく前例のない事なのだ。どのような場所か、知識では知っていても実際は違う。

たとえば—— 大気に混じる『毒』の気配だとか。

彼女は不快そうに僅かに表情を歪め、すぐに振り払うように頭を振った。それに合わせて長い髪がぱさぱさと音を立てる。

翼と同様の白い髪は結わずに流したままだった。

長さは丁度、背中の辺り。肌も白いが、きつちりと服を着こんで肌を隠しているのあまり目立たない。

詰襟に長袖という、いささか暑苦しい上衣の色は瞳の色と同じ深い青紫。背の部分が翼の邪魔にならないように大きく開いているのが特徴的な服だ。

二本の足を包み隠すズボンも同色……大きさの合わない服を無理矢理着ているのか、裾の辺りは折り曲げててもまだだぶついている。明

らかに男物だ。

あちらこちらに白で縫い取りがあるので一見した所では女物に見えなくもないが、それでも世間一般の女性の衣服にするとシンプルな上に、味も素っ気もない仕立てだった。

腰に下げた無骨な感じのする皮のベルトと、そこに刺さっている数本のナイフのせいもあるだろう。肉付きの薄い身体は、遠目ではまるで少年のようにも見える。

彼女は周囲の確認が済むと、そのナイフの中でも小型のものを引き抜いた。護身の為かと思いきや、空いたもう片方の手は無造作に背に流れていた髪を掴んでいる。

そして。

…ザッ！

惜しげもなく、一気に白い髪が断ち切られた。

ぱらぱらと中途半端に落ちて来る余計な髪を、さらにナイフで器用に切って簡単に整えると、不揃いながらも髪の長さは半分以下になり、益々少年のような外見になった。

（よし！…これで何とか誤魔化せるかな？）

この場に鏡がない上に夜の闇の中で確認する事は出来ないが、それでも十分だと彼女は思った。取り合えず『使命』の邪魔にならず、目立たなければいいのだから。

残るは一番目立つであろう、この背にある翼をどうにか隠すだけだ。もちろん、その手段はちゃんと手に入れてある。

再びナイフを戻し、彼女はその目を空に向けた。  
空に浮かぶ、大きな光を放つ円——月。

太陽よりはその光は優しいけれど、まったく温かみの欠片もない冷たい光が地上を照らす。

その大きな瞳に、切なげな光が浮かぶ。軽く唇を噛み締め、彼女はしばらく月を見上げていた。

「……待つてて」

零れ落ちた言葉は、何処か苦しげだった。

まるでそこ——月に誰かがいるかのように呟いて、彼女そのま  
ま身を翻す。

遠くで鳴く鳥の声に紛れるように、がさがさと茂みが音を立てる。  
やがてそれはいずこかへと遠ざかつて行った。

> i 2 0 8 7 6 — 1 4 5 8 <

+ + +

全ての元凶は、あの月にある。

正確にはあの月にいる一部の人間に、と表すべきだろうがそんな  
些細な違いはどうでも良い事だ。  
ささい

その中の特定の人間だけに罪がある訳ではないのだから——。  
もっとも、それを言い出せばその状況を良しとした今までの経緯  
自体、間違っていたと表わさねばなくなるのだが。

「計画は順調に進んでおります」

「そうか」

背後からの報告する声に言葉を返しながらも、彼の目は窓の外に  
向けられたままだ。

：今夜も月は、その栄華を示すように光を放っている。その美し  
さだけは、彼も素直に認めていた。あの輝きが消えたなら、さぞ夜  
は寂しく味気ないものになるだろう。

—— けれど。

「上つ方々はまだ気付かれていない様子：今に一泡吹かせてやれる  
かと思うと、本当に愉快で堪りませんよ」  
かみ

くすくす、と邪が混じった低い笑い声が耳を打つ。その狂気めい  
た声音に、彼は思わず眉根を寄せた。  
まじりけ

目指す所は同じはずなのに、どうしてもこの男のこうした陰湿な

部分が好きにはなれない。

この男がいなければ、計画の実現はもつと先、あるいは実現しないままに終わっていた可能性もあった。その為、誰もが一目を置いていたが――男に対して彼と同様の感情を持つ者は少なくなかった。

今でも、思う。

本当にこれが一番正しい道なのだろうか、と。

だが、では他にどんな手段があるのかと問われても、具体的な事は何も出てこないだろう。今まで考える時間はいくらでもあったのに、この手段しか思い浮かばないという事は……。

「……エニウス卿」

「はい、何ですか」

「――貴公は何故、彼等を憎むのだ？」

それは今まで何となく避けて通っていた質問だった。

エニウス卿と呼ばれた男は、その問いかけに沈黙し……やがて、先程までとは打って変わった淡々とした口調でぽつりと答える。

「貴方様と同じでございますよ、王」

答える声は刃のように冷たい。まるでこの期に及んで悩む彼を切り捨てるかのように。

何を今更。

言外にそう告げる言葉に、彼は男に背を向けたまま、その唇に薄い笑みを浮かべた。

（同じ、か……）

それは嘲笑にも取れたし、自嘲にも取れた曖昧な表情。彼――若き王はその表情のまま口を開いた。

「……報告ご苦労だった。これから宜しく頼む」

「もちろんです。それでは……」

一度も自分を見ない王に対して、エニウス卿は特に何の感想を抱

かなかったのか、そのまま一礼して立ち去ってゆく。

完全に扉が閉まるのを確認してから、彼は鼻先で笑った。そして  
呟く。

「そうとも…今更だ」

窓の外には、完璧な円を描く月。

それを彼はいつまでも飽きる事なく見つめていた。

全ての――始まりを。

### 壊れゆく夜のために（3）

『月』と呼ばれるそこは、選ばれた者だけが住んでいる。

地上より遥か上空にある、手の届かない場所にある樂園。そこには苦痛もなく、飢えもない。全てのものが満たされて暮らしているのだと。

それは地上に伝わる現実の御伽噺。おとぎばなし

手が届かないからこそ、その幻想は余計に美しく輝く。

「あそこに住む人達は、あらゆる美しいものに囲まれて暮らしているのですって」

寝物語に語りながらも、母親の胸にあるのは幼い我が子に対する慈愛だけでなく、針でチクリと刺すような憧れ。

否——妬ねたましさ。

彼等の暮らす地上は、人が生きるにはいささか厳しい場所。

子が無事に生まれた所で、大人になるまで生き延びる確率は半々、老齢まで生きれば奇跡。そんな所だ。

痩せた大地は実り乏しく、食いつなぐのに精一杯。そんな状況で、多分に曲解されていたとしても伝え聞く『月』の情景はまさに樂園そのものだった。

「彼等は皆、背に翼を持つ従者を持っているの。彼等は不思議な力を持っていて、最初に定められたただ一人の主人に生涯仕え続けるのですって」

選ばれた者になれるかどうかは、生を受けた時点で審査を受け、事によってわかる。場合によっては、生まれる前からわかるという。

その審査基準がなんであるかは、一般の民には明らかにされてはいないが——それでも年にほんの一握りの人間が、あの光り輝く楽園に行く。そして、二度と戻って来る事はない。

——それだけが、彼等の知る事実。

だからこそ。

彼等はひたすら語り継ぐ。憧れと妬ましさを織り交ぜた、幻想に満ちた虚構を。

親から子へ、子から孫へ——。

目の前にありながらも、選ばれなければ誰一人として行く事の出来ない、天上の楽園の物語を……。

> i 2 1 2 9 6 — 1 4 5 8 <

+ + +

いくら言葉にしてもしきれない思いがある。

好きとか、嫌いとか。そんな言葉をいくら費やしても、多分この思いは形に出来ないし、そんな言葉で全てが伝わりきれるとも思わない。

そんな単純な思いじゃ、ない。

第一、人は簡単に嘘をつける生き物で。本当に真実を語っているかなんて、その人本人にしかわからない。…逆も然り。

自分がどんなに本心からの言葉を告げても、相手がそれを真実と受け止めてくれないければ通じないのだ。ただでさえ自分はあまり頭が良くないし、自分の想いを的確に表現出来る言葉も思いつかない。

だったら——行動で示すしかないではないか？

ずっとそんな風に彼女——ルフィータは思っていた。

「…うわ、マズそう……」

手にした錠剤を見つめ、思わずげんなりと呟く。

簡易ランプの赤味がかった光の下にあるそれは、ショッキングピンクとダークグリーンという、実に目に痛い色彩をしていて、出来る事なら口にしたいとは思わせる物だった。

少なくとも口にするものには見えないし、どう見ても悪意しか感じない。飲めるもんなら飲んでみると言わんばかりだ。

（本当にコレ、毒じゃないんでしょーね……）

渡された時はケースに入っていた為、何も考えずに受け取ったものの、もしあの時中身を見ていたら—— 多分、すぐには受け取れなかったに違いない。

じつと薬を見つめ、次いで自らの背から生える白い翼に目を向ける。

『—— 地上に着いたらこれを飲むといい。《エフェラ》特有のその翼は目立ちすぎるからな』

思い出した言葉は確かに事実で、闇の中でも—— 否、闇の中だからこそ、彼女の翼は一際目立った。

『エフェラ』とは彼女のような有翼亜人を示す称号。かつていた場所には、ルフイータのようなエフェラがたくさんいた。

男に女、大人に子供。性別や年齢層は違えども、その示す事は共通している。すなわち—— 隷属者<sup>れいぞく</sup>、ということ。

背にある翼は機動性や特殊性の表れというだけでなく、只人と区別する為の標識のようなものでもあるのだ。

こんなものを背中に生やしたままでは、目的を遂げる事は恐らく困難を極める。

…選択肢は、一つしかない。

難しい顔のまま再び錠剤に目を戻すと、小さくため息をつく。叶う事ならこのまま役目を放り出して帰ってしまいたい。それが叶わない事なのはわかっているけれども。

「…あたし、挫けそう……」

誰に言うともなく呟いて、それでも彼女は覚悟を決めたようにぎゅっと目を閉じると、それを口の中に放り込み、用意していた水で一氣に胃へ流し込んだ。

飲み下すまで呼吸を止めていたのだろう、飲み終わると同時に大きく肩で息をすると、いつの間にか額に薄く滲んでいた汗を袖で拭く。

薬一つ飲むだけだが、今までで一番緊張した気がするのはいきつと気のせいではないだろう。時折、仲間達の間で行われる実戦込みの技能試験の時だつてここまで命の危険を感じた事はない。

（飲んじやった…飲んじやったよ、あたし……）

それでもう、後には引けない。

変化はすぐには訪れず、かと言って動き回る訳にも行かず、ルフイータはその場に座り込み、時が来るのを待った。…薬が効果を發揮する、その時を。

天上の月が、ゆっくりと傾いてゆく。

こうして地上から見上げる日が来るなんて、人生（実際は人ではないけれども）というものは本当にどう転ぶものかわからないものだ。

ついこの間まで、地上になんて行くつもりも行きたいとも思わなかったけれど。

（…きれいだな）

冷たい、何処か人を寄せ付けないような光だけれど、その光は周囲を飾る星よりも美しいと素直に思った。…そこに住む人達は、一人を除いて最悪だというのに。

今回の地上への降下は、決して望んだものではない。それでもそこにいれば決して見る事の出来ない光景を見れた事は、ほんの少しだけルフイータの慰めになった。

（…が、いたら、いいのに、な……）

ふとそんな想いが浮かんで、唇を噛む。きっとあの人は一生この

光景を自分の目で見る事はないだろう。

（一緒に見たかったな……）

感動を分かち合えない事が寂しい。自分の想いと同様、この美しさはどんなに言葉にしても伝わりきれないに違いないのに。

――が。

呑気に月を眺めていられたのはそこまでだった。

「――っ、……い、痛っ!？」

突然背を襲った激痛に、堪え切れずに悲鳴を上げてしまう。痛みに対してはそれなりに耐性があるはずなのに。

翼の根元が焼けた鉄棒を押し付けたかのような、熱を帯びた痛みを訴えたのを切っ掛けに、そこから全身に痛みが神経を伝わって駆け抜けてゆく。

「ぐ……あ、ああ……っ」

少しでも苦痛を和らげようと無意識に前屈みになり、自分の身体を自分で抱きしめるような形で地面に転がる。必死に歯を食いしはるものの、やはり噛み殺しきれずに悲鳴が漏れた。

いっそ気を失えたら良いのに―― 痛みの中でそう思うものの、その願いは叶わない。

（い、た……痛い痛い痛い痛いってばああああ~~~~ツ!!!  
!）

何がどうなっているのかなんてわからない。

痛みで頭の中が白く焼き切れそうになる頃、ようやく苦痛から解放された。ズキン、ズキンと余韻は残っているものの、体を内側から引き裂かれるような痛みは消えている。

汗だくになりながらよろよろと身を起こすと、パサリ、と乾いた音がして何かが背から落ちた。

……黒い地面に転がった、白い翼。それを呆然と目にして、そろそろと摘まみ上げる。

かつて己の背にあったであろうそれに、不思議と愛着は湧かなかった。手にした翼を放し、次に背に指を伸ばせば、今まであったも

のが確かに消えている。

それを確認すると、ルフィータは薄く笑った。もうこれで、自分の行動を縛るものはない。

それに……見た目だけでも『人』と同じになった事が少しだけ嬉しかった。

背中はまだ痛んだものの、もはや気にならなかった。ルフィータは立ち上がり、痛みのでいで覚束ない足取りで歩き始める。

——言葉にする事も出来ない、抱えきれないほどの想いを行動で示す為に。

## 壊れゆく夜のために（4）

身体の中に、一匹の凶暴な『獣』が潜んでいる。  
それは凶悪で凶暴で——何よりも血を好む。

『——殺してしまえ、何もかも』

そう、内から囁きかける声に必死に耳を塞いで。

『壊してしまえ、全てのものを』

絡み取られそうな衝動を、必死に耐える。その誘惑はそれほどに甘く、強烈だった。

内なる言葉に従い、全てを手放せば楽になれるのかと、一体幾度考えた事だろう。そうすれば、おそらく『己』と引き換えに、今まで自分が思い悩んできた様々な事柄から解放されるに違いなかった。それでもその道を選ばなかったのは——己を惜しんだ訳ではなく、ただの復讐心から。

——お前なぞ、産まなければ良かった。

今も耳に残る、嫌悪を隠さない女の声。  
獣が誘いかける度にその声は耳に甦り、彼の足を引き止める。

——どうせ、いつか死ぬのでしょう。だったらさっさと死んでしまえばいいのよ。

一体、自分の何が彼女にそこまで言わせたのか、言われたその時はわからなかった。

わかったのはそれからしばらく経った、ある日の事。原因不明の高熱を出し、寝込んだ時だ。

朦朧とした意識の中、隣室から聞こえてきた母親であつたはずの  
人と医師の声。

彼等は憚るはばかりような小声で、けれど聞き間違いのない程にはつきり  
とこつ言つた。

—— 間違いありません。あれ程に兆候が顕著である事も珍しい  
ですが……。

—— そう……、ではやはり、あの子は死ぬのね。

—— 王妃様……！ それはあまりにも……。

—— ……何？ お前に獣を産んだ女と呼ばれる気持ちがあつて？  
—— で、ですが……今となつては、王の子はシヨルト様のみ。王  
の血が絶えるかもしれないのですぞ……！

—— 黙りなさい。あれは……人じゃないわ。お前だって、それを  
認めたじゃないの。

—— そ、それは違います。そのような意味で申し上げたのでは  
……！

—— いいのよ、本当の事でしょう。あのおぞましい、赤い目。  
あんな目をしたものが人であるはずがない。それに……そうよ。あな  
たは忘れてないかしら？

—— ……？

—— 忘れたとは言わせないわよ。……王の子は『一人』ではない。  
そうでしょう。

—— ……つ、王妃様……！？ 一体何をお考えですか……！！

> i 2 1 5 8 3 — 1 4 5 8 <

人ではない、と。

獣なのだ、と。

そして—— 自分はその内、死ぬらしい。

その時はまったく実感などなかった。それほどに幼かったし、何よりも母親に向けられた嫌悪の方が心を傷つけていたからだ。

物心つく以前から露骨に避けられていれば、好意を持たれていない事は気付いていた。それでも母親だ。心の何処かで、その手を差し伸べてくれる事を期待していた。

でも—— 今の言葉ではつきりとそれがただの願望に過ぎず、決して現実になり得ない事である事を理解した。

それが、切っ掛けだった。

自分の中に眠っていた、狂気と言う魔性が目覚めたのは。それはいつしか黒い獣の形を取って、夢の中に現れるようになった。

『滅ぼせ。お前だけが一人で死ぬ事はない。生きているもの、全てを道連れにしてやれよ』

内から聞こえる、禍々しい声。時間はないと急きたてる。

そうとも、もう時間はない。だからこそ、まだ己を獣にくれてやる訳にはゆかないのだ。

一分一秒でも長く生き続ける事、それ自体が己の死を望んだ母への復讐なのだから。

+ + +

—— 久し振りに嫌な夢を見た気がする。

目を開いて飛び込んできた闇にすら安堵感を覚えてしまう程の……過去の傷。

『さっさと死んでしまえばいいのよ』

今も耳に残る声は、それだけで心の内を冷たく凍らせる。

幻とわかつていつつも、何度も夢という形で繰り返される度に、『その時』に感じた痛みを思い出してしまふ自分に嫌気が差す。額に薄く浮いた汗を乱暴に拭い、きつく唇を噛み締めた。

(…昔の事だろう。いつまで引き摺る気だ……！？)

苛立ちをそのままに、意識をその事から反らそうと、周囲を見回す。漂う静寂と闇に沈んだ部屋の様子から、まだ夜中であると判断する。

彼は寝台から身を起こすと、明かり一つない暗闇に戸惑う様子もない動きで、サイドテーブルに置かれた水差しに手を伸ばした。

グラスに水を注ぎ、そのまま一息に啣<sup>あお</sup>る。

咽喉を流れ落ちる温<sup>ぬる</sup>い水に、かつてあった微かな苦味が存在しない事で、彼は現実をようやく噛み締めた。

…もう、毒物に身体を慣らす必要はないのだ。

そう思いながら、意識の端々に残る夢のかけらを飲み下すように、更にもう一杯水を啣ると寝台から抜け出した。

夢を恐れている訳ではないが、何だか寝なおす気になれなかったのだ。

暗い部屋の中、窓辺だけが明るい。今日も月は翳り一つなく地上を照らしているらしい。

その仄<sup>ほの</sup>かな光に誘われるようにその光の下へ向かった彼は、掛け金を外して窓を開いた。ふわり、と湿り気を帯びた微風が頬を撫でる。

その感触に目を細め、彼はその目を天に浮かぶ銀盤へ向けた。月光を受けて、彼の瞳がきらりと金に光る。

——それはかつて、彼が実の母に疎<sup>うと</sup>まれ、命すら狙われる事になつた元凶。

「…もうすぐだ……」

もうすぐ、何もかもが——。

それは『獣』に唆<sup>そ</sup>されたのではなく、自分自身で決めた事のはず

だった。

それでも何故か心の何処かがまだ躊躇している。準備はすでに整い、後は始めるばかりなのに。なのに何故、迷うのだろう。

失うものなど何もないし、大切なものもない。

良心なんて、内に巢食う獣にくれてやったはず。それでも心が迷うのは、一体何のせいなのだろう……？

「我ながら矛盾している事だ……」

この場に誰もいないからこそ吐ける、自嘲の言葉。

そんな彼の吐息に溶けるような小さな呟きを受け止めるのは、夜風のみ—— そのはずだった。

「……？」

ふと、視界を何かが横切った気がして目を<sup>すが</sup>眇める。夜更けに飛ぶ鳥の影かと思ったが、それにしては随分と大きかった。

（何だ……？）

瞬時に意識が切り替わる。

それはかつて幾度も命を狙われてきた彼には、随分と馴染みのある感覚だった。

すなわち—— 殺気。

即座にピンと張り詰めた彼の意識は、周囲の変化を敏感に感じ取っている。金色に光る瞳が鋭利さを増した。

（何か…… いる……！！）

そう認識すると同時に、さながら月光の破片のような光が彼に向かって一閃した。

## 壊れゆく夜のために（5）

今、秘密裏に計画されている事は、全体から見ればほんの一部分あるいは一面に過ぎない。

始まりが何であつたのか——それは瑣末事さまつであり、詳しく識しる必要性などはないが、彼にとっては自身の願望を形にする為に都合が良かったのは確かだ。

——貴公は何故、彼等を憎むのだ？

尋ねられた言葉は、封じ込めていた心の痛みを再び思い出させるのに十分だった。

——貴方様と同じでございますよ、王。

答えた言葉は全くの真実ではなく。

：おそらく、あの聡い王はその事に気づいただろう。この自分の本当の願いが、彼のそれとは根本的に違う事を。

（しかし…目指す方向は同じ）

だからこそ、王も追及はしなかったに違いない。同じ方向を向いている限り、それがどんなに歪なものだろうと『同志』である事には変わりがないから。

ただ…全ては最後の選択肢次第。

あの不治の病に冒された王が、何を望んでいるのか自分は知っている。知っているからこそ、協力を申し出た。

自分にはそれだけの知識と能力がある、と。まだ幼いと言っても過言でなかった王は、力を欲していた。目的が果たせるなら、それこそ相手が悪鬼だろうと手を取ったに違いない。

けれど——おそらく王は自分が何を望んでいるかを知らない。

己の手が取った相手が、学者を騙<sup>かた</sup>った狂人である事を何処まで察しているのやら。

> i 2 1 9 1 4 — 1 4 5 8 <

（ああ…憎んでいるとも。…奴等は私から、全てを奪った）

それが一種の逆恨みである事は承知の上だ。

それでもこの身を焼く怒りと絶望は、『それ』に対する憎しみを増す一方で。…同時に『それ』の行いを受け入れ続ける環境も許せず。

…気がつくと、狂ったように『全てを終わらせる方法』を調べていた。

『——わたしは…あなたが心配だわ』

遠く色褪せてゆく思い出の中、忘れる事の出来ない人は悲しげな顔をしている。

学のない無知な女だった。そのせいで、世の辛酸を舐め続けた愚かな女。けれど、唯一己すら気づいていなかった彼を理解した女でもあった。

どれほど彼女の存在が自分の心を大きく占めていたのか知らないまま、いるのが当たり前のように思っていて——失って始めてその喪失の大きさに呆然と立ち尽くした。

『あなたは自分が思っている以上に…とても、とても優しい、人だから……』

その時はそんなはずがないと一笑に付した一言が、今はただ懐かしい。

あの頃は、確かに自分は幸せだった。彼女がいて…暖かな温もり

のある『家庭』がそこにあつて。

あの場所を守るのなら、どんな事でもしようと思つていた。でももう、今の自分には何も残されていない――。

「きつと、お前は悲しんでいるんだらうな……」

彼女を喪つた悲しみは、彼女が命がけで残した小さな命の存在で救われた。けれどその救いすら――この腕にろくに抱く事すら出来ないままに奪われて。

寝る間も惜しみ、精神を削るように日々研究に費やす、今の憎しみに囚われた自分を、彼女は死者の園で嘆いているだろうか。それでも。

（たとえ、お前と同じ場所へ行けなくとも……）

自分が死んだら、魂が安らぐという死者の園ではなく、永遠の苦しみが続くという煉獄へ堕とされる事だろう。

けれどこの歪んだ憎悪は、留まる術を知らない。留めてくれる存在も、いない。ただひたすら、『終焉』に向かつて走り続けてゆくだけ――。

忙しく書籍のページを繰りながら、彼は自嘲気味な笑みを浮かべた。

+ + +

暗い闇を透かした向こうに見えるのは。

――赤味を帯びた、茶色の岩と土の塊。所々に、黒い染みのようなものも見える。かつてそれは、青と緑の斑で彩られた美しい宝玉だったそうだ。

資料としてかつての姿を見た事もあるが、何度思い返してみても、とてもではないが同じものとは思えなかった。

「…ねえ」

「うん、何？」

「《セレン》に記録されてたあの映像―― 本当にあの大地と同じ

ものなのかしら？」

窓の外を眺めたまま、何処となく舌足らずな口調で問いかける少女に、側に控えていた少年は軽く首を傾げた。

その背には白い翼。

邪魔にならないようにと畳んでいるが、やはり目を惹く。年の頃は十五、六歳ほど。その髪は背後の間接照明を受けて本来の色はよくわからないが、かなり明るい色のようにだ。

「僕には本当かどうかはわからないよ、マチュー」

答えると、ようやく少女は彼の方へと顔を向ける。

こちらは少年とは対照的に暗い色合いの容姿をした、十二歳前後の少女だった。少し身体に合わない服を身に着け、その胸に金属製のプレートがかけられている。

それはその場所に住まう人間の中でも『特別』を意味するものだったが、それ以上に目立つものを少女は身に着けていた。

それは—— 顔半分を覆い隠す、少々無骨な造りの大き目の眼鏡。視力が低いのか、そこには厚いレンズがはまっており、少女の顔を更に隠していた。

「でも、本当だと思っているのよね？ 地上の人は」

「—— みたいだね」

少女が何を思っただんな事を尋ねるのかわからないまま、少年は相槌を打つ。

彼にしてみれば、地上など今後関わる予定のない場所であるし、ましてやそこに住まう人間が何を思おうと全く関係のない事だ。

でも—— 自分が仕えるこの少女が気にしているのなら、それに合わせて基本的な知識や情報を頭に叩き込む事くらいはする。

「《賢者の眼》—— そう呼んでいるようだけど。どうやらその使い方を解析したらしいよ」

「『地上の復権』の為に？ …… ばかみたい。何も知らないで」

吐き捨てるように言う言葉には、隠さない侮蔑の感情があった。

「あそこまで壊れた大地を再生するなんて不可能だわ。出来るなら

とづくにやっているに決まってるのに。いまさら足掻いたって状況の悪化を引き起こすだけだわ」

「…マリス：リヴレはもう布石を打ったみたいだけど。—— 恐るに足りず、と放置するかと思っていたけどね」

「そんな事する訳ないでしょう、シャイル。一般人から見ればちょっと綺麗なただの石でも、彼らにとっては長年の悲願を可能とする為の魔法の石で、管理機構側から見れば危険レベル高のものよ。最高責任者が無視なんて出来るはずがない」

普段は必要がなければ一言も言葉を発さない少女の、珍しく饒舌じょうぜつな語りに少年はくすりと小さく笑った。

相変わらず—— 『育ての親』に対しては盲目的だ。彼が一部で『臆病者』と批判を受けている事を知って、もう弁護側に着こうとしている。

（…僕はマチーユの従属だから、マチーユが良ければそれでいいけど）

だが、事態は少女が思うより複雑で、いろいろな思惑が絡んでいる。長い事存在し続けたこの《月》と《地上》の確執が、新たな局面に至るうとしているのだ。

欲と希望。憎悪と絶望—— まだ事態は混沌としていて、何が正しいのかまったくわからない状況だ。

その混沌に、主人である少女が巻き込まれない事を祈らずにいられない。…このまま行けば、否応なく巻き込まれるとわかっているからこそ。

「…シャイル？ 聞いているの？」

「もちろん。…それでマチーユはどうしたい？」

「—— 取り合えず様子を見るわ。リヴレ様が打った布石が功を奏すれば問題ないもの。でも……」

厚いレンズの向こうの薄紫の瞳に決意を宿らせて、少女は告げる。

「有事の際は、わたしも戦う。この手に武器は持てないけれど、わ

たしだつて《マリス》の一員。何か…出来るはずだもの」

胸元に下げた金属のプレートを握り締めて、そんな事を言う少女を見つめ、少年は苦笑を浮かべて頷いた。

「わかった。…じゃあ、その時は僕がマチーユを守るよ。その為にここにいるんだからね」

## 壊れゆく夜のために(6)

> i 2 2 0 8 8 — 1 4 5 8 <

ねえ、どうしてわたしは背中に翼があるの？  
ねえ、どうしてあなたには翼がないの？

どちらが偽物？

わたし？  
それとも——あなた？

ほら、見て。  
わたしはここにいるよ。  
ほら、触って。  
ちゃんと生きているでしょう？

ねえ、どうして答えてくれないの。  
ねえ、どうしてそんな悲しそうな顔をするの。

——わたしが『偽物』だから？  
それともあなたが『偽物』なの？

わたしはただ、知りたいだけなの。  
何故、わたしとあなたが違うのか。  
何故、あなたの事を好きだと言つと、他の仲間達が哀れむように笑うのか。

人を好きになることって、そんなに変なこと？

ねえ、あなたは知っているのでしょうか？

ねえ…？

+ + +

この命よりも大切だと思う人がいる。

唯一無二の主。でもそれだけではなく、心から守りたいと願った人。

でも——いつも視線の届く場所にいた彼は、今ここにはいない。

『君の主人の身柄は預からせてもらった』

ほんの僅か、側を離れた時の事だった。

隙があったと言われれば事実で、その事に関しては反論出来ない。思い出すだけで自分の不甲斐なさを思い出し、悔しさがこみ上げる。

『エフィラ：ルフィータ。君の能力は聞き及んでいる。是非、協力を願いたい』

言葉こそ丁寧だったものの、要請の形であつてもそれは明らかに命令だった。

拒否権など元々ないのに、わざわざ大切な存在を盾に取る卑怯なやり口に怒りで頭が沸騰しそうだった。

許される事なら、おそらくどんな手段を講じてでも取り戻した。けれど一介の『隷属者』でしかない自分に、その命令に抗う術はなくて。

自分に命じて良い存在は、主と認めた彼だけだ。それは今までも

これからも変わらない。

だが——その身柄を相手に握られたとなれば、ルフィータに残された選択肢は一つしかなかった。

すなわち——『諾』。

+ + +

「……何者だ！」

予想に反して、標的が鋭い声を上げた。

シャッ！！

声と重なるように、薄い刃が空気を切り裂きながら標的に襲い掛かるが、夜の闇の中だというのに信じがたい素早い動きで避けられる。

（避けられた……！？）

彼女——ルフィータは思いがけない展開に動揺を隠せなかった。頸動脈を狙った一撃は、普通の相手なら致命傷こそ避けられても、かすり傷くらいは与えても不思議ではない間合いだった。

そもそも投擲の際に気配を気取られた事自体、驚くに値する事だ。自分達の気配は、普通の人間にはまず気付かれる事などないはずなのに。

偶然なのだとしたら、標的は随分と強運の持ち主だ——幸か不幸か。おそらく気付かなければ、余計な苦痛を味わわずに済んだだろうに。

小さく舌打ちし、すかさず手首をひるがえ翻して、手にしたナイフを再び標的に向かって繰り出す。目的が目的だけに、手加減などしなかった。

なのに——まるで明るい場所で戦っているかのような身のこなしでやはり避けられてしまう。

(…どうして、どうして当たらないのよ!?)

標的は地上を統括するタルカス王家の現王——どんな人物かは知らないし、知りたいとも思わないが、これは計算外の事だった。

自分はエフェラ——《月》の住人の守り手。翼こそ今はないが、要人の護衛や補佐を役目とする者だ。護衛を担う部分もある為、戦闘力は人並み以上にある。

否、ルフィータに関して言えば、どちらかというところ『守り』に特化したエフェラにしては稀なほどに高い戦闘能力を有している。

そう——それ故に、最初は『失敗作』とすら言われていたのだ。護衛の目的があるとは言っても、月では暴力沙汰などまず起こらない。護衛の必要性など皆無で、従者としての役目が重要視されていたから。

決して驕っているつもりはないが、その自分と人に傳かたづかれて守られているだけの『王様』が自分と渡り合えるはずもないと思っていた事は事実だった。

(まさか——人違い?)

地上へ降りる前に王の寝室の位置を確認してきたが、それが間違っていたのだろうか。

まさか、と思ってすぐに否定する。《セレン》の情報が誤っているはずがない。

という事は——。

(…王様のくせに、自分で自分の身を守れるって事?)

そうとしか考えられない。違和感はあったのだ——仮にも王の私室というのに、付近に護衛らしき者の姿がほとんどない事に。

どんな事情があるかは不明だが、一番考えられる理由は『必要ないから』だろう。

ルフィータにとって、地上の王は『そういう存在がいるらしい』程度の存在だった。地上で一番偉いという事くらいしか知らない。

戦闘能力に関して言えば、人並以下だという認識すらあった（これは偏見だが）。しかし、こちらの攻撃を次々に避けられては、その認識を改めざるを得なかった。

「誰の手の者だ？」

低く問いかけてくる声は、思いがけず若い。

少し驚いて視線を向ければ、闇を透かして見える背格好からして、想像していたよりもずっと若いようだ。ひよっとしたら、二十歳を超えてもいないかもしれない。

（ソーヤと、同じくらい……？）

聞こえてきた声も、何となく似ているように思えた。誰よりも誰よりも大切に、大好きな人に。

少しだけ、罪悪感が胸を焼く。それと同時に、何としても殺さねばと思う。この男を殺せば、大切な人は解放されるのだ。

タルカス王家、国王—— ショルト「ディアル」タルカスの暗殺。それが自分に与えられた使命なのだから。

（ソーヤ……待って……！）

一気に間合いを詰め、懷に飛び込む。

まずは右手—— 前面を薙ぐような大振りの一撃は、思った通りに避けられる。こちらは陽動、本命は次だ。

僅かに体勢が崩れたその隙を狙い、すかさず左手に別のナイフを握り、一気にその心臓目掛けて突き立てる——！！

（終わった）

その確信はあった。事実、王はその一撃までは避けきれなかった。だが。

「……え？」

襲撃の最中なのに、ルフィータは思わず声を上げていた。

王の心臓に突き立てられたはずのナイフは、その寸前で不自然な形で止まっていた。攻撃を何者かに妨げられた訳ではない。

妨げたのは——。

（な、なんで……手が、動かない……！？）

左手が命令を拒否していた。直前でぴたりと刃を止めているのは、紛れもなく自分の手だ。

（なに…なんなのよ、これ！？）

恐慌状態に陥ったルフィータは、一瞬自分の状況を忘れた——  
目の前に、標的である王がいる事を。はっと我に返った時には、その手首を乱暴に掴まれていた。

「い、痛っ」

そのまま擦じり上げられ、思わず悲鳴をあげてナイフを取り落とす。耐えきれずに零れたその声に、王が意外そうな声を漏らした。

「——女？」

反射的に右手を動かすと、意外なほどにあっさりと手が離れた。腕を取り戻したついでに距離を取る。もう一度刃を繰り出そうとして——今度は先程よりも早く、手足が動きを抑制する気配を感じ取って踏み留まる。

（どうして…なんで攻撃出来ないの！？）

ルフィータは激しく混乱した。

相手は丸腰だ。しかもこの状況になっても、警護兵の一人も呼ばうとしない。

自分に自信があるのか、それとも他に理由があるのかはわからないが、圧倒的に有利な絶好の機会だ。なのに——。

「…っ」

結局、ルフィータが選んだ行動は、そのまま進入した窓から外へと逃亡を試みる事だった。

何故とを考えても答えは出ない。だが、この状態では目的はおそらく達成出来ないだろう。

（…ソーヤ…ごめんね……！）

心の中で詫びながら、ルフィータは人の気配がない方角へとひたすらに足を進めた。

## 壊れゆく夜のために（7）

——それを祝福だと言ったのは、誰が最初だったのだろう。

その『資格』を有するか否か、それは正に神の気まぐれ次第としか言い様がない。

選ばれた事は果たして幸いだっただのか——神の祝福と特別視される一方で、親や家族を知らずに育つ自分達は本当に幸せなのだろうか、と彼は思う。

『……あたしは、ソーヤに会えて嬉しいけどな』

選ばれたからこそ、彼女と出会えた。それは確かな事実。

けれど、そんな風に言いながら嬉しそうに笑う彼女を見る度に、喜びとは別の感情が生まれるのもまた確かだ。

それは、罪悪感。

無心に、無条件に寄せられる好意が、実際には『偽り』である事を知っている。

彼女が——彼の『翼』が自分に対して好意を抱くのは、彼女自身も知らない場所で、そう仕向ける力が働いているだという事を知っている。

知らずにいたなら、きっとその言葉を素直に受け入れる事が出来ただろう。けれど、知ってしまったから。

だから。

だから……自分は——。

+ + +

地上で不穏な計画が立てられているらしい、という情報自体はかなり以前からあったものだった。

—— 曰く、『月に対し武力を行使しようとしている』。

最初こそ眉唾だと笑った者も、それが真実味を帯びるようになるにつれ、ばかなと一笑に付す事はなくなった。

…確かに、地上と月の間には、その距離以上に大きな技術力の差があった。

月の住人の多くが持つ選民思考も、そこに拠る部分<sup>よ</sup>が大きい。ここは地上全体を覆う、飢餓や飢渴、貧富の格差とは無縁の場所だ。

それぞれに課された役割によって、上下の階級差はあるが、金銭的な差はそもそも皆無である。

管理する者、防衛を担う者、医療に従事する者—— 実にさまざまな役割が、うまく組み合わさり機能する。ある意味、理想の世界がここにある。

それもそうだ—— この住人はそもそも、その機能の一部を果せると見なされたからこそ『ここ』に迎えられたのだから。

逆を言えば、すでに完成してしまっているが故に発展性が皆無だ。稚拙で未熟な技術力しかないと認識されてきた地上は、彼等が樂觀視する間に、僅かな手がかりを元に力を蓄え、そして今…手の届かない場所であるはずの彼等を脅かそうとしている。

早急に潰すべきだという急進派と、過ぎた力の危険性を説き、元の関係に修復すべきだという穏健派の対立が方々で見られるようになった。

守られ、最初から全て整えられた場所で生きてきた彼等の大部分が事なかれ主義である為、今の所は穏健派の方が支持されている。

彼—— ソーヤも、その一人だった。

ただ違うのは、事を荒立てたくはないだけの多くの穏健派と異なり、地上を争いの場所にすべきではないという考え方を持っている点だろう。

（どんなに荒廃が進んでいても、あそこそが『故郷』だ）

確かに月は、理想郷そのもののように見える。けれど、ソーヤは物心ついた頃から、地上に惹かれてやまない自分に気付いていた。理由はわからない。ただ、気が付くと遠くに見える赤茶色の大地を見つめている自分がいた。

年齢を重ね、自分がここへと来た理由を知ってから、その感情が一種の郷愁であるのだと結論つけた。

顔も名前も、そして今も生きているのかさえ知らないが—— 見つめる先の何処かに、自分と同じ血を分けた人々がいる。

両親や兄弟、もしかしたら祖父母などもいるかもしれない。そう、『家族』が。

それは地上にあつて、月にはない、数少ないものの一つだった。月の住民同士で婚姻関係を結ぶ者は少ない。だが、生まれた子供はまず『資格』を持たず、判明した時点で両親から引き離される。

…その子供が、その後どうなるかを知る者は少ない。管理階級の者だけが知る機密だ。

だが処分されるか、それと大して変わらない扱いであろう事は間違いない。結果として、最初から子を望まない夫婦が多くなり、出産自体が稀な事になっている。

人と人との繋がりが希薄なこの場所にあつて、ソーヤは思う。

本当にここに迎えられた事は、幸せな事なのだろうかと——。

そんな彼に、一部の人々が同調し始めたのは、一つの『兆し』だったのかもしれない。地上に対して郷愁の念を抱き、その保護を働きかける彼等の動きを、多くは物好きなど受け流した。

それでも彼は諦めなかった。

まだ、対話の余地はあると信じていたし、何より地上がここまで月に対して敵対心を育てるようになったのは、月側が彼等に対して誠意を一つも見せていないからだ。

少しずついい、変えて行けたら。自分でもよくわからない情熱

に身を任せ、理解者を増やそうと努力した。

けれど――彼は知る。そんな動きを、目障りだと思っ者がいる事に。

たまたま一人でいた室内。不意に照明が消えたかと思うと、何者かに身体の自由を奪われた。鼻と口を湿った布で抑えられ、薬品臭がしたかと思うと急速に意識が闇に飲み込まれてゆく。

彼が意識を手放す間際に見たものは、窓から見える、今も惹かれてやまない赤茶色の大地だった。

+ + +

重い目蓋を持ち上げると目の前には闇が広がっていた。闇と言っても薄闇程度で、周囲の様子がかすかに伝わる程度のものだ。

頭の中が霧に包まれたように朦朧もろろとしている。なかなかはっきりしない意識は、今までの眠りが不自然なものであった事を証明しているようだった。

(…ここは……何処だ)

目だけを動かし、部屋の中を見渡す。

全身が鉛を詰めたように重く感じる。腕を動かそうとして、ようやく自分の身体が拘束されている事に気付いた。

身体を縛いましめる特殊繊維は、人の力程度では引き千切る事は不可能なもの。すなわち、完全に自由を奪われていると言えた。

恐らく何らかの薬剤を使われたのだろう。集中力が続かず、なかなか頭の中で考えがまとまらない。

考えるだけでもひどく労力を有するものの、今の状況だけで何が起こったのか想像する事は簡単だった。

(――先手を打たれた、か)

自分の行動を良しとしない者も出て来るだろうとは思っていたが――まさかこれ程早く潰しにかかってくるとは。

(…そうだ…俺がここにいるという事は……)

脳裏に浮かんだ少女の姿を無意識に周囲に求めながらも、にわか  
に湧き上がった不安を無理矢理押さえつける。

(フイー…は、何処だ……?)

背に翼を持つ守り手たる彼女が、理由なしに側を離れるはずがな  
い。という事は――。

その時、まるで彼の覚醒を見計らったように、部屋の片隅で扉が  
開く音がした。反射的に向けた先、逆光を受けて立つ長身の姿があ  
った。

「…目覚めの気分は？」

問いかけてくる声は豊かなバリトン。しかし耳触りの良い声なが  
ら、何処かその口調は冷たい響きを有している。

「こんな事になって残念だよ。君は…とても優秀な《シェリド》だ  
つたのに」

パツ、と照明が予告もなく点く。眩しさに目を細めながらも、彼  
はその男から目を放さなかった。

年の頃は三十半ば。まだ十分若いと言える年齢の男は、常に変わ  
らない柔らかな物腰でそこにいる。だがそのアイスブルーの瞳が彼  
の本質を示していた。

「…やはりあなたか、マリス：リヴレ」

掠れた声で名を呼ぶと、『月』の支配者の一人はその凍りついた  
目を細めて笑った。

## 壊れゆく夜のために（8）

「やはり、と言うところを見ると予測はついていたようだね？」

穏やかな口調での問いかけに、ソーヤは唇を噛んだ。

確かに予測はしていた。けれど——それは、出来る事ならそうでなければいいという、希望的観測の元でのものだ。

それが現実になったばかりか、よもやこのような乱暴な手段に訴えるとは。

「……まさか、あなたが直々に動くとは思いませんでした」

苦々しい言葉に、男が小さく笑う。

管理階級である《マリス》。

その頂点に立つ彼は、今まで穏健派と見なされていた。否——

今も大部分の月の住民に思われている。実際、彼は今まで表立つて地上を否定する言動を取っていなかった。

「何故です……何故、彼等と対話しようとしません、マリス・リヴレ」

ともすれば散漫になりそうになる意識を必死に保ちながら問いかける。

「彼等と我々は住む場所は違えど、同じ人間だ。言葉が通じない相手では……」

「——あれは君が思っている以上に危険な物なんだよ」

必死に紡がれる言葉を遮り、リヴレは彼の目前にまで足を進めた。見下ろす瞳にあるのは、確固たる意志——。

「私は《マリス》だ。《セレス》と月の民を守る義務がある。賢者の石、と彼等が名付けたあれは、我々を脅かす」

だから排除するのだ、と見下ろす視線は語る。一方的なその物言いに、かっと思に血が上った。

「だからと言って、彼等を見殺しにする権利は……っ」

「愚問だ、シェリド：ソーヤ。それにもう……矢は放たれた」

「な、に……？」

ぎよつと目を見張るソーヤに、リヴレは同情するような表情を浮かべた。その表情の意図がわからず困惑する彼に、予想外の言葉が降る。

「—— 主人の命を守る為、忠実な《翼》は地上へ降りたよ」

「……？ まさか……！？」

忠実な《翼》—— その言葉から導き出される存在は一人しかいない。薬物による酩酊<sup>めいてい</sup>が、一瞬で冷めた。

この場にいない以上、自分と同様に何処かで拘束されているのではないかとは思った。あの彼女がおとなしく捕まっているとは思えなかったので、別の意味で無茶をしていなければいいとは思っていた。

……だが、今の言葉はそんな想像を遥かに超えた、最悪の事態が起きている事を伝えていた。

「……卑怯な……ッ」

噛みつくような言葉にも、リヴレはまったく揺るがない。余裕すら見せる様子で頷いてみせた。

「その誹<sup>そし</sup>りは甘んじて受けよう。……だがね、使える駒を有効活用するのも《マリス》の仕事の内なのだよ。本来守り手たる翼は刃となり、過ぎた望みを持った者の命を刈り取ってくれる事だろう—— 大事な主を取り戻す為だね」

淡々と語られる抽象的な言葉に、ソーヤは青ざめる。そこに隠された意図を掴み取れぬほど、愚かではない。

「それがあなたのやり方か……！」

思い出すのは無邪気な笑顔。

小柄な肢体、小さな手。その背に生えた白い翼—— 哀れなほどに一途な、彼の守り手。

（……フイー……）

リヴレの言葉を素直に読み解くならば、彼女はこの自分を救う為に地上に降りた事になる。……その手で、この月に対する『敵』を排

除する為に。

万が一、失敗したところで、リヴレには何の痛みも生じない。その責は、主であるソーヤに向かう。

「俺を拘束したのは、その為ですか。最初からそうするつもりで……？」

全ての罪をソーヤに押し付け、彼を含んだ穏健派を牽制する為に。

問いかける言葉に、リヴレは薄く笑った。

「私は危険人物の暴走を事前に阻止しただけだが？」

詭弁なのは明らかだった。そもそも、ソーヤに月を掻き回す意図はなかったのだから。理解が得られるまで、ただ訴え続けるつもりでいたのだ。

それを証明するように、リヴレは続ける。

「…不要なのだよ、あんな穢れた場所など。この月が存続する為に必要であるから、仕方なしに維持を手助けしていたがね」

吐いて捨てるようなそれは、《マリス》を統括する人間が口にするには、あまりにも過激な言葉。だが、同時に事実でもあった。

「逆に聞きたいものだ。君は何故、あのような場所に心を傾ける？  
すでにあの大地は死んだも同然。何も生み出せない不毛の塊だろう」

地上は手の尽くしようもないほど穢れ、そこにいるだけで死に片足をつ突っ込んでいるようなもの。復興は絶望的——それが《セレス》の導きだした結論だった。

それはソーヤもわかっていて、わかっただけで、だからこそ地上とわかり合いたいと願ったのだ。

ここに迎え入れる事は不可能でも、地上よりはるかに進んだ各種技術があれば、彼等の苦痛をいくらかなりと軽減出来る。死へと向かう時間を、僅かでも遅くする事が出来る。

もちろん、彼等がそれを望むかどうかは別の話だ。

ただ、もし地上に自分の『家族』がいるのなら、出来る限りの手

を尽くしたい。もうすでに誰も残っていなかったとしても、自分が生まれた場所を自分から見限りたくなかった。

——それが、ただの自己満足に過ぎないのだとしても。どうしても、諦めたくなかった。

（駄目だ…早まるな、フィー…！）

祈るように、今はこの場にいない彼女に願う。

この自分の命を盾にされているのなら、たとえ理不尽な命令であろうと、彼女は受けるだろう。そして遂行しようとするだろう。

そもそも彼女達は、管理者たる《マリス》に逆らえはしない。それでも思わずにはいられなかった。

（…頼む、思いとどまってくれ）

本当にそれを実行に移してしまったら、おそらく取り返しのない事態になる。

温厚な表情に冷徹な計算高さを隠したマリス：リヴレ——唯一の誤算があるとするなら、ただ一点、彼の翼を刺客に使った事だ。

（どうか、その手を汚さないでくれ……！）

そうなればマリス：リヴレの思う壺だ。

彼女は普通の《翼》とは違う。ただ黙って主に従うだけの存在ではない。それが今回どう影響するのかまったく予想がつかない事が、逆に唯一の希望と言えた。

何より、彼女の主である彼がそれを望んでいない事に、気付いてくれればいいと思う。

彼女は盲目的なほど、ソーヤしか見ない。無体な事を強いた事はないが、彼が願えば好意をもって従ってくれた。

感情面が乏しいエフェラが多い中、主への好意を隠さない彼女は明らかに『異質』だ。

けれど——その一方で、どうして彼がそんな事を望むのか、その理由までは目を向けない。彼が彼女を、実の妹のように思っている事も、おそらく気付いていないだろう。

それが、『作りもの』である何よりの証。

（俺は…君に、出来るだけ『人』のように生きて欲しいんだ）  
まるで、『家族』のように思っている。

他人ばかりのこの場所で、唯一の暖かな存在が彼女だった。  
人の命を奪っても、彼女は何も感じないかもしれない。これで主  
が救われると、喜んでしまうかもしれない。

それが、何より恐ろしかった。

（何とか…しなければ）

状況は拘束されているというだけでも圧倒的に不利な上に、おそ  
らくさほど猶予も残されていない。

だが、彼女を止めるには自分がこの窮地から脱するより他はない。  
ソーヤは目の前の男を無言で睨み上げた。

（…このまま終わって堪るか）

勝率はゼロに等しい。しかし、ソーヤはその無謀な戦いに挑む事  
を密かに決意した。

己にとって大切なもの、その全てを守る為に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1105n/>

---

翼の末裔

2011年6月24日02時40分発行